

# pen

with New Attitude

故きをたずね、新しきを知り、  
民藝の“いま”を紐解きます

2

Feb. 2025  
No.561

特別企画  
Pen オリジナル  
芹沢銈介  
ポストカード

綴じ込み付録  
いま買いたい、  
暮らしを楽しむ  
民藝カタログ

## たのしい民藝



pen

with New Attitude



## CONTENTS

### 20 たのしい民藝

### 22 加藤シゲアキ、芹沢銈介の仕事に触れる

### 28 自由だから広がる、民藝の楽しみ方

奥村 忍 (みんなげい おくむら店主) 柳原照弘 (デザイナー)  
セシリエ・マンツ (デザイナー) 大脇千加子 (ワンダーフルライフ主宰)  
小嶋万太郎 (池半 亭主)

### 40 モギ フォークアートが語る、“好き”と感性に導かれる民藝との出会い

### 44 いまこそおさらい、民藝ってなんですか？

濱田琢司 (関西学院大学文学部教授)

### 49 年表でたどる民藝

### 50 柳 宗悦が残した、心に響くことば

### 52 “割り切れない美”をともに悦びながら継承していく

高木崇雄 (工藝風向 店主)

### 54 深澤直人が考える、民藝の奥行きと無限の可能性

### 56 民藝を愛し、自ら体現した芹沢銈介の仕事

### 60 民藝の心を継ぎ未来へとつなぐ、 つくり手たち

坂本 創 (小鹿田焼 陶工) 菊地流架 (真鍮 作家)  
渡慶次 弘幸 (木地師)・渡慶次 愛 (塗師)

### 74 イギリスの海辺の街、セント・アイヴスにリーチ工房を訪ねて

### 80 泊まりながら体感、民藝と過ごす宿

楽土庵 (富山県砺波市) 杜人舎 (富山県南砺市)  
撚る屋 (岡山県倉敷市) 滔々 (岡山県倉敷市) 谷屋 (岐阜県高山市)  
松本ホテル花月 (長野県松本市) ホテル シツ (島根県出雲市)



「ペン」2月号 通巻561号  
発行所  
株式会社CCCメディアハウス  
〒141-8205  
東京都品川区上大崎3-1-1  
編集 03-5436-5783  
販売 049-293-9553  
広告 03-5436-5730  
発行人 菅沼博道  
編集長 石川康太

印刷・製本 大日本印刷株式会社  
© CCC Media House Co., Ltd. 2025  
本誌掲載の記事、写真、イラスト  
の無断転載を禁じます。

本誌にて掲載の商品は、すべて消  
費税込(標準税率10%もしくは軽  
減税率8%)価格です。

本誌にて掲載された店の営業日  
時、施設の開場日時、イベントの  
開催日時、商品の価格や発売の状  
況、およびこれらの内容は予告な  
く変更されることがあります。

Cover Photo

photographs by Jun Udagawa

pen

with New Attitude

## CONTENTS

### 特別企画

- 58 Penオリジナル 芹沢銈介ポストカード

### 綴じ込み付録

- 131 いま買いたい、暮らしを楽しむ民藝カタログ

- 94 LOUIS VUITTON  
Sophisticated Dog Walker

- 100 熱気球旅行への憧れをかたちにした、  
ルイ・ヴィトンのタイム・オブジェ

- 110 最高峰のヨットレースを支える、  
ルイ・ヴィトンの革新的なヴィジョン

- 124 次世代のクリエイターに光を当てる、  
Penの「NEXT」プロジェクトとは？



- 13 HEADLINER  
14 エースをねらえ  
16 WORLD UPDATE  
19 はみだす大人の処世術 小川 哲  
88 並木教授の腕時計デザイン講義  
92 BREAKING クリエイションの新たな開拓者たち  
120 創造の挑戦者たち  
147 ART BOOK CINEMA MUSIC DESIGN  
152 ARCHITECTURE FILE  
154 白モノ&黒モノ 家電コンシェルジュ  
156 グルーミング研究所  
158 プロの自腹酒  
159 New & in the News  
160 東京車日記  
162 小山薫堂の湯道百選  
163 次号予告



pen

with New Attitude

今月の注目アイテム

# HEADLINER

写真: 渡邊宏基 (LATERNE)  
photograph by Hiroki Watanabe

過酸化水素水を使った  
ウルトラピュアな香りは、  
新しいのに懐かしい



香りは“理性”をはねつける。五感のなかで匂いが最も本能に結び付いているように感じるのは、嗅覚が唯一、大脳辺縁系へ直接伝達されるため。ときに記憶と結び付き、香りによって過去の感情がリアルに呼び覚まされることもある。

コム デ ギャルソン・パルファムが30周年を記念してつくった香水、「オデュー テン」は過酸化水素水の香りをベースにしている。消毒液や髪の毛のブリーチ剤に使われる化合物だが、つけてみると想像以上にやわらかく丸みがある。過酸化水素水が選ばれたのは、「究極の清潔感」と「まったく新しいのに、記憶にある懐かしさ」を表現する

ため。アルデヒド、ホワイトミント、ムスクに似たアンブレッドシードなどが調合されており、ひと筋縄ではいかない複雑な香りに仕上がっている。嗅いだことのない新しい香りなのに、確かにどこか懐かしい感じがするのは、微かなグリーンノートが野原や森で遊んだ記憶を蘇らせるからだろうか。

当初から「アンチ・パフューム」を標榜し、装いを完成させるためではなく、自らを奮い立たせるための香水づくりをしてきたコム デ ギャルソン。既成概念を覆し、新しいものを追求めるブランドが作り出す香りは、挑戦し続ける人の背中を押してくれるだろう。

## コム デ ギャルソン・ パルファム オデュー テン

発売から30周年を記念し、新たにリリースされた香水。「オデュー 53」「オデュー 71」「オデュー・デュ・テアトル・デュ・シャトレ」に続くシリーズ第4弾。過酸化水素水の香りをベースに調合し、清潔で純粹、かつ丸みを帯びた香りに仕上がっている。漆黒のシンプルなボトルも端正な佇まいだ。国内直営店などで販売中。¥30,800  
／コム デ ギャルソン ☎03-3486-7611

# LOEWE

ロエベ



## 大人の魅力を引き立てる、艶革のパズルバッグ

レザーピースを幾何学的に組み立てたロエベの「パズルバッグ」。2025年に誕生から10周年を迎える逸品が、「革のカシミア」とも称されるディアスキン(鹿皮)を纏って登場した。軽量かつしなやかな革は、シボ感とほどよい艶が特徴。大人の色気を醸すバッグをスタイリングの最後のピースとして投入すれば、お洒落のパズルも完成する!? バッグ(H23.5×W32.5×D14.5cm) ¥616,000、ジャケット ¥311,300、Tシャツ ¥94,600、パンツ ¥262,900 / すべてロエベ(ロエベ ジャパン クライアントサービス ☎03-6215-6116)

## エースをねらえ

VOL.27

写真:高木将也 スタイリング:オクトシヒロ 文:飯野僚子  
photographs by Masaya Takagi styling by Toshihiro Oku text by Ryoko Iino



## 米仏のトラッドが共演、特別なネイビーシューズ

アメトラの雄ブルックス ブラザーズがパラブーツとコラボし、定番人気の「シャンボード」をアレンジ。フレンチアイビーの流れを汲む丸みのあるシルエットはお馴染みだが、ネイビーのアップーとステッチ、タグを排したデザインで、装いを一新。紺ブレを羽織って、足元もネイビーにしてさりげなくリンクさせれば、春らしい新鮮な気分。シューズ¥96,800／ブルックス ブラザーズ×パラブーツ、パンツ¥17,600／ブルックス ブラザーズ(ともにブルックス ブラザーズ ジャパン ☎0120-02-1818) 他は私物

## BROOKS BROTHERS × PARABOOT

ブルックス ブラザーズ × パラブーツ





## LONDON

[ロンドン／イギリス]

文:宮田華子  
text by Hanako Miyata世界に誇る“デザイン大国”英国を、  
グラフィックデザイン史から紐解く1冊

デザイン先進国、英国ならではの書籍が発売された。『Modernist Graphic Design in Britain 1945-1980』は、デザイン大国としての立場を固めるまでに至った第二次世界大戦後の約35年間を、グラフィックデザイン視点で解説する注目の書だ。

終戦後の緊縮財政や冷戦などに直面した厳しい時期、イギリスでは多くのデザイナーが“デザインの力”で国と社会を盛り立てようと挑んでいた。この時代に制作された雑誌、ポスター、タイポグラフィなど多岐にわたる作品からは、傷ついた国が息を吹き返すさまが見て取れる。デザインと各時代の密接な関係だけでなく、有名な無名にかかわらず国内のデザイナーを紹介する興味深い1冊だ。

<https://the-modernist.org>



1. 著名デザイナーのイアン・マクラレンとデザイン学者、トニー・ブリチャードが執筆。500部限定で出版されている。2. 反戦団体「Committee of 100」が1961年に行ったデモのポスター。政治・社会に関わる作品を多く手掛けたロビン・フィオール(1935-2012)によるデザイン。

## WEST COAST

[西海岸／アメリカ]

文:稲石千奈美  
text by Chinami Inaishiクラフトビールかと思いきや……  
アルコール度7%のコンブチャが流行中!

プロバイオティクス(善玉菌)の働きによる健康・美容効果が期待され、世界中で根強い支持を集めている発酵ドリンクのコンブチャ。最近では、発酵過程を操作することでアルコール度を高とした“ハードバージョン”がバーなどでも登場している。

なかでもビールと同様に、カリフォルニア産のハードコンブチャをタップから生で提供する「リクリエーションカフェ」が話題。アルコール度は7%とやや高めだが、微発泡系のふわっとした飲み心地とフルーツやハーブ系のフレッシュフレーバーが人気だ。その日の気分でノンアルコールとハードを飲み分ける「ブーチ(コンブチャ愛飲者のスラング)2.0時代」が、LAから世界に発信されつつある。

[www.recreation.cafe](http://www.recreation.cafe)



1. ビールと並び生でサーブされるコンブチャはシードルを思わせる味わい。2. メニューボードの「ON TAP」とは、タップからの提供を意味。上から2番目の「パイナップルパッションフルーツ」が7%のアルコールを含む話題のハードコンブチャ。数種類のフレーバーを随時入れ替えて提供している。

## CAIRO

[カイロ／エジプト]

写真&文:木村菜穂子  
photos & text by Naoko Kimura20年越しの大プロジェクトが完了間近!  
ついに一般公開された大エジプト博物館

国家の威信をかけた一大プロジェクト「大エジプト博物館」。20年越しのプロジェクトがほぼ完了し、ついに試験オープンに踏み出した。現在オープンしているのは、メインホールと約65mの大階段、12のギャラリーからなる常設展示場だ。

展示はエジプト文明の始まりから古代ギリシャ・ローマ時代に至るまでの収蔵品を集結。なかでもファラオや神々を中心に50体以上の像が立ち並ぶ大階段は迫力満点だ。今後はツタンカーメンの展示場などがオープンする予定で、最終的な展示物は10万点におよぶといわれている。ひとつの文明を扱う博物館としては世界最大級で、既に国内外の熱い注目を集めている。

<https://grandegyptianmuseum.org>



1. メインホールでは、ラムセス2世の巨像が世界中の観光客たちを迎え入れる。2. 博物館の外観。ピラミッドを思わせる三角形モチーフが全体に施されている。展示品だけでなく、コンセプト的な建築も美しいと話題になっている。



photo: Claerchens Ballhaus



photo: Claerchens Ballhaus



1. 建物の1階はレストラン「黄金の月」。ダンスイベントは2階の「鏡の間」で開催する。夏は手間の庭がビアガーデンに。2. 料理の担当は日本をはじめ世界各国で経験を積んだシェフ、トビアス・ベック。写真は伝統的なドイツ料理シュニッツェルを分厚いヒラタケでアレンジしたもの。こちらも伝統がモダンにブラッシュアップされている。

## BERLIN

[ベルリン／ドイツ]

文：河内秀子  
text by Hideko Kawachi

### ベルリン最古のボールルームが、ブラッシュアップされて再び輝く

創業1913年の歴史あるボールルーム「クレアヒェンス・バルハウス」が、大々的にレストラン&ダンスホールとしてリニューアルオープン。創業111年という節目もあり、話題を呼んでいる。

オーナーのヨラム・ロートは、店から徒歩10分ほどのアートハウス「タヘレス」にある写真美術館のディレクター。ベルリンの芸術文化が華やかに盛り上がっていた“黄金の20年代(1920年代)”のイメージで、店内のインテリアをブラッシュアップした。ダンスホールではスイング、タンゴ、サルサにディスコと、幅広い世代に楽しんでもらえるプログラムを毎日展開。若い人には新鮮な、70歳以上の常連客にとっては懐かしい、誰もが楽しめる店だ。

<https://clærchensball.haus>

## MEXICO CITY

[メキシコシティ／メキシコ]

写真&文：長屋美保  
photograph & text by Miho Nagaya

### かつての軍の武器倉庫が、映画やアートのカルチャー拠点に!

メキシコシティ西部のチャプルテペックの森は、800ヘクタール以上の巨大な都市公園。2018年より政府が文化と自然をテーマにしたプロジェクトを立ち上げ、大改造が進んでいる。その一環として、かつて軍が武器の組み立てや保管を行っていた場所に、アート系映画のシネコンや国立フィルムセンターを運営するシネテカ・ナショナルが、市内3番目の施設を2024年9月にオープンした。鬼才建築家のマウリシオ・ロチャが担った同施設は、8つのスクリーンと屋外シアターを持つ。映画鑑賞料は一般70ペソ。25歳以下、学生、シニアは50ペソ。敷地内には映画やアートの学校も建設中で、世界一の文化的な森を目指すプロジェクトの核となりそうだ。

[www.cinetecanacional.net](http://www.cinetecanacional.net)

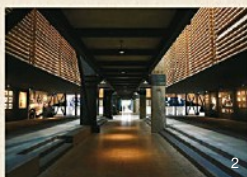


photo: CONACULTA

1. 森の中の屋外シアターは、誰でも無料で映画を鑑賞できる。この日は子ども向けの短編映画を上映していた。既に市民の憩いの場になっている。2. もともと武器倉庫だった場所をリデザインした館内には、映画関連の展示を行うギャラリーがある。今後は資料館、書店、カフェやレストランも入る予定だ。

## BUSAN

[釜山／韓国]

文：原美和子  
text by Miwako Hara

### 韓国の民藝グッズが、Z世代や外国人観光客の心をつかむ

韓国では最近、若者や外国人観光客を中心に、ハングル文字をかたどったり、民画をベースにした民藝調のグッズがブームだ。Z世代にとっては伝統や歴史を感じさせるデザインが斬新に映ること、外国人にとっては模様のように見えるハングル文字が不思議で、エキゾチックに感じるといった理由があるようだ。韓国のダイソーでは、この夏、お土産用や自分用としても使える手頃な価格の民藝調アイテムのラインアップがヒットし、軒並み売れ切れや品薄状態となった。韓国の民藝品はその多くが鮮やかな原色を用いており、華やかかつざらびやか。長年、国民に親しまれているものは、デザイン的にも強さがあると言えるのかもしれない。



photo: 韓国観光公社



1. お酒を飲むのが楽しくなりそうな、お洒落な焼酎グラス。いかにも韓国らしい虎や鮮やかな色の花、鳥などが描かれている。韓国ダイソーの「ハングルシリーズ」から。2. ゴージャスで華やかな雰囲気なのが韓国の民藝品の特徴。写真は 螺鈿(らでん)細工が施された箱。角度によっていろいろな色に輝く貝殻を加工して装飾している。



pen

with New Attitude

# はみだす大人の処世術

“人の世は住みにくい”のはいつの時代も変わらない。  
煩わしい場面を、作家・小川哲はどう切り抜けるのか。

文・小川哲

僕は生まれてからこの方(そしておそらくこれから死ぬまで)、自他ともに認める「ひねくれ者」なのだ、実は「ひねくれ方」にも変遷があったりする。

子どもの頃は、「間の抜けたひねくれ者」だったと思う。間違はなくひねくれ者ではあるのだが、ひねくれ者としての自覚が足りないというか、頭の使い方に甘いところがあつて、完全にひねくれることができずにいた。たとえば母親から「テレビゲームは1日30分以内にしない」と言われると、僕は「なぜ?」と聞き返し、「他の家庭でもそうしていること」が理由だった時などは、「じゃあ他の家庭では毎日朝食に味噌汁が出るのでも出してほしいし、他の家庭では習い事に送り迎えがついているのでもうちでもそうしてほしい」などと言って、共働きで時間のない母親の弱みにつけこんだりしていた。当時から僕は「みんなやっている」とか「他ではそうしている」とか、そういった理由によってなにかを命令されることが大嫌いだったので、ひねくれ者と呼ばれることは多かつたけれど、とはいえずひねくれ方に関する知識不足のせいで少し間の抜けたところもあった。

もう少し成長して青年期になると、ひねくれ方にも深みが生まれてきて、たとえば「チョコレート業界の都合でつくられたバレンタインデーを祝う意味があるのか」と

か考えるようになり、ひねくれ者としての精度が上昇していった。それまで友人と無邪気にチョコの数を競っていた小川少年が、「チョコの数を競うこと自体、大企業によってつくられた虚構に踊らされている」などと主張するようになっていく。

ひねくれ方のコツというか、ひねくれ者としての僕を大きく成長させてくれたのが、大学のサッカーサークルの同期だった小野という友人だ。彼はサークルの対抗戦の試合中にブツブツとひとりでなにかにキレていて、試合中は敵チームの誰かに怒っていることが多いのだが、どうやら味方にもキレていた。小野がブツブツ言っている内容をよく聞いてみると「お前ら誰かがシュートを打つと『ナイシュ(ナイスシュートの略)』って言うんだけど、シュートには本来『いいシュート』と『悪いシュート』の2種類があつて、味方が『悪いシュート』を打っているのに『ナイシュ』と言うのは思考停止じゃないのか?」とキレていた。僕はそれを聞いて、試合中に腹を抱えて笑ってしまった。確かにサッカーには味方のシュートに「ナイシュ」と声をかける文化があるが、それは思考停止なのかもしれない。それ以来、僕は文化や慣習や日常の中にある「思考停止」をも疑うようになり、「誰でも生きているだけで迎えることができる誕生日になんの価値があるのか」「暦という

## 第26回

## ひねくれ方の変遷

イラスト:柳 智之 illustration by Tomoyuki Yanagi



Satoshi Ogawa

1986年、千葉県生まれ。2015年に「ユートロニカのこちら側」(早川書房)でデビュー。『ゲームの王国』(早川書房)が18年に第38回日本SF大賞と第31回山本周五郎賞受賞。23年1月に『地図と拳』(集英社)で第168回直木賞受賞。近著に『スメラシング』(河出書房新社)がある。

恣意的なシステムが更新されるだけの正月になんの価値があるのか」と、応用編のひねくれ方をしていくようになる。「ひねくれ過激派」だった頃の僕は、就職した友人と仕事後に飲んだ時、「1杯目はとりあえず生ビールで」などと言って生ビールを飲むことにも「思考停止だ」と腹が立っていた。  
で、そんな時期を過ごしているうちに、ひねくれ者にも傾向というか、共通の特徴のようなものがあるような気がしてきて、世に大勢いる「俺、ひねくれてるんですよ」などと自己紹介する、自称ひねくれ者と自分が似ていることが無性に恥ずかしくなってきた。音楽や映画の流行に乗ることが思考停止なら、「大衆向けだ」と無批判に貶す仕事そのものも思考停止に思えてきたのだ。というわけで、いまの僕はひねくれ者すらも嫌悪する「ひねくれ界のひねくれ者」という、意味不明な人間になっている。

# たのしい民藝

2025年は、「民藝」という言葉が誕生して100年目となる記念の年だ。  
そしていまなお、世代を超えて多くの人が民藝に魅了されている。  
“個”が立ち、主張することがもてはやされる現代において、  
「民藝は無銘なのです」「伝統は個人の脆さを救ってくれる」と語った  
民藝の提唱者、柳宗悦の言葉はかえって新鮮に響くのかもしれない。  
本特集ではその思想と歴史を優しく紐解きつつ、  
近年のブームの立役者や注目のつくり手たちにインタビュー。  
さらに、目利きたちに現代の暮らしに合う楽しみ方を教えてもらった。  
いま私たちが日常の中で出合う民藝の姿とは？  
日々の暮らしに寄り添ってくれる、その魅力にフォーカスしたい。

写真:宇田川 淳 photographs by Jun Udagawa

榎(かば)細工や器、マグ、風呂敷やストールなど身の回りにはたくさんの民藝品がある。一つひとつ細部に目をやれば、手仕事にしかない「職人たちの手技の無数の反復」(柳宗悦)の美しさや素材の魅力が生き生きと伝わってくる。

参考文献:

『民藝 MINGEI 美は暮らしのなかにある』展図録 2023年 朝日新聞社  
『新編 民藝四十年』柳 宗悦著 2023年 ちくま学芸文庫  
『わかりやすい 民藝』高木崇雄著 2020年 D&DEPARTMENT PROJECT  
『芹沢銈介の日本』(別冊太陽) 2021年 平凡社  
『民藝の心が生きるまち: 南砺市民藝調査報告書』2024年 南砺市



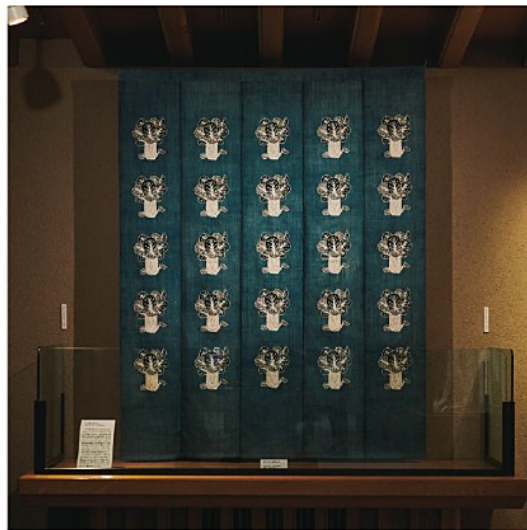




# 加藤シゲアキ、 芹沢銈介の 仕事に触れる

NEWSのメンバーであり作家としても活躍する加藤シゲアキが、静岡市の芹沢銈介美術館を訪れた。そこで出会ったのは、民藝運動に参加した染色家・芹沢の素朴で美しい作品の数々だ。

写真:田邊 剛 スタイリング:飯垣祥大 ヘアメイク:KEIKO 編集&文:佐野慎悟  
photographs by Go Tanabe styling by Shota Iigaki hair & make-up by KEIKO edit & text by Shingo Sano



芹沢銈介美術館の企画展「型染色と模様の翼」を訪れた加藤。最初に迎えたのは、1929年に制作された芹沢銈介のデビュー作とされる、ろうけつ染の『杓子葉文間仕切』を、75年に型染で再制作した作品。杓子葉という素朴なモチーフ選びに、温かみのある魅力が宿る。

静岡市の登呂遺跡公園の一角にある芹沢銈介美術館は、かつて柳宗悦によって見出され、世界的な評価を得た染色家・芹沢銈介が、自身の郷里である静岡市に寄贈した約600点の作品と、約4500点におよぶ工芸品コレクションを核に、1981年に開館した市立美術館だ。ここでは年に4回開催される企画展示のほか、作品の



## 静岡市立芹沢銈介美術館

●静岡県静岡市駿河区登呂5-10-5  
☎054-282-5522  
🕒9時～16時30分  
📅月、祝日の翌日、年末年始、展示替期間中  
🎫一般¥420 ※各種割引あり  
[www.seribi.jp](http://www.seribi.jp)

Shigeaki Kato

1987年、広島県生まれ。2004年にNEWSとしてメジャーデビュー。アイドルグループのメンバーとして活動しながら、12年には『ピンクとグレー』で小説家デビュー。20年の『オルタナート』が第164回直

木賞候補作となり、翌年には同作で第42<sup>回</sup>吉川英治文学新賞を受賞した。

正義の赤い隈取で変身！親子2代で

ハヤッタタイムレスヒーロー

ジャケット ¥84,700、シャツ ¥52,800、  
パンツ ¥60,500（すべてカルティエ 03-6441-  
3661） ニット ¥49,500 / エイトン（エイ  
トン 青山 03-6427-6335）

加藤シゲアキ  
アーティスト／俳優／作家

□□□□□□□□□□

■□○128W程98年～年まで仲代達矢主宰の『無名塾』に在籍し、舞台を中心に演技力を磨く。2008年、映画『クライマーズ・ハイ』で一躍脚光を浴び、映画『クズ・ハイ』で98年～年まで仲代達矢主宰の『無名塾』に在籍し、舞台を中心に演技力を磨く。

保存収集、調査研究などを通して、かつて民藝運動の一翼を担い、生涯を通して創作活動を続けた芹沢の芸術と偉業を後世に伝える。芹沢生誕130年を迎える2025年は、厳選した代表作50点に加え、芹沢が収集した日本の工芸品200点を紹介する『芹沢銈介の収集 日本篇』が1月4日から始まるほか、注目の企画展示が年間を通して予定されている。

この芹沢銈介美術館を初めて訪れた加藤シゲアキは、24年の10月から2カ月間開催されていた芹沢銈介没後40年記念展『型染色と模様の翼』を通して、芹沢が得意とした「型染」の魅力に触れた。

「どの作品にも身近で素朴なモチーフがとても鮮やかな色彩で描かれていて、型染って、こんなにかわいいんですね。美術館で観る高尚なアートは日常から距離のあるものが多い印象ですが、やはり生活道具の中に美しさを見出した、民藝らしい普遍的な魅力や温かさが感じられます」

シンプルで親しみやすい芹沢の作品を観て回りながら、加藤は「民藝運動」への理解とさらなる興味を深めていく。

「これまでもなんとなく、『民藝とはこんなもの』というイメージを持っていましたが、その定義みたいなのは自分の中で漠然としていて、いざ『民藝とはなんですか？』と聞かれたら、うまく答えられる自信はありませんでした。





芹沢の作品の中には人物のモチーフも数多く登場するが、そのほとんどが手仕事に携わる職人たちの姿。これらの作品は、伝統的な製法で和紙をつくる紙漉場の風景を切り取り、その製作風景を説明する芹沢自作の詩を添えたもの。 右：『和紙讃』（1947年頃） 左：『和紙讃』（1949年頃）



中央の屏風は、1940年頃に製作された『東北めぐり六曲屏風』。東北地方をはじめとした8室(益子、小菅、成島、平清水、新庄東山、楡岡、久慈、堤)に取材した作品だ。この部屋には他にも『法然上人御影』（1938年）や『苗代川春景』（1943年頃）といった初期の作品が並ぶ。

## 生活道具に美しさを求めることは、 とても自然な行為だと気付かされました



右側に宮城県「養」、左側に青森県「けら」を配置した『養園二曲屏風』（1957年頃）。描く対象物を大胆にモチーフ化することが多い芹沢だが、この作品ではあえて型染による写実的な表現に挑戦している。首周りの編み込み模様もていねいに再現されている。



沖縄の紅型(びんがた)の美しさに魅せられた芹沢は、柳宗悦ら民藝協会のメンバーとともに沖縄の各地を旅して回った。その取材旅行から持ち帰った大量のスケッチをもとに、芹沢は数多くの傑作を生み出した。手前は『沖縄風物』（1948年）より、市場の風景。

でもこうやって実際の作品を見ていくと、根底にある価値観がダイレクトに伝わってきますね」  
加藤は数ある作品の中でも、特に蓑や笠といった生活道具をモチーフにした作品に目を留めた。  
「民藝の美しさを、民藝の作品の中に表現するという視点も、ある意味独創的で面白いですね。でもこういうところにも、無名の職人による素朴で実直な手仕事に対する、芹沢銈介の深い愛情が垣間見える気がします」  
美術館の学芸員による説明の中で、芹沢が晩年にいちばん尊敬する人について聞かれた際に、「職人さん」と即答したエピソードを聞き、加藤はまた深く頷いた。  
「民藝で注目された生活道具の中にある美しさっていうものは、元をたどると、それを毎日使っていた人たちが、せっかく使うなら味気のないものよりも、なにか少しだけ遊び心を加えて、より愛着を持って使えるようにしたものだったのかもしれないんです。この美術館の前にも弥生時代の登呂遺跡がありますが、ああいった土器の時代から既に、生活道具に対して当たり前のようには美しさを求めてきたことを考えると、柳宗悦が牽引した民藝運動も然り、とても自然な行為だったんだと納得できました。ただ、そうやってプリミティブな価値観にスポットライトを当てる運動が、西洋化、近代化に進む日本社会の大きなうねりの

でもこうやって実際の作品を見ていくと、根底にある価値観がダイレクトに伝わってきますね」  
加藤は数ある作品の中でも、特に蓑や笠といった生活道具をモチーフにした作品に目を留めた。  
「民藝の美しさを、民藝の作品の中に表現するという視点も、ある意味独創的で面白いですね。でもこういうところにも、無名の職人による素朴で実直な手仕事に対する、芹沢銈介の深い愛情が垣間見える気がします」  
美術館の学芸員による説明の中で、芹沢が晩年にいちばん尊敬する人について聞かれた際に、「職人さん」と即答したエピソードを聞き、加藤はまた深く頷いた。  
「民藝で注目された生活道具の中にある美しさっていうものは、元をたどると、それを毎日使っていた人たちが、せっかく使うなら味気のないものよりも、なにか少しだけ遊び心を加えて、より愛着を持って使えるようにしたものだったのかもしれないんです。この美術館の前にも弥生時代の登呂遺跡がありますが、ああいった土器の時代から既に、生活道具に対して当たり前のようには美しさを求めてきたことを考えると、柳宗悦が牽引した民藝運動も然り、とても自然な行為だったんだと納得できました。ただ、そうやってプリミティブな価値観にスポットライトを当てる運動が、西洋化、近代化に進む日本社会の大きなうねりの



人間国宝となり全国的な知名度を得た芹沢は、60代で作家としての円熟期を迎えた。その時期の作品群に触れ、民藝の楽しさを再認識する加藤。後ろは『養宝つくし文壁掛(夜具地)』(1957年) 柏市蔵。手前ケース内は『いろは文字文帯地』(1958年)。







芹沢銈介の制作の中でも最もポピュラーで、現在でも高い人気を誇るもののひとつに暖簾が挙げられる。写真左は『この山みち文のれん』(1959年)、右は『壺屋の窓文のれん』(1970年) 柏市蔵。



上：中央の屏風は密教の種子曼荼羅から着想を得た『四季曼荼羅図二曲屏風』(1971年)。四つの吉祥模様を中心に、春夏秋冬、東西南北の文字を周囲に配し、悟りの境地を表現。キャリア最後期の作品ではあるが、初期の作品から続く、シンプルで力強いデザインが見られる。下：前述した『養宝つくし文壁掛(夜具地)』や『いろは文字文帯地』をはじめ、1950年代後期から60年代の作品が中心に並ぶ展示室。この時期は工房などの制作環境が整えられたこともあり、斬新な模様が数多く生まれた。※所蔵先の記載がない作品は、すべて静岡市立芹沢銈介美術館蔵。

中で起こったということに、ある種のカウンターカルチャー的な力強さも感じます」  
 そうして加藤は、芹沢銈介が遺した作品を一つひとつ注意深く眺めながら、彼がそこに託した想いや、時代背景にまで思考を巡らせていく。

みたいと思わせるような身近さがあります。日常の暮らしの中で使う道具に美を見出すという民藝の視点を活かして、たとえばいまの作家であれば、どのようなアプローチでものづくりをするのか、そんなところまで、どんどん興味が湧いてきました」  
 時を経てなおモダンに映る民藝の魅力を再認識した加藤。この出会いが彼の活動になにをもたらすのか、興味は尽きない。



## 芹沢銈介の家

●静岡県静岡市駿河区登呂5-10-5  
☎054-282-5522 (芹沢銈介美術館)  
🕒9時～16時30分  
📅月～土 (美術館開館日の日曜と祝日のみ公開) 入場無料

芹沢銈介美術館には、付属施設として1987年に東京都大田区蒲田から移築した「芹沢銈介の家」があり、美術館開館日の日曜や祝日に無料で一般公開される。芹沢が暮らした当時の様子を再現するもので、世界中から収集した椅子、ソファ、テーブルなどの工芸品が並ぶ。



「芹沢銈介の家」の部屋の中に立ち入ることはできないが、玄関前にある鉄製のベンチは芹沢がデザインしたもので、自由に座ることができる。洋服は前ページと同じ。シューズ¥168,300/ジェイエムウエストン(ジェイエムウエストン 青山店☎03-6805-1691)



上：1階の応接室の壁には、芹沢が生涯師と仰いだ柳宗悦の写真が飾られている。下：「芹沢銈介の家」は、もともと宮城県登米市石越町にあった古い板倉を芹沢が気に入り、東京都大田区蒲田に移築して改築し、自宅の一部としたもの。元はふたつの部屋に仕切っていた一階部分は、間の壁を抜いて一部屋にして使っていた。人が暮らした古民家ではなく、農具や米などを保管した倉だったこともあり、飾り気のない簡素なつくりが特徴。芹沢自身は「ぼくの家は農夫のように平凡で、農夫のように健康です」と語り、生涯愛着を持って暮らしていたという。



# 自由だから広がる、 民藝の楽しみ方

日々なにげなく使ったり、飾って楽しんだり。  
使い方はさまざまに、民藝は暮らしの中にある。  
民藝店の店主やデザイナーなど、デザインの目利き5名に、  
お気に入りのアイテムや楽しみ方を聞いた。

写真: 吉田 塩、中島光行、松浦摩耶、竹之内祐幸、伊藤 信 文: 猪飼尚司、小長谷奈都子 コーディネート: 冨田千恵子  
photographs by Sio Yoshida (P28~31), Mitsuyuki Nakajima (P32~33), Maya Matsuura (P34~35), Hiroyuki Takenouchi (P36~37),  
Makoto Ito (P38~39) text by Hisashi Kai (P28~37), Natsuko Konagaya (P38~39) coordination by Chieko Tomita (P34~35)

## 環境に溶け込む 心を和ませる、 民藝の懐の深さ



国内外の民藝を幅広く紹介するウェブショップ「みんげい おくむら」の奥村忍。自宅から徒歩圏内にあるオフィスでは、友人を招いて頻繁に食事を開催することから、大きなキッチンカウンターを設置。すぐ脇の使い勝手のいいステンレス製のオープンシェルフには、お気に入りの民藝の器がずらりと並んでいる。

「たくさんさんの工業製品に囲まれた都心のマンション暮らしでも、温もりを感じる手仕事は塩梅よくミックスしていけるものです。暮らしすべてを民藝にする必要はあり



## 奥村 忍

みんげい おくむら店主

Shinobu Okumura

1980年、千葉県生まれ。慶應義塾大学卒業後、商社で輸入業務、メーカーでバイヤーを経験。2010年に独立し、ウェブショップ「みんげい おくむら」をオープンする。ていねいな現代の手仕事、素朴な暮らしの道具を探し求め、国内外のものづくりの現場を訪ねている。



元は美容室だったスペースを改装した事務所。オープンシェルフに並ぶ器は、時代、地域ともにバラバラだが、「いまいちばんのお気に入り」というのが共通ポイント。



ません。その人のスタイルに合わせた付き合いができるはずだ」器好きの母の影響で幼少期からさまざまな焼き物に触れてきた奥村だが、自ら民藝に興味を持ったのは、会社員時代に大阪へ赴任した時のこと。

「会社にあてがわれたのがマンズリーマンションで、すべてが備え付け。そこには自分の好きなものがひとつもありませんでした。少しでも心が休まりほっとするものを手元に置きたくて、週末が来るたびに、民藝店や作家の工房を訪ねるようになっていきました」

この体験が高じて、自ら民藝店を営むようになったという奥村。実店舗を持たず、オンライン限定で販売し続けるには、明確な理由が存在する。

「同世代の人は民藝店にあまり足を運ばない。いまの時代、ウェブの力を借りれば、より広く人と交流し、民藝の魅力を伝えることもできる。そう思いながらウェブだけで活動しています」

一方で、つくり手のもとを直接訪ね、その暮らしぶりに触れながら、出来上がるものを自分の目で確認することは、オープン当時からの決まりごとになっている。

「ワインのテロワールのように、本来は土地の素材、暮らしぶりの違いが、地域ごとの特徴を持つものづくりとなる。暮らしが均質化した日本のいまでも、そんな『土地を表現する美しいもの』がある





#### 瀬戸本業窯の皿

上：江戸後期に瀬戸で誕生した「馬の目皿」は、庶民に親しまれてきた日用の器。どっしりと重みがあり、躍動感あふれる渦巻き模様を現代に受け継ぐ。  
下：同じ瀬戸で江戸時代につくられたもの。現在このニュアンスを出すことは難しいと、奥村は語る。



いちばん大切なものを並べた事務所の棚には、時代や地域を超えた民藝の豊かな世界が広がる。

ことを僕は伝えたいんです」  
民藝運動が始まった100年前と社会背景は大きく異なり、生活者のみならず、つくり手の暮らしも大きく変化した。民藝も大きく注目される存在となり、作家の動向はSNSを通じていち早く検索・拡散される時代。柳宗悦らが見た民藝と現代の民藝とは確かに違うものかもしれないと奥村は感じている。  
そんな時、あるきっかけから訪れ始めた中国内陸部で、日本のひと時代前のような暮らしから生まれている民藝の精神を纏った、圧倒的に美しい布や器と出合ったという。

止めることはできませんが、素朴な暮らしが残る辺境エリアなら、その日常を支える実直な道具がまだつくられているだろうと信じて訪ね歩いていきます」  
中にはつくり手の思惑どおりにできなかったものや市場では売りにくいものにも巡り合う。  
「困っている時はお互いさま。生まれてきたものをポジティブに捉え、多くには受け入れられなくとも、必ず好きな人がいるはずという姿勢で提案していきたい」  
店を始めてから今年で15年。忙しく世界を駆け回りながら、仕事を続けていられるエネルギーの源は、「民藝が好き」という気持ちにはかならないと奥村は語る。  
「経験を重ねるほどに好きなものも増えて、気持ちを共有したくなる。『これは面白い!』と思うものを紹介した時に、お客さんから反応がもらえるだけでも嬉しくなっちゃうんですね」



## 地域に根ざした民藝の 細やかな美しさも一緒に伝えたい



陶器が並ぶ棚には中国・台湾茶も。「家族で良質な茶を手づくりするのは彼の地の民藝」。



## アジア諸国の茶道具

銅製のやかんは、四川省でカジュアルにお茶を楽しむ喫茶施設「茶館」で使われていたもの。細い注ぎ口が特徴的。茶則は中国の骨董で、茶器は丹波窯の平山元康。片口の白い茶海は小鹿田焼の坂本創。4つ並んだ茶杯は中国・景德鎮、石の建水と茶器の下石皿はインドから。



## 松田共司のうつわ（読谷山焼北窯）

右、左：大嶺實清（おおみねじっせい）に師事した後、沖縄の読谷山焼北窯を開いた松田共司。双子の兄、米司はか4名の親方と共同で窯を運営する一方で、個人としての作陶も積極的に行い、その腕の確かさと意志に心を動かされると話す。奥村は現在、松田共司の作陶集を編纂中。2025年には刊行される予定だ。





# それぞれが 自由な物語を描ける、 その余白こそが魅力



李氏朝鮮の収納家具

農家で使われていたと思われる棚は、多様な組手で不揃いなパーツを器用に組み合わせたつくり。李朝家具としてはかなり厚手で丈夫な無垢板を使った珍しいタイプ。ものを置き続けたせいか、天板は少し歪んでいる。



李氏朝鮮のオープンシェルフ

垂直・水平の部材が交差する仕口を三角形に取っているのが特徴的。構造を支える上下の棚の厚みに対し、中央の棚板はかなり薄いものを選択。堅牢性を高めるために渡した背面中央の角材がアクセントで効いている。



大麻布でつくられた角袋

丹精を込めて織り上げた反物の端を再利用した穀物入れ。反物を斜めに折り合わせることで、底に縫い目が現れないパターンを採用。シンプルながら、構造をより丈夫にし、内容物が漏れないようにする工夫が感じられる。



Teruhiro Yanagihara

Teruhiro Yanagihara Studio主宰。プロダクトデザイン、インテリアデザイン、ブランドのディレクションなど包括的な提案を行う。神戸とフランス・アルルに持つスタジオ兼ギャラリーを含む世界5カ国の拠点から、国や文化の境界を越えたプロジェクトを手掛ける。

## 柳原照弘 デザイナー

デザイナーとして活動する一方で、神戸にスタジオ兼ギャラリー「ヴァーグ」を持つ柳原照弘。ヴァーグを訪れると、いたるところに置かれた趣のある民藝の品に目を奪われる。数々の名品を所蔵する一方で、現代における民藝との接し方に戸惑いを覚えた時期もあったと、柳原は話す。

受け継がれる民藝の現状と、自分が生活する環境にある大きなズレとはなんだろうか？ その理由を知るために、柳原はバーナード・リーチ本人が挽いた器から、無名の職人が手掛けた李朝家具や大麻布の衣まで、時代を超えた民藝の品々を入手。実際に自分の暮らしの中で使うことで、民藝が示す本質に近づこうと試みた。

「自分で多様に使いこなしていく中でわかったのは、美しい民藝は、素材や構造、用途のつながりがとても自然で、無理がないということ。時間が経過した後でも、手仕事の跡を追うと、当時どのように



つくり、使っていたのが明確に見えてくるんです」

環境と生産、生活と消費が一体となった民藝。これに似た存在として、柳原はイタリアの食材、バスタを例に挙げる。

「ひと口にバスタと言っても、本國に行く回数切れないほどのバリエーションがある。でも元をたどればそのかたちや製法は、地域ごとに採れる食材と料理の特性によって決まっている。このように素朴で本質的なものづくりは、それぞれの環境に沿うように自然に成長した形跡がうかがえます」

さらに民藝は、機能性だけがポイントではないと続ける。たとえばリーチの器は、使い勝手がいいものとは正直言い難いが、どのように盛り付けたら食事がおいしく見えるか、より美しいセッティングになるかを考える指標になる道具だと柳原は話す。

「使い続けながら、生活の空間や状況に応じて、それぞれが自由な物語を描き出すことができる。この余白こそが民藝の魅力であり、現代のデザイン思想にも活かすことができる視点だと思っています」

ヴァーグでは、ガラスケースには入れず、棚やテーブルの上に展示。さらに、併設のレストランでは、実際に料理やドリンクを入れて、サーブすることもある。

「実際に触れてこそわかる感覚を、ここでみなさんと共有できればと思っています」



#### バーナード・リーチの器

20年ほど前に国内で購入したバーナード・リーチの貴重なコレクション。ピッチャーはレストランの水差しとして、また、セント・アイヴスの窯で焼かれたタイルはコースターとしてヴァーグで実際に使っている。



コペンハーゲンにあるセシリエ・マンツのアトリエを訪れた際、彼女がコーヒーカップを載せて運んできたトレイは、どこかしら見覚えのあるものに似ていた。「これは日本の蚤の市で買った、お櫃の蓋。間違った使い方だとは思いますが、理にかなった丈夫なつくりでとても美しいかたち。お気に入りの民藝のひとつです」

陶芸家の両親に連れられ、初めて日本民藝館を訪れたのは3歳の時。その後も来日するたびに同館を繰り返し訪れている。

「民藝には共感を持っています。デンマーク語にはそれに相当する言葉がなく、柳宗悦とは生きていた時代も土地も違うため、そ

の本質がきちんと把握できているのかは定かではありません。でも自分が気に入って手に取るもの、身の周りに置いているものすべてに共通しているのは、『適切な機能性』だと思います」

前述のトレイのように、過ごす環境が変わったとしても、正しくつくられたものは時代を超え、使う背景を鮮やかに描き出す。

「余計な文脈を加えず、使われることだけを素直に目指したものは、50年、100年経ってもそのビュアさが際立ちます。名も知らぬ誰かがそれを一生懸命につくった様子を感じ取れるだけでも幸せで、心穏やかになります」

セシリエが語る機能性とは、ユ



コペンハーゲン市内にあるアトリエのシェルフ。プロトタイプや素材サンプルに混じって、セシリエが世界中を旅しながら蒐集した民藝が多数置かれている。

ーザーにとつての使い勝手を示したのではない。素材のあしらいや工法の選定など、製造過程の妥当性も含まれる。

「素材選びや歩留まりのよさに無駄がなく、道具としての目的と素直に合致しているかも、美しいものづくりには大切なこと」

たくさんの中からお客さんが自由に選択し、暮らしのしつらえが考えられる環境が整った社会で、デザイナーとして自身がどのようなふるまうべきか。この時に、民藝が示す「適材適所」の感覚は、大きなひとつの指針となると、セシリエは語る。

「拡大解釈かもしれないけれど」という前置きを加えた上で、民藝

は古物やハンドメイドなどだけに限定されるのではなく、日常的に私たちが使用する工業製品の中にも存在している感覚だと話す。

「焼き菓子の型や調理道具、気軽に水やワインを注ぐ簡素なグラスなど、便利に使い回すことができ、少し手荒に扱っても壊れない。意識せずともずっとそばに置いている、慎ましかな道具で、私は愛情を持って、こうしたものたちを『ネオ民藝』と呼びたいです」

正しくつくられ、使われるものは錆びることなく、愛され続ける。民藝から感じ取る「適材適所」の感覚を胸に、これからも暮らしに必要とされるものをつくり続けたいと話してくれた。



Cecilie Manz

1972年、デンマーク生まれ。ヘルシンキ芸術デザイン大学交換留学を経て、97年、デンマーク王立芸術アカデミー卒業。98年、コペンハーゲンに自身のスタジオを設立する。家具、食器から照明、電化製品まで、幅広くデザイン。日本企業との協業も多数手掛ける。

## 民藝から知る、 素材の見立てと 適切な機能性

## セシリエ・マンツ

デザイナー



## 世界各国の編みかご

右はフィンランドで購入したバーチ材のもの、左2点はメキシコで見つけたラフィアを編んだもの。土地ごとに素材や編み方が違っているのが気になって購入。旅行をするたびに、家にどんどんかごが増えてしまうとか。



## 100年前の麦わら帽

お気に入りのイッセイミヤケの白い帽子の下から顔をのぞかせているのは、粗い編目のヴィンテージの麦わら帽。家族が購入したサマーハウスに置かれていたもので、祖母が好きでいつも被っていた記憶があるという。



## 竹製の釜

日本製の魚獲り用の仕掛けは、来日した時に出かけた蚤の市で見つけたもの。素材の特性を活かし、精密に維持することで生まれる網目の強度、自立するかたちや持ち運びのよさなど、日本のものづくりの粋が集まった逸品。



## “ネオ民藝”の工業製品

素朴な佇まいと使い勝手のよさが気に入って、自宅ですっと使い続けている工業製品。これこそが現代における民藝だと断言する。右から順に、フランス製のジャム瓶、フィンランドのマッシャー、白山陶器のピアコップ。







横田安の箱

茨城・笠間で磨き土器を制作する陶芸家の横田安。新しいトライアルに果敢に挑む横田の姿勢に応えようと、上下にスライドする扉と側面に穴を開けることを提案。中にキャンドルを入れるとやわらかな光が漏れる仕組みに。

# 大脇千加子

ワンダーフルライフ主宰

Chikako Owaki

イッセイ ミヤケを経て、自身のファッションブランド Kitcha(キチカ)、cokitica(コキチカ)を立ち上げる。2016年にWONDER FULL LIFEをスタート。染、陶芸、真鍮、漆、織物など、国内外のつくり手たちと協働しながら、分野を横断した創作活動を行う。



## 特定の人が占有するのではなく、シェアするもの

「なにげなく辺りを見渡すと、いつの間にか民藝に囲まれていた」  
 なにが「民藝」を決定づけるかは定かではない。ただ、名もないものたちと偶然出会い手元に置いているうちに、どんどん心惹かれていき、そのルーツになにかあるのか探りたくなる。多様な創作の現場と絡みながら活動を行う大脇千加子は、民藝は明確に実態がつかめないものながら、不思議なエネルギーに満ちた存在だと語る。

「布や糸にまつわるものづくりに携わりながら、これまでに世界のいろいろな織りや染めの文化に触れてきました。でも、それほど経験を重ねても、手にした布の技法はいつどこで生まれ、誰が糸を紡ぎ、織り上げたのかのすべてを知ることができません。でも、素材のディテールに触れていると、ふとつくり手の性格やその人の暮らしの様子が浮かび上がってくることもある。その瞬間がとてもうれしくて、思わず微笑んでしまう」

暮らしと地続きに制作している風景。集中力が切れた瞬間や気分が乗ってスムーズに作業をこなしている様子など、手によるものづくりは触れるほどに、人の気配を強く感じさせる。

「すべての工程を順調にこなしたわけではなく、途中で何度も試行錯誤し、たくさんの寄り道もして

いる。どれほど経験を重ね、端正なものづくりを目指していても、心のゆらぎが表れるのが民藝の魅力でしょう。携わる人々の関係性や思考の断片と次々に巡り会えることにも私はワクワクします」

自分もそのプロセスの中に入り込むことができないだろうか。好奇心旺盛な大脇は、ときに焼き物に絵付けしたり、陶片や金属片をつなぎ合わせたオブジェを制作するなど、自身が関わる領域を積極的に広げていく。

「世代や立場が違っていても、互いを尊重し、同じ目線で向き合おう。習い、学ぶのではなく、感覚を重ね合わせる。民藝は特定の人が占有するものではなく、みんながシェアするものかもしれない」

こうした体験を通じて、ときに自分の不甲斐なさを痛感し、相手の懐の深さと高潔さを認識する。そして、手によるものづくりの尊さをもっと追求したくなる。

しかし、大量に情報があふれ、気軽にモノがやりとりされる時代において、ていねいな手仕事の持続はどんどん難しくなっている。

「日常に心動くものがどれほど存在するのが大切。暮らしの風景は私の一部であり私自身。そんなものたちと触れ合いながら、自分ができることはなにかを考えていきたいです」







キッチンの棚には、国内外で集めた実用的な道具が並ぶ。下段中央の両手鍋は兵庫の十場天伸がかつて制作していた耐熱鍋。その手前にある蓋物は、沖縄の古村其飯がつくる発酵甕。入れるだけで肉がやわらかくなるという。

#### アフリカのクバ布を用いたバッグ

コンゴ民主共和国の奥地にかつて存在したクバ王国では、ヤシ科の植物ラフィアを幾何学的に織り込んだ布を衣服や敷物、ラグとして使用していた。大脇は古いクバ布をばどき、バッグに再構築。自身でも愛用している。



#### 井上尚之+大脇千加子のスリッパ槽円鉢

熊本の小代焼ふもと窯を訪れたのが、偶然にも窯出しの翌日。「絵付けしてみる？」と言われ、自ら挑戦。出来栄には不満足ながら、思い出の品として大切な造品に。焼きカレーやグラタンなどで日々活用している。





### 河井寛次郎デザインの竹製椅子

1940年頃、河井が幼い娘のためにデザインし、台湾人の竹工が製作した母子椅子。90度倒すと大人も座れる椅子となる。この原型が台湾にあると知り、昨秋訪れた台南で竹職人を探して購入。「未来に残して欲しいもののひとつです」



鴨半(母屋)の1階に設けられた池半分室のコーナー。タイのローテーブルにアフリカ・バウレ族の椅子、日本の植木鉢台。小嶋の審美眼で選ばれたものがコンクリート打ち放しのミニマルな空間に並ぶ。客はここで茶を楽しめる。

### 小嶋万太郎

池半亭主

Mantaro Kojima

1988年、愛知県生まれ。実家は創業江戸時代中期の瀬戸の窯元・池林堂半七。大学から京都に暮らし、2015年に宿 鴨半(離れ)、20年に茶室/茶藝室 池半、24年に鴨半(母屋)と池半分室を開業。池半亭主として茶を淹れ、点てる傍ら、茶会や茶事、茶道具の紹介を行う。

「民藝について考える時、『家族』という言葉が思い浮かぶようになりました」——そう語るのは京都で町家宿の鴨半、八坂半と、茶室／茶藝室の池半を営む小嶋万太郎。生家は愛知・瀬戸の窯元、池林堂半七。幼い頃から茶の道具に触れ、現在は亭主として茶を淹れ、花を生ける日々を送る。そんな小嶋が紹介してくれたのは、実家の蔵で発見した河井寛次郎の陶箱と、生まれてくる我が子のために台南で探し求めた河井寛次郎ゆかりの竹の椅子だ。

「これらは当たり前のように身近にあって、現代でも不自由なく日々の暮らしの中で使えています。使えるだけでなく、さらにその美や趣で暮らしを彩ってくれるので一石二鳥です。そして、民藝のつくり手の背後には家族生活の日常の姿が垣間見えるし、民藝を見出した人々も権威や美のヒエラルキーに否定的な『民』を大切にすると人たちがだっただから民藝って、すごく家庭的で穏やかだなと思います」と続ける。

取材に訪れたのは、鴨川沿いに佇む鴨半と池半の間に、この秋、新しくオープンした池半分室。茶人として念願だった井戸を掘り、その井戸水で淹れたお茶と鴨川の

## 民藝のある生活が、 幸福と平穏を 家族にもたらす





景色で客をもてなす。「ミニマルな侘び寂びの空間」としてつくったコンクリート打ち放しの土間に並ぶのは、小嶋が集めた古道具や、世界各地のプリミティブなテーブルや椅子。時代も国もバラバラだが、小嶋のフィルターによりすべてが調和し、凜とした雰囲気と居心地のよさが漂う空間だ。

「僕にとつての民藝は、暮らしに取り入れることのできる素材のいいもの。実家や街などで見つけたいいものを、その時々々の生活の仕方に応じて取り入れています。頭で考えるよりも身体に聞いて自然とセレクトできているのは、育った環境もあるし、京都という土地が持つ力も大きいと思います」

小嶋が「美しく、なんとも愛くるしい道具たち」と大切にしている陶箱と竹の椅子。陶箱に添えられていた河井寛次郎から先祖宛ての手紙により、先祖が京都を訪れ河井家と交流があったことを知った。「先祖も瀬戸とこの街を往来していたと思うと感慨深い。自分の京都での仕事に対して、心強くなった思いがあります」

そして、竹椅子には昼寝から起きてきて座る愛娘。その様子を見守る父親の眼差しが優しい。

「民藝が身近にある生活は私たち家族に幸福と平穏をもたらしてくれています」。そう語る彼にとつて、民藝は先祖とのつながりや娘への愛情といった、家族の絆の象徴でもあるようだ。



#### 河井寛次郎の陶箱

「蔵で見つけた時、すぐ河井寛次郎だとわかった」と言うほど代表的な作風で、中期から後期にかけての作品。飾って愛でることが多い。一緒に保管されていた手紙は河井の妻の代筆で8代目に宛てたもの(小嶋は10代目)。



# モギ フォークアートが語る、 “好き”と感性に導かれる 民藝との出会い

1990年代後半から現在に至るまで、暮らしへの民藝の取り入れ方を提案し続けている、モギ フォークアート店主のテリー・エリスと北村恵子。現代における民藝の姿と楽しみ方をふたりに聞いた。

写真:後藤武浩 編集&文:渡邊卓郎  
photographs by Takehiro Goto edit & text by Takuro Watanabe

## MOGI Folk Art

●東京都杉並区高円寺南3-45-12 1F  
☎080-8058-1761  
<https://mogi-shop.com>

ビームスで、ビームス モダンリビング、フェニカを手掛けてきたテリー・エリスと北村恵子が、2022年にオープン。家具や器、洋服、アートなど、ジャンルレスに扱う。

※136〜137ページに店紹介あり。



民藝運動が始まって100年。1世紀という時間の中で人々の生活様式は変わり、民藝の捉え方も大きく変化してきた。現代における民藝を考える時に、民藝とは100年ほど前に活躍した民藝運動の作家たちが、自由にやりたいことをやってきた結果だったのだと想像することで、民藝の捉え方はもっと広くなり、深度を増すのではないだろうか。

「民藝を見る時に大切なのは、美しいと自身が思うかどうかだと思っんです。用の美、も大切な要素ですが、デイリーユースなものだけが民藝だと思われてしまうのも違うと思います。私たちは、目で楽しめるものも含めてものを選んでいきます」

現在の民藝ブームに大きな役割を担うモギフォークアートの北村恵子はそう話す。

民藝が語られる時に必ず登場するキーワードに、民藝の美意識の代名詞として用いられる「用の美」という言葉があるが、この「用の美」であることだけが民藝の本質のようになってしまうと、本来自由であったはずのものが型に収まってしまふのだろう。民藝には自由な楽しみ方があるのだ。

テリー・エリスと北村恵子は1990年代後半から、民藝の歴史に最大限の敬意を払いながらも、時代に合ったかたちで民藝を暮らしに取り入れる手本を見せてくれている。

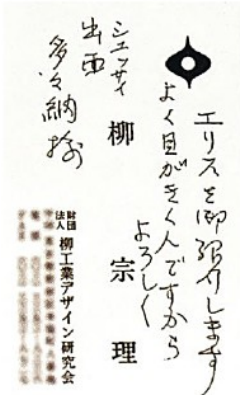
ふたりが民藝の世界に入ることになったきっかけに、柳宗理「デザイン」のバタフライスツールの存在がある。80年代からセレクトショップ、ビームスのロンドンオフィスでファッションのバイヤーとして活躍していたふたりは、90年代の中頃にインテリアアイテムを扱うビームスモダンリビングを立ち上げ、40〜60年代を中心にした北欧デザイナーの家具を紹介し、後に訪れる北欧ブームの流れをつくった。その中で、バタフライスツールをミックスしたのだ。

「日本のミッドセンチュリーのアイコン的なデザインとしてバタフライスツールがありました。昔のヨーロッパのインテリア雑誌などを見ると必ず登場するそのスツールのデザイナーが柳宗理さんだと知り、日本に帰ってきて、柳さんの事務所を訪ねてみたんです」

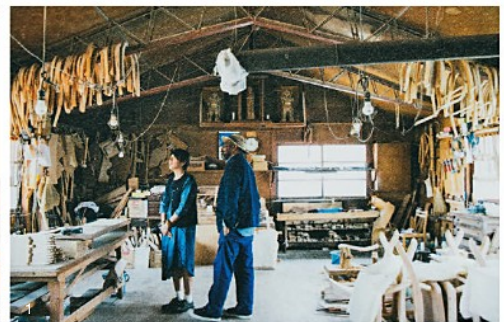
の父、柳宗悦が提唱した民藝運動の魅力に引き込まれていった。「民藝とは、土地の人たちが、その土地の材料を使って、その土地の人たちのためにつくったものですよ。いまは世界中で人同士の移動が簡単になり地域性が薄れてきていますが、世界的に見ても、土地固有の手仕事が残っている国は日本以外にありません」と、エリスは語る。

確かな審美眼を持つふたりには柳も心を開いて、自身の所蔵品を見せるだけでなく、全国のつくり手を紹介してくれた。ある時、名刺の裏に紹介状的なメッセージを記して持たせてくれたそう。当時の日本でこれ以上の紹介状はないだろう。ふたりはその名刺をお守りのように大切にしている。

柳との出会いが大きなきっかけとなって以降、日本全国の手仕事の現場を訪ねるようになったふたりは、つくり手たちとの深いコミュニケーションを重ね、自分たちの心が動いたものだけを世に紹介していった。



エリスが大切に保管している柳宗理の名刺には、「よく目がきく人ですからよろしく」と、柳本人の直筆で島根県にある出西窯宛ての紹介文が記されたためられている。



右：長野県松本市にある松本民芸家具では、バーナード・リーチが監修した「#508D型ウィンザーチェア」をもとにした特注ロックングチェアの製作を依頼。製作過程で工場見学に訪れた。中：栃木県益子町で木漆工芸家として活動している松崎修の工房を訪ねるエリスと北村。ふたりが民藝を扱うようになって30年近くになるが、日本全国のつくり手のもとに何度も足を運び、ていねいに心を通わせることで確かな信頼関係を築いてきた。左：沖縄で学び、現在は益子町にて夫婦で作陶を続けるキマノ陶器にて。自身のアイデアをつくり手に伝えるエリス。



世界でも土地固有の手仕事が  
これだけ残っている国は、  
日本以外にありません



モギフォークアートの店内に入ると、民藝、フォークアート、洋服、雑貨、そしてヴィンテージからオリジナルアイテムまで多様なプロダクトが混ざり合い、現代のライフスタイルと民藝のミックスのヒントを得ることができる。それは、ビームスモダンリビングのあと、1997年に立ち上げた、日本の手仕事とデザインを融合したスタイルを提案するレーベル、フェニカの頃から一貫しているスタイルでもある。

「ビームスモダンリビングで北欧のデザインを扱い始める時にバタフライスツールを取り入れたことがきっかけになって柳さん出合い、私たちの興味が民藝にも広がったのですが、北欧を巡っている時に、フィン・ユールやボーエ・モーエンセンといった北欧デザイン

の巨匠の家に行くと、そこには必ず民藝があつたんです。濱田庄司のお皿とかが飾ってあつて、彼らも民藝が好きで日本の民藝と暮らしていたんだとわかるんです。ハンス・J・ヴェグナーの家には藁で編んだ雪国の靴や蓑などがありましたね。彼らは純粋に美しいと思って集めていたんです。北欧デザインのスパツとした空間の中にそういうものがミックスされて飾られていました」と、北村。北欧デザインと民藝をミックスした暮らしの面白さを伝えようとビームスモダンリビングで民藝を取り扱うようになったが、初めから受け入れられたわけではなかった。97年当時は、やっと北欧のデザインが浸透してきた頃で、ガラス製品や、白く美しい器などは手に取られるようになってきたの

だが、そこにどっしりとして、大胆な絵柄が施された沖縄の焼き物を並べて置いても、ほとんど興味を持ってもらえなかったそうだ。「当時、私たちが関わり始めた頃の民藝はもっと上の世代の方たちのものになっていました。生活の中にあるものたちとは一緒に考えてもらえなかったんです」

そこで、北欧デザインを求めてやって来たお客さんにも違和感なく取り入れてもらえるように無地のやちむんを企画した。つくり手を訪ねて提案してみると、初めは疑問の声も上がったが、明確な目的とイメージを伝えることで理解を得て実現。別注品の無地のやちむんは人気の商品となった。他にも多くの別注品を手掛けるなど時代とニーズに合わせた民藝を提案した。そんな努力が実を結び、



上：李朝の黒釉徳利。バーナード・リーチの妻ジャネットが、かつて所有していたものをロンドンで購入。中：濱田庄司作の薬味入れ。益子町で見つけた時に店主から作者不明と言われたが濱田庄司作だと確信があったという。後に孫の濱田友緒に認定を受けた。日本の薬味入れとしては大きめなのは、濱田が外国で見たものにインスピレーションを受けていることの現れだという。下：河井寛次郎作の茶碗。使えるものでありながら美しい、河井寛次郎らしさがあふれる茶碗。



上：照屋佳信作の皿。沖縄のやちむんらしい一枚。壺屋三人男のひとりとして知られる名工・小橋川永昌のもとでの修業を経て1985年に独立後、約40年の間つくり続けている。中：ケニアのスツール。西アフリカのものが多いふたりのコレクションの中では珍しい東アフリカのもの。下：西アフリカのマスク。「日本にはいいアフリカのアートが眠っているんです。アフリカのものといえば芹沢銈介のコレクションは素晴らしいですね。私たちも大きな影響を受けています」とエリス。



2000年頃から店と民藝の認知度が高まり、近年の民藝ブームにつながっていくこととなる。

「本当にその人が好きか、使ってみていかっていろいろのがいちばん大事で、一緒に暮らそうと思っても、ええなといけませんよね。飾った方がきれいだと思えば飾ればいい。もし、気分が変わったとしたら、じゃあ今度は同じ作家がもうちょっと前につくったものを手に入れてみよう、というように次につながればいいと思うし、ものの系譜を学んでいくことで民藝がもっと面白くなります」

好きなものがあつたらとにかく買ってみたいという北村。そうして「好き」を大切にして集めていくと、自分の感覚も先に進んでいくそう。そんなふたりが長年集めたコレクションはふたつの

ショップに並んでいるが、自宅にもすごい量をお持ちだということ。は容易に想像がつく。

「こんなに持っていてもしようがない、じゃなくて、その子たちが活躍する場をつくらなければいけません。私たちは家に来る人によってディスプレイを変えたり、食事のための器を考えます。そうすることで、来た人との話が広がるんですよ。そして家が狭いからものを増やせないという意見をよく聞きますが、逆に狭いところに大きいものを置くんです。そうすると場所が広がりますから。狭いスペースに小さなものをごちゃごちゃ置くよりも大きいものを置いたほうがバランスが取れるんですよ」

90年代当時、誰も見向きもしなかった民藝に美しさや面白さを見出し、過去の繰り返しではなく、

時代の少し先を行った見立てで民藝を暮らしに取り入れるアイデアを教え続けてくれているエリスと北村。ふたりが大切にしているのは、純粹に好きであること、そして自分の感性なのだ。

「買う時にはスマホでいろいろ調べないほうがいいですよ。情報ではなくて自分の感性のままに手に入れるのがいいと思います」

エリスはそう教えてくれた。自分を信じて自由な感性で手に入れたものは、必ず自分の暮らしに溶け合うはずだ。100年前の作家のもの、現在進行形の作家のもの、等しく自由なクリエイティブでつくられた民藝が古くなることはなく、いつの時代にも暮らしに彩りを与えてくれるだろう。心を開けば、美しく自由な民藝との出会いが待っている。



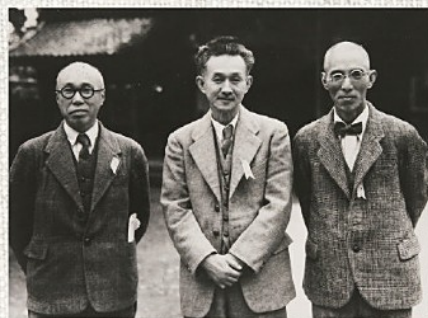
好きなものはとにかく  
買ってみてはいかがでしょう。  
すると、自分の感覚も先に進みます



# いまこそおさらい、民藝ってなんですか？

柳宗悦らが提唱した民藝は、どのような状況から生まれたのだろうか？  
成り立ちや時代背景について、関西学院大学教授・濱田琢司に聞いた。

構成・久保寺潤子  
Composition by Junko Kubota



右：1926年4月、「日本民藝美術館設立趣意書」により「民藝」という言葉が発表された。本書は日本民藝館設立のための趣意書で、当時は「美術館」と名付けられていた。開館に至るまでは10年の歳月を要した。左：初期民藝運動の中心人物であった柳（中央）、河井（右）、濱田（左）。京都時代、北野天満宮や東寺の市に出かけては「下手物」（げてももの）と呼ばれた古い焼き物や布を買い集めた。写真は49年、富山県城端別院にて撮影。写真提供：日本民藝館



## Q1 民藝という言葉は誰がつくったのですか？

「民藝」という語は約1000年前、1925年末に思想家の柳宗悦、陶芸家の河井寛次郎・濱田庄司らによってつくられました。

10年創刊の文芸雑誌「白樺」の初期からの同人である柳は、ロダンやゴッホなど先端の西洋美術を紹介していました。当時、柳の手元にあったロダン作品を見ようと、千葉県・我孫子の柳邸を訪ねた学校教師・浅川伯教から贈られた朝鮮白磁の壺（45ページ、上写真）をきっかけに、柳は朝鮮の民衆美術に大きな関心を寄せていきます。そして朝鮮美術の調査過程で偶然に出会ったのが、江戸後期の遊行の宗教者・木喰五行上人が彫った木喰仏（下写真）でした。以後、柳は上人の足跡を追うよう

に全国を巡り、そこで見た民需用の雑器類に関心を深めていきます。

他方、河井寛次郎と濱田庄司はともに東京高等工業学校（現在の東京科学大学）の窯業科を卒業し、京都市の陶磁器試験場に勤めていました。先輩の河井は21年に陶芸家としてデビューし、中国陶磁を写した作品は高い評価を得ますが、自身の作品には満足していませんでした。そんな時、柳が企画した『朝鮮民族美術展覧会』を見て衝撃を受けます。

この時期濱田は、バーナード・リーチとともにイギリスにいました。イギリスで日常的に使われていた古陶であるスリップウェアが継続して使われている様子を見て感銘を受け、23年に帰国した際、

これを持ち帰っています。

民衆的な工芸への関心を高めていった3人は、関東大震災をきっかけとして偶然京都に居を同じくし、20年代半ばよりその関係を密にしていきます。貴族向けの高級な工芸品を指す「上手物」に対して、彼らは民衆向けの雑器である「下手物」に注目し、京都東寺の朝市などでさまざまな下手物を買い集めます。しかし「下手物」という言葉はややマイナスのニュアンスを含んでいたため、これに代わる言葉として「民衆」と「工

芸」を合わせるかたちで「民藝」という新語をつくり出すのです。

同時代の工芸品の評価としては、美的な価値を持つのは「上手物」で、「下手物」たる民藝はほとんど注目されませんでした。柳たちはそのような状況に対して新しい美の基準を提示しようと、民藝運動を始めます。26年、柳、河井、濱田に陶芸家の富本憲吉を加えた4人の連名による「日本民藝美術館設立趣意書」（上右写真）が書かれ、これが民藝運動の公式の創始となりました。



1924年、柳は朝鮮陶器の調査に訪れた山梨の個人宅で木喰仏に遭遇し感銘を受け、河井、濱田と全国を巡った。「民藝」という語を最初に発案したのも調査の車中だった。木喰五行「地藏菩薩像」1801年 H70×W22cm 写真提供・所蔵：日本民藝館



答える人：濱田琢司  
Takuji Hamada

関西学院大学文学部教授。専攻は文化地理学、地域・民俗文化、工芸。陶芸を主とした手工芸の文化的位置づけと地域への影響を研究するとともに、無形文化財の制度的な枠組み、民俗学・民藝とメディア・ファッションについても考察を行う。人間国宝の濱田庄司を祖父に持つ。



## Q2 民藝のキーワード 「用の美」とは？

民藝を語る時、しばしばキーワードとされるのが「用の美」という表現です。この言葉を素直に受け取ると、「使いやすいことが持つ美」、すなわち機能美として理解してしまうかもしれません。

しかし民藝運動による初期の蒐集品を見ると、柳たちは「使いやすい」を第一には考えていないことがわかります。たとえばQ1で触れた、浅川伯教から贈られた朝鮮白磁の壺（上写真）は、本来は壺ではなく花瓶となるはずのものの下の部分であったと、美術批評家の出川直樹氏が指摘していま

す。つまり機能という面から見た場合、この壺は欠陥品であったわけですが、それでも柳はこのかたち自体に、上手物にはない新たな美のあり方を見出すのです。

このことから「用」を強調しているにもかかわらず、実際の使い勝手についてはしっかり見えていなかったと柳を批判する人もいます。しかし初期民藝運動における「用の美」は、いわゆる機能美とはその視点がそもそも異なっています。たとえば運動初期の蒐集品に、墨壺（下写真）があります。これは大工がノコギリを入

れる線を引くための道具で、きちんとした用途を持ったものです。「用」のためにつくられたかたちなので「用の美」を持っているといえます。ただし柳たちは、この「美」を使いやすさから見出してはいるわけではありません。注目するのは、大工道具としてつくり込まれたかたちそのものです。そうした造形が、純粹美術である彫刻と同じレベルの美しさを持つとしたのです。

囲炉裏の上で自在鉤を吊るすために用いられてきた自在掛（下写真）も同様です。柳たちはかつて地方の庄屋などで見られた立派な自在掛を複数集めています。移築した古民家を住まいとした濱田庄司はこれを実際に囲炉裏で使っていました。それは珍しいケースで、多くの民藝愛好家はかたちそのものを愛でました。

民藝運動がスタートした1920年代、墨壺や囲炉裏のように江戸期から用いられてきた道具や調度品は、生活の近代化の中で古いもの、不要なものになりつつありました。それに反して民藝運動の「眼」は、なにか特定の用途のためにつくられたひと昔前の古いものを、もともとの用法から切り離し、かたちそれ自体に美を見出していったのです。つまり民藝運動における「用の美」とは、ひと昔前の「用」のためにつくり込まれたかたちそれ自体を、純粹美術と同じレベルで評価した時に見出し

た「美」といえるのです。

自在掛ほどわかりやすいものはありませんが、運動が目指した各地の工芸産地でつくられる品々も同様の側面を持っていました。明治後期以降の近代化は生産の現場にも影響をもたらし、そこでは近代化された生活に合わせた近代的な製品が求められました。これに対して民藝運動が目指した多くの産地は、旧態依然とした「古い」産地でした。そこでつくられるものは、近代的な生活ではむしろ使にくいものもありましたが、柳たちはそうした産地の製品の、旧来から受け継がれてきたかたちや文様に宿る美を見出し、価値あるものとしたのです。

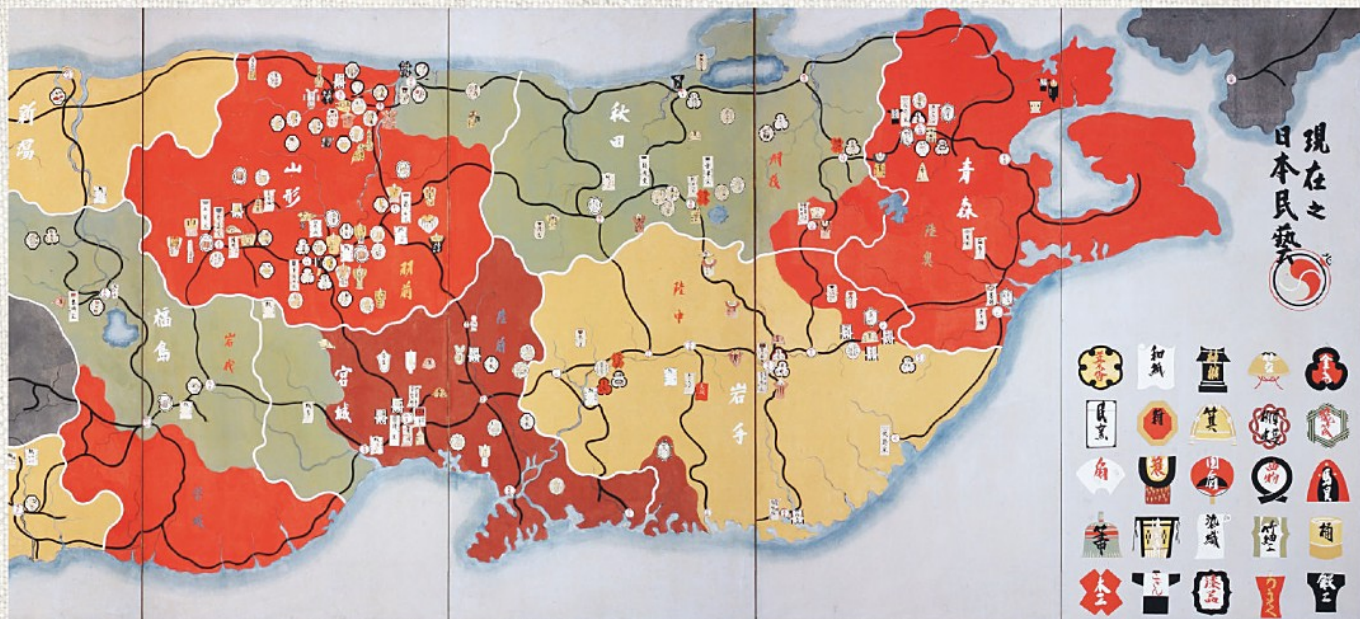
ただこのような品物は、現代生活においてはどちらかといえば使にくいもの、あるいはそもそも使い所のないものでした。民藝運動の同人たちが「用」について示したもうひとつの側面は、そうした使いにくいものを、いまの生活の中でどのように「使いこなすか」ということでした。自在掛をオブジェとして飾る場合、どこでなにと組み合わせるのがいいのか、不用品となった水瓶を現代生活の中でどう使ったらいいのか、「遅れた」産地の品々をどのように組み合わせたら面白いのか。民藝運動が示す「用」の重要なポイントのひとつは、このような「用」の「こなし方」でもあったといえるのです。



右：大工道具として使われていた墨壺。柳は本来の用途にもとづく造形それ自体に新たな美の価値を与えた。墨壺 19世紀 H9.3×W19.4cm 左：囲炉裏が生活の中心だった北陸地方で使われていた木造の自在掛。火にかける鍋などを吊るす自在鉤を天井との間で支える自在掛は、煙に燻されながら磨き上げられ存在感を放つ。自在掛 恵比須 江戸時代 19世紀 H51.4×W38.6cm 写真提供・所蔵：日本民藝館







日本民藝館で開催された「日本現在民藝品展」のため柳宗悦の依頼により芹沢銈介が制作。産地の手仕事を描かれた。『日本民藝地図(現在之日本民藝)』部分 1941年 170×1332cm(全長) 写真提供・所蔵：日本民藝館

### Q3 伝統工芸、古美術、 クラフト…… 民藝との違いは？

それぞれ民藝とオーバーラップする言葉で、ときに同義のように用いられることもあります。関連分野との違いに目を向けることで、民藝の立ち位置を浮かび上がらせてみましょう。

「伝統工芸」は民藝と近い場所です。語られてきた用語でもあります。

伝統工芸という言葉は1950年代に工芸技術における無形文化財の制定（いわゆる「人間国宝」）との関係で始まった「日本伝統工芸展」によって公的に確立され、さらに74年、通商産業省（当時）が制定した「伝統的工芸品産業」とその普及によって広く一般化されました。特に現在では経済産業大臣の指定する伝統的工芸品のイメージが強いかもしれません。

「伝産品」とは、伝統的な素材や製法によって昔から生産が継続されていることが条件のひとつであり、対象となるのは、ものをつくりだす産業とそれによる生産品です。対して柳宗悦の民藝とは、必ずしもつくり方によって定義されていません。むしろ重視されるのは、それが「いかに使われてきたのか」という点にあります。その

背景には、消費する側の視点からものを評価し見立てるという民藝運動の発想があるのです。民藝運動と関わり深い産地の生産品も、伝統工芸の範疇に含まれるケースが多くありますが、その見出し方や思想的背景はかなり異なっていることがわかります。

一方「古美術」は民藝と同様ものを愛でるところに軸足を置いている点で、民藝との関係はより近いといえるかもしれません。実際、運動の初期においては古美術趣味を掲げる人々と民藝運動同人との間には一定程度以上の関わりがありました。しかしこの関係は徐々に離れていきます。たとえば、古美術・骨董界の中心人物のひとつであった青山二郎は、30年代の初頭までは民藝運動に深く関わっていましたが、柳らとの意見の対立もあって次第に運動から離れていきました。

その理由のひとつは、前述の伝統工芸との関係と矛盾するようですが、30年代の民藝運動が現行の産地との関わりを強めていったことにあります。初期の民藝運動は都市部農村部を問わず民衆使用の

「古いもの」を蒐集の対象としていましたが、運動の拡大とともに現行の産地にも目を向けるようになります。41年に芹沢銈介によって作製された「日本民藝地図」（写真上）は、黒線で描かれた鉄道網とともに当時の民藝産地を示したものでした。また、戦後すぐに出版された柳の『手仕事の日本』は当時の民藝のガイドブックといえる内容で、「現在の民藝」は重要なトピックとなっていくのです。こうして「古いもの」を愛でる古美術愛好と民藝運動との間には徐々にズレが生じていくのです。

「クラフト」という用語も民藝と類似する対象です。民藝は「Folk Art」と英訳されますが、手先の技術を要するという意味においてクラフトのひとつといえます。ただしカタカナで「クラフト」とした時、それには「デザイン」のニュアンスが強く含まれます。56年に発足した「日本デザイナークラフトマン協会」（のちの「日本クラフトデザイン協会」）に代表されるように、工芸の中に機能的で現代的なデザインを持ち込み、それによって表現されたものを「デザインクラフト」と位置づける動きがありました。そうしたクラフト工芸は、設計図をもとにした機械生産による量産を基本としています。デザインという枠組みは民藝よりも強固なもので、そのあたりがゆらぎの多い民藝との違いといえるでしょう。



柳宗悦の定義した「民藝」は、無名の工人によるものとされています。すなわち民藝とは第一に「無名」の職人による品々といえるでしょう。

しかし民藝運動には河井寛次郎、濱田庄司、芹沢銈介、黒田辰秋、棟方志功など多くの作家が関わっていたので、この点が矛盾であると批判を受けることもありま

す。確かに前述の定義からすると矛盾ではあるのですが、そもそも民藝運動とは、新しいタイプの芸術家としての表現を初発の目的とする側面もあったのです。

Q1で、民藝という発想が旧来の美とは基準を異にしていたことに触れましたが、それは社会的啓蒙だけでなく、芸術家の創作のあり方への提言でもあったのです。これまでみな注目してこなかったけれど依拠すべき品々が世の中にはあるのだぞ、というわけです。

## Q4 無名なものだけが民藝なのですか？

和歌の世界に「本歌取」という

技法がありますが、工芸の分野でも旧作の「うつし」が行われることがあります。その際うつし元となる作品は、基本的に価値が高いとされていたものでした。民藝運動はそのうつし元として民藝を提示し、工芸作家の新しい創作スタイルを確立させましたのです。たとえば、濱田庄司は沖縄をはじめ各地の民藝の品をさまざまな形で自作に取り込んでいますし、芹沢銈介が沖縄の紅型を自身の創作の糧のひとつとしていたことも知られています。黒田辰秋にとつての朝鮮の家具類も同様といえるでしょう。これらのことは、評論家の

青山二郎が濱田の作品を評して「上手と下手が作品のなかで握手をしている」と記した言葉によく表されています。「下手」に範を取りながらその心は「上手」にあるという点で、これらは柳たちが蒐集の対象とした「民藝」とは異なるものでした。しかしそのような作品の制作は、民藝運動が最初から目指していたものであり、実際「民藝派」は日本の工芸界にひとつの潮流を築きました。

ところで民藝運動を推進した作家の多くは、家業ではなく自ら工芸家となることを選択した人々でした。同人作家が「民藝」を範とする作品を生み出したのは、彼ら

が「家」や土地から比較的自由な存在であったことも関係しています。こうした自由さは、工芸界における「異端」を受け入れる土壌ともなります。棟方志功はそうした中から生まれたひとりです。棟方は1936年の国画会展に出品した「大和し美し」が、規格外の長大さ故に運営側と問題となり、その対応を巡って柳らと交流を結ぶようになるなど、既存の絵画・版画界の範疇に収まらない人物でした。そんな棟方にとって民藝運動は、活動の拠り所となったのでした。

後年、下手物にならった「民藝スタイル」の定着は、大きくふたつの展開を見ることになります。ひとつは柳の思想的側面も含め、「民藝スタイル」に感化され自ら工芸家を志す作家たちの誕生で、運動第一世代の作家の弟子や孫弟子らがこの系譜にあたります。一方で民藝スタイルの誕生は、産地の工人にとっては自らが日常的に行っている技法や装飾を用いた品が芸術作品として発表される、という状況を知る機会となりました。民藝運動によって地方民藝のマーケットも成熟しました。こうした状況が重なり、作家的な活動をする産地の工人が現れます。これがもうひとつの展開です。

ただ、このふたつの流れははっきり区分できるものではなく、前者の人たちが特定の産地に入って活動することあれば、産地の工

人の後継者が、民藝運動同人の作家たちに弟子入りすることもありました。産地や分野によって状況はさまざまありますが、こうした人々が60年代以降の「現在の民藝」の主要な担い手になってきました。

「大和し美し」は棟方が初めて文字を主体に用いた作品で、佐藤一英の詩を版画化したもの。20回におよぶ作品を4面の額に入れて国画会の審査会場に搬入したところサイズ超過で拒否されたが、偶然通りかかった審査員の濱田と柳の目に留まり展示が許された。これを機に民藝運動の指導者らと交流が始まり、制作に多大な影響を与えた。「大和し美し」部分 1936年 H32×W723cm(全長) 写真提供・所蔵：一般財団法人棟方志功記念館



上：民藝運動の中心人物のひとり、濱田庄司は益子に窯を築く以前からもたびたび沖縄へ赴き、壺屋窯で制作を行った。沖縄陶器のかたちや文様を濱田流に写した合子。琉球窯紋絵具須合子 1927年 H12×W11cm 写真提供・所蔵：濱田庄司記念益子参考館 下：濱田がイギリスから持ち帰ったスリッパウェアを柳宗悦とともに味わった河井寛次郎。その技法を独自にアレンジした。鉛釉象嵌鉢 1930年 φ39.6×H8.7cm 写真提供・所蔵：日本民藝館



## Q5 民藝イコール 手仕事によるものですか？

柳宗悦は一方的に機械による生産を否定していたわけではありません。たとえば小鹿田について記した「日田の血山」(1931年)では「伝統が凡て」である小鹿田の素晴らしさを述べた上で、知識に頼る創作には「美になくてならぬ肝心の(略)一物」が欠けているといえます。そして「その一物さへ掴めれば、町に出ようと機械に交ろうと知識をふやそうと、どんなことをしてもいい」と続けます。全面的に肯定はしていませんが、条件が揃えば、という前提で機械を許容してもいます。

柳の生前に機械との交わりを積極的に評価する状況にはなりませんでした。40年代にフランスのデザイナー、シャルロット・ペリアンが来日し発表した企画展に対しては、柳と濱田とで好意的な見解を示した文章が残っていますし、戦後渡米した折には、イームズハウスを高く評価しました。

柳は工業製品を民藝としてそのままに評価することはありませんでしたが、民衆のための日用使い

のものを民藝とするならば、その現代における姿はプロダクト製品となるという意見もあります。これを最も明確に提示したのは、宗悦の長男で工業デザイナーでもあった柳宗理でしょう。77年末に濱田庄司を継いで日本民藝館の三代目館長となった宗理は、翌年4月の機関誌「民藝」で多くのプロダクト製品を紹介しつつ、「民芸の行方」という文章の中で、「民芸はいずれはプロダクト・デザインに依る製品に発展的解消をするであろう」と述べています。そして「民藝館もただ骨董屋の出店のような格好を呈し」たり「ただ過去の美しい製品を並べるミューゼアムの存在」であってはならないという大胆な意見を表明します。

しかし戦後の民藝運動は産地に結びついて展開していったこともあり、宗理がその主張を強く述べることもなくなりました。それでもこの意見は民藝と機械、あるいは民藝とデザインを考える上でとても重要なポイントだと思っています。民藝を巡る動きが多方面に広がっているいまこそ、振り返るべき事柄だと感じます。



『民藝』1978年9月号より。Pシュルムボールのデザインによるコーヒーポット(左頁)とカイ・フランクのデザインによるワインボトル(右頁)が紹介されている。他にも使いやすさと美しさを備えたプロダクトが多数掲載。



柳が小鹿田を初めて訪れたのは1931年。『日田の血山』『手仕事の日本』で評価し、世に知らしめた。54年、64年にはリーチも滞在して作陶を行い、小鹿田は日本はもとより海外にも知られるようになる。写真提供：日本民藝館

## Q6 柳宗悦たちは 産地でどんな活動をしたのですか？

工芸に関する価値付けは、経済産業大臣指定の伝統的工芸品がそうであるように、どのように生産されるか、というつくり方を規定する場合がほとんどです。これに対して柳による民藝は、どのように使われているかに比重が置かれているとQ3でも述べました。

柳らの産地指導は生産工程の細部に関する事柄よりも、古い仕事を大切に作る啓蒙的な内容や完成品のよし悪しを伝えることが主でありました。その基準は、彼らが得意とする「眼」による作品の判断となり、個々の品に対してのよし悪しを瞬時にはつきりと、そして、ときに苛烈に各地で下していききました。産地にはこうした言葉が非常に大きなインパクトをもつて受け入れられたと思います。

柳たちの産地訪問は、民藝運動が拡大していく1930年代に蒐集活動の一環として活発化します。運動開始前後は「貴族的か民衆のか」「鑑賞用か日用使いか」という対比が重視されていました。柳が、やがて「中央と地方」あるいは「進んでいることと遅れていること」へと変化していきます。そ

して科学や知識による「進歩」ではなく、旧態的であることを重視しました。進歩を目指すとしていた産地の人々にとって、柳たちの評価はときに不可解な、しかしあるがままを肯定してくれるものとして、魔法のように感じられたこともあったでしょう。

民藝運動の同人につくり手が多く関わっていたことも、産地での活動を考えるひとつのポイントです。沖縄では戦前期より河井寛次郎や濱田庄司、バーナード・リーチらがたびたび那覇市壺屋の窯元で作陶しています。リーチが長期来日した際は柳らと各所を巡り、行く先々で作品をつくりました。そうした滞在は産地の工人らに「民藝派」の作品づくりを間近に示すと同時に、しばしばメディアの取材対象ともなり、自分たちの仕事はどう評価されているのかを知る機会にもなったのです。

戦後期には各地で民藝運動の同人が誕生したり、生産者と強いつながりを持つ民藝店が現れ、柳らの思想を伝えるべく産地で指導を行う事例もあり、それは現在まで影響を与えています。



# 年表でたどる民藝

柳宗悦を中心に多くの仲間が参加した「民藝」は、  
やがて各地へと広がり、大きなうねりとなった。

編集 文久保寺潤子  
edit & text by junko mabuchi

1889 明治22年	●柳宗悦、東京府に生まれる	1928 昭和3年	●大正記念国産振興東京博覧会に「民藝館」を出展	1966 昭和41年	●日下部民藝館開館（岐阜県高山市）
1910 明治43年	●柳志賀直哉、武者小路実篤らと『白樺』を創刊	1929 昭和4年	●「工藝の道」刊行	1967 昭和42年	●東予民藝館開館（愛媛県西条市、現愛媛民藝館）
1913 大正3年	●濱田庄司、東京高等工業学校窯業科で河井寛次郎と知り合う	1931 昭和6年	●柳、濱田とともに渡欧。その後アメリカへ上加茂民藝協団による「民藝協団作品第1回展覧会」（大阪毎日新聞社京都支局）を開催	1970 昭和45年	●日本万国博覧会に「日本民藝館」現大阪日本民芸館を出展
1914 大正3年	●柳、中島兼子と結婚。その後、千葉県我孫子に新居を構える	1933 昭和8年	●月刊「工藝」創刊	1971 昭和46年	●大阪日本民芸館開館
1917 大正6年	●バーナード・リーチ、我孫子の柳邸内に窯と仕事場を設立	1934 昭和9年	●高林兵衛邸内に日本民藝美術館開設	1972 昭和47年	●柳、京都から東京・小石川へ転居
1919 大正8年	●濱田、柳邸のリーチ窯を訪ね、柳と知り合う	1935 昭和10年	●柳、京都から東京・小石川へ転居	1973 昭和48年	●柳、小石川から駒場に転居
1921 大正10年	●柳、浅川伯教・巧兄弟らと「朝鮮民族美術館」設立を発表	1936 昭和11年	●柳、民藝同人らと2回目の沖縄訪問	1974 昭和49年	●大原孫三郎より民藝館設立資金の寄付を受ける
1922 大正11年	●「朝鮮の美術」、「陶磁器の美」刊行	1938 昭和13年	●「月刊民藝」創刊（のちに「民藝」と改題）	1975 昭和50年	●日本民藝館開館
1924 大正13年	●柳、山梨県の小宮山清三邸内で木喰仏を知り、調査を開始	1939 昭和14年	●「日本民藝館にて『生活展』と題した展示を開催	1977 昭和52年	●柳、沖縄を初めて訪問
1925 大正14年	●柳、河井、濱田、富本憲吉との連盟で「日本民藝美術館設立趣意書」を発表	1941 昭和16年	●「手仕事の日本」刊行	1981 昭和56年	●柳、民藝同人らと2回目の沖縄訪問
1926 大正15昭和元年	●柳、浜松を訪ねて講演。高林兵衛邸を訪問。その後高林を介し芹沢銈介を知る	1948 昭和23年	●倉敷民藝館開館	1983 昭和58年	●「月刊民藝」創刊（のちに「民藝」と改題）
1927 昭和2年	●青田五良、黒田辰秋、鈴木実が「上加茂民藝協団」結成（のちに青田七良が参加）	1949 昭和24年	●鳥取民藝館開館（現鳥取民藝美術館）	1989 平成元年	●日本民藝館にて『生活展』と題した展示を開催
	●初の民藝展「日本民藝品展覧会」開催（銀座鳩居堂）	1952 昭和27年	●東京民藝協会の機関誌「民藝」を日本民藝協会に移管して刊行開始	1995 平成7年	●「手仕事の日本」刊行
		1957 昭和32年	●雑誌「民芸手帖」創刊	1997 平成9年	●倉敷民藝館開館
		1958 昭和33年	●柳宗悦死去	2004 平成16年	●柳、濱田、志賀直哉らは毎日新聞社の文化使節としてイタリア、フランス、スペイン、イギリスを訪問。柳と濱田はその後渡米
		1961 昭和36年	●大原美術館内にリーチ、富本、河井、濱田の作品を展示する陶器館開館	2011 平成23年	●東京民藝協会の機関誌「民藝」を日本民藝協会に移管して刊行開始
		1962 昭和37年	●松本民芸館開館	2017 平成29年	●雑誌「民芸手帖」創刊
		1963 昭和38年	●大原美術館内に芹沢銈介染色館、棟方志功版画館開館（現工芸・東洋館）	2018 平成30年	●柳宗悦死去
		1965 昭和40年	●熊本国際民藝館開館	2021 令和3年	●大原美術館内にリーチ、富本、河井、濱田の作品を展示する陶器館開館
			●富山市民芸館開館	2023 令和5年	●松本民芸館開館
					●大原美術館内に芹沢銈介染色館、棟方志功版画館開館（現工芸・東洋館）
					●熊本国際民藝館開館
					●富山市民芸館開館
					●日本万国博覧会に「日本民藝館」現大阪日本民芸館を出展
					●大阪日本民芸館開館
					●柳、京都から東京・小石川へ転居
					●柳、小石川から駒場に転居
					●大原孫三郎より民藝館設立資金の寄付を受ける
					●日本民藝館開館
					●柳、沖縄を初めて訪問
					●柳、民藝同人らと2回目の沖縄訪問
					●「月刊民藝」創刊（のちに「民藝」と改題）
					●日本民藝館にて『生活展』と題した展示を開催
					●「手仕事の日本」刊行
					●倉敷民藝館開館
					●鳥取民藝館開館（現鳥取民藝美術館）
					●東京民藝協会の機関誌「民藝」を日本民藝協会に移管して刊行開始
					●雑誌「民芸手帖」創刊
					●柳宗悦死去
					●大原美術館内にリーチ、富本、河井、濱田の作品を展示する陶器館開館
					●松本民芸館開館
					●大原美術館内に芹沢銈介染色館、棟方志功版画館開館（現工芸・東洋館）
					●熊本国際民藝館開館
					●富山市民芸館開館
					●日本万国博覧会に「日本民藝館」現大阪日本民芸館を出展
					●大阪日本民芸館開館
					●柳、京都から東京・小石川へ転居
					●柳、小石川から駒場に転居
					●大原孫三郎より民藝館設立資金の寄付を受ける
					●日本民藝館開館
					●柳、沖縄を初めて訪問
					●柳、民藝同人らと2回目の沖縄訪問
					●「月刊民藝」創刊（のちに「民藝」と改題）
					●日本民藝館にて『生活展』と題した展示を開催
					●「手仕事の日本」刊行
					●倉敷民藝館開館
					●鳥取民藝館開館（現鳥取民藝美術館）
					●東京民藝協会の機関誌「民藝」を日本民藝協会に移管して刊行開始
					●雑誌「民芸手帖」創刊
					●柳宗悦死去
					●大原美術館内にリーチ、富本、河井、濱田の作品を展示する陶器館開館
					●松本民芸館開館
					●大原美術館内に芹沢銈介染色館、棟方志功版画館開館（現工芸・東洋館）
					●熊本国際民藝館開館
					●富山市民芸館開館
					●日本万国博覧会に「日本民藝館」現大阪日本民芸館を出展
					●大阪日本民芸館開館
					●柳、京都から東京・小石川へ転居
					●柳、小石川から駒場に転居
					●大原孫三郎より民藝館設立資金の寄付を受ける
					●日本民藝館開館
					●柳、沖縄を初めて訪問
					●柳、民藝同人らと2回目の沖縄訪問
					●「月刊民藝」創刊（のちに「民藝」と改題）
					●日本民藝館にて『生活展』と題した展示を開催
					●「手仕事の日本」刊行
					●倉敷民藝館開館
					●鳥取民藝館開館（現鳥取民藝美術館）
					●東京民藝協会の機関誌「民藝」を日本民藝協会に移管して刊行開始
					●雑誌「民芸手帖」創刊
					●柳宗悦死去
					●大原美術館内にリーチ、富本、河井、濱田の作品を展示する陶器館開館
					●松本民芸館開館
					●大原美術館内に芹沢銈介染色館、棟方志功版画館開館（現工芸・東洋館）
					●熊本国際民藝館開館
					●富山市民芸館開館
					●日本万国博覧会に「日本民藝館」現大阪日本民芸館を出展
					●大阪日本民芸館開館
					●柳、京都から東京・小石川へ転居
					●柳、小石川から駒場に転居
					●大原孫三郎より民藝館設立資金の寄付を受ける
					●日本民藝館開館
					●柳、沖縄を初めて訪問
					●柳、民藝同人らと2回目の沖縄訪問
					●「月刊民藝」創刊（のちに「民藝」と改題）
					●日本民藝館にて『生活展』と題した展示を開催
					●「手仕事の日本」刊行
					●倉敷民藝館開館
					●鳥取民藝館開館（現鳥取民藝美術館）
					●東京民藝協会の機関誌「民藝」を日本民藝協会に移管して刊行開始
					●雑誌「民芸手帖」創刊
					●柳宗悦死去
					●大原美術館内にリーチ、富本、河井、濱田の作品を展示する陶器館開館
					●松本民芸館開館
					●大原美術館内に芹沢銈介染色館、棟方志功版画館開館（現工芸・東洋館）
					●熊本国際民藝館開館
					●富山市民芸館開館
					●日本万国博覧会に「日本民藝館」現大阪日本民芸館を出展
					●大阪日本民芸館開館
					●柳、京都から東京・小石川へ転居
					●柳、小石川から駒場に転居
					●大原孫三郎より民藝館設立資金の寄付を受ける
					●日本民藝館開館
					●柳、沖縄を初めて訪問
					●柳、民藝同人らと2回目の沖縄訪問
					●「月刊民藝」創刊（のちに「民藝」と改題）
					●日本民藝館にて『生活展』と題した展示を開催
					●「手仕事の日本」刊行
					●倉敷民藝館開館
					●鳥取民藝館開館（現鳥取民藝美術館）
					●東京民藝協会の機関誌「民藝」を日本民藝協会に移管して刊行開始
					●雑誌「民芸手帖」創刊
					●柳宗悦死去
					●大原美術館内にリーチ、富本、河井、濱田の作品を展示する陶器館開館
					●松本民芸館開館
					●大原美術館内に芹沢銈介染色館、棟方志功版画館開館（現工芸・東洋館）
					●熊本国際民藝館開館
					●富山市民芸館開館
					●日本万国博覧会に「日本民藝館」現大阪日本民芸館を出展
					●大阪日本民芸館開館
					●柳、京都から東京・小石川へ転居
					●柳、小石川から駒場に転居
					●大原孫三郎より民藝館設立資金の寄付を受ける
					●日本民藝館開館
					●柳、沖縄を初めて訪問
					●柳、民藝同人らと2回目の沖縄訪問
					●「月刊民藝」創刊（のちに「民藝」と改題）
					●日本民藝館にて『生活展』と題した展示を開催
					●「手仕事の日本」刊行
					●倉敷民藝館開館
					●鳥取民藝館開館（現鳥取民藝美術館）
					●東京民藝協会の機関誌「民藝」を日本民藝協会に移管して刊行開始
					●雑誌「民芸手帖」創刊
					●柳宗悦死去
					●大原美術館内にリーチ、富本、河井、濱田の作品を展示する陶器館開館
					●松本民芸館開館
					●大原美術館内に芹沢銈介染色館、棟方志功版画館開館（現工芸・東洋館）
					●熊本国際民藝館開館
					●富山市民芸館開館
					●日本万国博覧会に「日本民藝館」現大阪日本民芸館を出展
					●大阪日本民芸館開館
					●柳、京都から東京・小石川へ転居
					●柳、小石川から駒場に転居
					●大原孫三郎より民藝館設立資金の寄付を受ける
					●日本民藝館開館
					●柳、沖縄を初めて訪問
					●柳、民藝同人らと2回目の沖縄訪問
					●「月刊民藝」創刊（のちに「民藝」と改題）
					●日本民藝館にて『生活展』と題した展示を開催
					●「手仕事の日本」刊行
					●倉敷民藝館開館
					●鳥取民藝館開館（現鳥取民藝美術館）
					●東京民藝協会の機関誌「民藝」を日本民藝協会に移管して刊行開始
					●雑誌「民芸手帖」創刊
					●柳宗悦死去
					●大原美術館内にリーチ、富本、河井、濱田の作品を展示する陶器館開館
					●松本民芸館開館
					●大原美術館内に芹沢銈介染色館、棟方志功版画館開館（現工芸・東洋館）
					●熊本国際民藝館開館
					●富山市民芸館開館
					●日本万国博覧会に「日本民藝館」現大阪日本民芸館を出展
					●大阪日本民芸館開館
					●柳、京都から東京・小石川へ転居
					●柳、小石川から駒場に転居
					●大原孫三郎より民藝館設立資金の寄付を受ける
					●日本民藝館開館
					●柳、沖縄を初めて訪問
					●柳、民藝同人らと2回目の沖縄訪問
					●「月刊民藝」創刊（のちに「民藝」と改題）
					●日本民藝館にて『生活展』と題した展示を開催
					●「手仕事の日本」刊行
					●倉敷民藝館開館
					●鳥取民藝館開館（現鳥取民藝美術館）
					●東京民藝協会の機関誌「民藝」を日本民藝協会に移管して刊行開始
					●雑誌「民芸手帖」創刊
					●柳宗悦死去
					●大原美術館内にリーチ、富本、河井、濱田の作品を展示する陶器館開館
					●松本民芸館開館
					●大原美術館内に芹沢銈介染色館、棟方志功版画館開館（現工芸・東洋館）
					●熊本国際民藝館開館
					●富山市民芸館開館
					●日本万国博覧会に「日本民藝館」現大阪日本民芸館を出展
					●大阪日本民芸館開館
					●柳、京都から東京・小石川へ転居
					●柳、小石川から駒場に転居
					●大原孫三郎より民藝館設立資金の寄付を受ける
					●日本民藝館開館
					●柳、沖縄を初めて訪問
					●柳、民藝同人らと2回目の沖縄訪問
					●「月刊民藝」創刊（のちに「民藝」と改題）
					●日本民藝館にて『生活展』と題した展示を開催
					●「手仕事の日本」刊行
					●倉敷民藝館開館
					●鳥取民藝館開館（現鳥取民藝美術館）
					●東京民藝協会の機関誌「民藝」を日本民藝協会に移管して刊行開始
					●雑誌「民芸手帖」創刊
					●柳宗悦死去
					●大原美術館内にリーチ、富本、河井、濱田の作品を展示する陶器館開館
					●松本民芸館開館
					●大原美術館内に芹沢銈介染色館、棟方志功版画館開館（現工芸・東洋館）
					●熊本国際民藝館開館
					●富山市民芸館開館
					●日本万国博覧会に「日本民藝館」現大阪日本民芸館を出展
					●大阪日本民芸館開館
					●柳、京都から東京・小石川へ転居
					●柳、小石川から駒場に転居
					●大原孫三郎より民藝館設立資金の寄付を受ける
					●日本民藝館開館
					●柳、沖縄を初めて訪問
					●柳、民藝同人らと2回目の沖縄訪問
					●「月刊民藝」創刊（のちに「民藝」と改題）
					●日本民藝館にて『生活展』と題した展示を開催
					●「手仕事の日本」刊行
					●倉敷民藝館開館
					●鳥取民藝館開館（現鳥取民藝美術館）
					●東京民藝協会の機関誌「民藝」を日本民藝協会に移管して刊行開始
					●雑誌「民芸手帖」創刊
					●柳宗悦死去
					●大原美術館内にリーチ、富本、河井、濱田の作品を展示する陶器館開館
					●松本民芸館開館
					●大原美術館内に芹沢銈介染色館、棟方志功版画館開館（現工芸・東洋館）
					●熊本国際民藝館開館
					●富山市民芸館開館
					●日本万国博覧会に「日本民藝館」現大阪日本民芸館を出展
					●大阪日本民芸館開館
					●柳、京都から東京・小石川へ転居
					●柳、小石川から駒場に転居
					●大原孫三郎より民藝館設立資金の寄付を受ける
					●日本民藝館開館
					●柳、沖縄を初めて訪問
					●柳、民藝同人らと2回目の沖縄訪問
					●「月刊民藝」創刊（のちに「民藝」と改題）
					●日本民藝館にて『生活展』と題した展示を開催
					●「手仕事の日本」刊行
					●倉敷民藝館開館
					●鳥取民藝館開館（現鳥取民藝美術館）
					●東京民藝協会の機関誌「民藝」を日本民藝協会に移管して刊行開始
					●雑誌「民芸手帖」創刊
					●柳宗悦死去



雑器の美は

無心の美である。

「雑器の美」より

民藝は必然に

手工藝である。

(略)手こそは

自然が与えた

最良の器具である。

「雑器の美」より

使いよく便宜なもの、使ってみて  
頼りになる真実なもの、  
共に暮してみても落ち着くもの、  
使えば使うほど親しさの出るもの、  
それが民藝品の有つ徳性です。

「民藝の趣旨」より



## 柳 宗悦が残した、 心に響くことば

生涯にわたり多くの文章を残した柳宗悦。  
民藝を通して伝えたかったことを考える。

編集&文:久保寺潤子 イラスト:岡田成生  
edit & text by Junko Kubodera illustration by Shigeo Okada

天才が作るわずかなものが  
美しいとも、それによって  
この世は美しくならないのです。

「民藝の趣旨」より

手が機械と異なる点は、  
それがいつも直接に心と  
繋がれていることでもあります。

「手仕事の国」より

伝統は  
個人の脆さを  
救ってくれる。

「美の法門」より

民藝は無銘なのです。それは丁度真の  
善人が、平凡に当たり前に善い行いを  
するのと同じ境地なのです。それは  
文法も知らない日本人が、困難な日本語を  
平気で使いこなすのと同じです。

「民藝の趣旨」より



一切の物差を棄て、一切の色眼鏡を  
はずして、うぶな心で、物をうぶなままで  
只受取る事が肝心です。

『民藝館の買物』より

用途なき世界に、  
工藝の世界はない。  
(略)用途への奉仕、  
これが工藝の心である。

『工藝の美』より

不完全を厭う  
美しさよりも、  
不完全をも容れる  
美しさの方が深い。

『美の法門』より

知は美を  
見る眼とはならぬ。

『工藝の美』より

民藝は驚くべき  
自由の世界であり  
創造の境地である。

『雑器の美』より

「渋さ」は日本民族の美の理念なのである。  
(略)それは美の禅境であって、  
宗教的深みを十分に持つものである。

『丹波の古陶』より

物に新旧はあろうが、  
新旧のない受取り方に接すれば、  
「いつも今」の品に成り変るのである。

『菟集の弁』より

金力よりも眼力の方が  
ずっと優れた働きをする。  
金力では出来ぬことまでする。

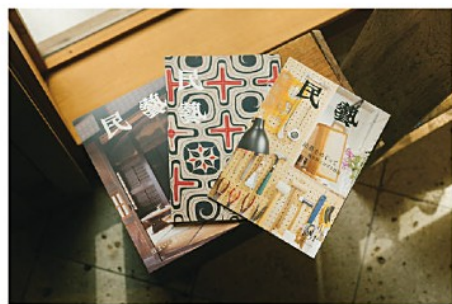
『茶の病い』より



# “割り切れない美”を ともに悦びながら 継承していく

100年前に提唱された「民藝」は、現代を生きる私たちに  
どんな暮らしのヒントを与えているのだろうか。  
自身の店で作り手と使い手をつなぐ高木崇雄に話を聞いた。

写真:朝山啓司 編集・文:久保寺潤子  
photographs by Keishi Asayama edit & text by Junko Kubodera



「民藝」は日本民藝協会が発行する機関誌で、高木は現在編集長を務めている。日本各地の民藝のいま、そしてこれまでとこれからを紹介。バックナンバーは日本民藝協会のホームページで入手できる。

## 高木崇雄 工藝風向 店主



Takao Takaki

1974年、高知県生まれ。2004年、福岡県で「工藝風向」を開店するとともに、九州大学大学院にて柳宗悦と民藝運動を対象に近代工芸史を研究。日本民藝協会常任理事。著書に「わかりやすい民藝」。

※144～145ページに店紹介あり。

「民藝」は日本民藝協会が発行する機関誌で、高木は現在編集長を務めている。日本各地の民藝のいま、そしてこれまでとこれからを紹介。バックナンバーは日本民藝協会のホームページで入手できる。

「民藝」は日本民藝協会が発行する機関誌で、高木は現在編集長を務めている。日本各地の民藝のいま、そしてこれまでとこれからを紹介。バックナンバーは日本民藝協会のホームページで入手できる。

「柳」が民藝運動を行った時代と現在では、必ずしも時代状況が異なるとは考えていません。彼らが生きた時代は、帝国が周辺諸国の人々を「標準化」しようとした時代で、それはグローバルゼーションが進むいまと近い面もある。ひとつの価値観が社会を覆いつつあった時代に日本各地の手仕事や、朝鮮半島・沖縄・アイヌといった独自の豊かな暮らしを営む人々が生み出す品々に美を見出し褒め称えた柳は、上から目線で彼らを保護しようとしたわけではありません。美しさを生む背景にある当たり前の暮らしの多様さ、豊かさを守るためにはどうしたらよいのかを考え、彼らとともに歩むべく活動したのです」

「柳」が民藝運動を行った時代と現在では、必ずしも時代状況が異なるとは考えていません。彼らが生きた時代は、帝国が周辺諸国の人々を「標準化」しようとした時代で、それはグローバルゼーションが進むいまと近い面もある。ひとつの価値観が社会を覆いつつあった時代に日本各地の手仕事や、朝鮮半島・沖縄・アイヌといった独自の豊かな暮らしを営む人々が生み出す品々に美を見出し褒め称えた柳は、上から目線で彼らを保護しようとしたわけではありません。美しさを生む背景にある当たり前の暮らしの多様さ、豊かさを守るためにはどうしたらよいのかを考え、彼らとともに歩むべく活動したのです」

「柳」が民藝運動を行った時代と現在では、必ずしも時代状況が異なるとは考えていません。彼らが生きた時代は、帝国が周辺諸国の人々を「標準化」しようとした時代で、それはグローバルゼーションが進むいまと近い面もある。ひとつの価値観が社会を覆いつつあった時代に日本各地の手仕事や、朝鮮半島・沖縄・アイヌといった独自の豊かな暮らしを営む人々が生み出す品々に美を見出し褒め称えた柳は、上から目線で彼らを保護しようとしたわけではありません。美しさを生む背景にある当たり前の暮らしの多様さ、豊かさを守るためにはどうしたらよいのかを考え、彼らとともに歩むべく活動したのです」

「柳」が民藝運動を行った時代と現在では、必ずしも時代状況が異なるとは考えていません。彼らが生きた時代は、帝国が周辺諸国の人々を「標準化」しようとした時代で、それはグローバルゼーションが進むいまと近い面もある。ひとつの価値観が社会を覆いつつあった時代に日本各地の手仕事や、朝鮮半島・沖縄・アイヌといった独自の豊かな暮らしを営む人々が生み出す品々に美を見出し褒め称えた柳は、上から目線で彼らを保護しようとしたわけではありません。美しさを生む背景にある当たり前の暮らしの多様さ、豊かさを守るためにはどうしたらよいのかを考え、彼らとともに歩むべく活動したのです」



「ワードとなるのが『デザイン』だが、柳たちが用いた『無名』や『用即美』という考え方はデザインを考える上でのヒントになると高木は言う。

「近年は、優れたデザインであればあるほど『見えないデザイン』になっているなど感じています。それはデザイナー個人の作家性や見た目のインパクトが前に出るというよりは、多くの人が共有する形として生まれる、いわば『無名のデザイン』です。それは公共デザイン、コミュニティデザインのような無形のデザインも含みます。優れたデザインは常に人々に働きかけ、動き出すことを求める。働きのなかで美が生まれ、美があるからこそ働きが促される。この相互関係が『用即美』ではないでしょうか。プロダクトのデザインを行う場合であっても、いつか皆のものとして受け入れられ、社会

に溶け込んでゆく『用即美』のあるデザイン、『工藝的なデザイン』を考えることは、これからのデザイナーにとって重要なのではないのでしょうか」

日々、器や道具に接している高木は、どのような姿勢で店を運営しているのだろうか。

「河井寛次郎の『追えば逃げる美追わねば追う美』という言葉があります。さまざまな美が主張される時代ではありますが、僕自身はあつちの美、こつちの美と追うつもりはまったくなく、信頼し合っ

て一緒に仕事ができるかという観点を軸として作り手と付き合っているだけです。もちろん人やものが『民藝的』であるかどうかも考えません。僕が作り手やものを選んでいてのはなく、僕は彼らに選ばれているに過ぎないんです。配り手として作り手・使い手に選ばれる仕事を重ねること、いつ

か柳たちが選んだような美しいものがこの社会にも生まれるといいなとは願いますが、自分が生きている間にそれを見ることができかどうかは重要ではありません」

美しいものに出合うためには「直下に物を見る」ことが大切だと柳は言った。直下に見るために、私たちはどんなことを心掛けるべきだろうか。

「ただ、きちんと見ることです。『見テ知リン知リテナ見ソ』と柳は語りますが、往々にして人は見ようとしないうと、知ろうともしない。見たとしても知ることを怠ってしまふ。その時の気分と社会が駆り立てる欲望のままに選び、消費しているだけです。まずは目の前の相手を素直に受け止め、そして手から学ぶことを繰り返してゆけば、いつかきつと素晴らしいもの・人と出会うことができるのではないのでしょうか」



上：工藝風向の展示風景。木村硝子店のワインカフェには、高木の自宅の坪庭や道端で摘んだ季節の花が活かされている。公園と神社に挟まれた緑豊かな環境に調和している。 下：光を受けて窓辺で艶やかに輝くちゅーカー(左)と花瓶(右)は、沖縄のからや窯で創作を続ける登川均の作。ぼってりとした佇まいが目にも優しい。



工藝風向の店内。焼き物やガラス、漆器や編組品など、作り手との信頼関係によって集まった数々が見やすく展示されている。定期的開催している企画展は季節を感じさせる品揃えが魅力。



ていねいに磨き上げられた本館の大階段にて。穏やかな光に包まれる日本民藝館には、常にゆったりとした静かな時間が流れている。

## 深澤直人 プロダクトデザイナー 日本民藝館館長

Naoto Fukasawa

1956年生まれ。デザイナーの個性を主張するのではなく、生活者の視点で人の想いを可視化する静かで力のあるデザインに定評がある。電子精密機器から建築にいたるまで手掛けるデザインの領域は広く多岐にわたる。世界で最も影響力のあるデザイナーのひとり。日本民藝館館長、多摩美術大学副学長。

### 日本民藝館

民藝の美しさと概念の普及を目指し、宗教哲学者・思想家の柳宗悦が1936年に創設。柳が収集した陶磁器、染織、木漆、絵画など、約1万7000点を収蔵する。外観、内装ともに細部にいたるまでこだわり設計している。

●東京都目黒区駒場4-3-33

☎03-3467-4527

🕒本館：10時～17時 西館：10時～16時30分

🌙月（祝日の場合は開館、翌日休み）

※西館は第2・3水曜、第2・3土曜のみ開館

🎫一般 ¥1,200



# 深澤直人が考える、民藝の奥行きと無限の可能性

民藝の聖地として、多くの人が足を運ぶ日本民藝館。着任から12年を迎えた現館長の深澤直人が思う民藝の現在地、そして、これから向かう先とは。

写真・吉田 雄 文・猪飼尚司  
photograph by Sho Yoshida text by Hisashi Inai

たとえ視点や立場が違っていても、同じ感覚をシェアできる

日本だけでなく、世界の名だたる企業のデザインに携わる深澤直人。第一線を走り続けるデザイナーとして活動する傍らで、深澤は2012年7月より、日本民藝館の5代目館長に就任している。しかし、そもそも民藝とは対極にあるとも思われる工業デザインのトップランナーが、なぜ館長職を務めるに至ったのだろうか。

「確かに僕が就任した時に、少し世間がざわついたことも理解しています。でも、僕の前にも日本民藝館の館長に就任したデザイナーはいるんですよ」  
確かに、第3代の館長を務めたのは、柳宗理。「バタフライスツール」をはじめとした数々の名品を発表し、戦後の日本のインダストリアルデザインの確立と発展に大きく貢献した人物だ。民藝運動の中心を担い、日本民藝館の創設者、柳宗理を父に持つ宗理は、若い頃こそ反発して民藝とは距離を

置いていたそうだが、1950年代後半からは、河井寛次郎の窯で黒土瓶を制作。77年から約30年間にわたり館長を務め、民藝の持つ健全さと純粹さを世に伝え続けた。「柳宗理さんは言わずと知れたスーパースター。僕のデザイン人生の中で最も優れた存在として尊敬している人。先達として慕っていた宗理さんが2011年に亡くなり、いま民藝をつなぐには、同じデザインの道を歩む自分が立ち上がらなければと思いました」  
就任から12年が経ち、民藝にまつわるさまざまなプロジェクトに関わる中で、深澤が改めて感じていることはなんだろう。

「館長として所蔵作品や空間に触れるたびに、思わず『おお！』と声を上げてしまうほど、新しい発見の連続です。なによりひとりの人間が全国を巡り、1万7000点あまりの民藝にまつわる作品を集め、生涯をかけてその美しい精神を語り続けた事実は、驚き以外のなにもでもありません」  
柳宗理は単なるコレクターではない。豊富な知識と深い洞察力、幅広い交流関係を活かし、見出したものをシェアしようとした。その表れが日本民藝館なのだ。「ここは美しい工芸品を鑑賞するための美術館ではなく、文化的価値を見出し、思想を読み解き、意識を共有するための場所。宗理自身が全国を巡り、各所で集めた民藝の品々を大切に保管し管理するだけでなく、日本民藝館という場を設けることで、その価値を大勢が分かち合える状況をつくり出しました。後世になってもその感覚は変わることなく、伝わる確信もあつたはずですよ」  
柳宗理が民藝を謳ってから100年が経ち、社会は大きく変貌した。デジタルで情報が素早く行き来する時代において、民藝が意味するものとはなにか。

「いまや世の中はたくさんものにあふれ、製造の技術も飛躍的に発展しました。日本も経済的に安定し、人々の生活も格段によくなっています。昔に比べて暮らしが多様化した分、ものの吟味はより現実味を帯びたかもしれません。それでもまだ、私たちは無垢な存在に憧れ、素朴なものに心奪われる。これはもはや、人類に共通した意識ではないのでしょうか」  
理屈抜きに豊かさを体感し、理解するための有効手段こそ、民藝にはかならない。日本民藝館の展示物に解説が一切書かれていないのは、直接的にモノと対峙し向かい合うことで、宿す普遍的な美しさを素直に受け止める直観力を大切にしたいという思いの表れだ。「たとえ視点や立場が違っていても、同じ感覚をシェアできる。僕はこれを『予定同調』と呼んでいます。館長であり、大学教授である僕でも、ここにいらっしやる方々と同じものを見て、思考をゆり動かされている。これこそが民藝が持つ普遍性。海外の若い人たちが日本民藝館に足を運んでくれる理由だと思います」  
一方で、日本の若者の来館率が上昇することも期待する。「美術教育の悪影響かもしれないが、どこことなく日本にはアートは変わり者がやっっているという意識があり、クリエイティブがインテリジェンスよりも下に見られていたような気がします。柳宗理は、民藝の文脈の中でクリエイティブを哲学で語り、信仰として考え抜いていった。クリエイティブは社会と分離したところにあるのではなく、むしろ中核を成している大切なもののひとつなのだと」  
生きていく上で大切なことを民藝は教えてくれる。ただ、民藝が大きなトレンドになったり、特定のムーブメントをつくり出すことはない。ただそこにあり続けるだけだと深澤は続ける。  
「ただ無心にモノと向き合うこと。手仕事を通して、温もりを日用の中に宿すこと。世にあるものすべてにデザインは絡んでいますから、民藝から学ぶことはまだまだたくさんあります。ただ民藝は、目指してつくり出すものでもなければ、まねをしようと思っただけのものではありません。きつと一生憧れても、たどり着くことのできない領域。それが民藝。僕がいま心から言えるのは、『参りました、民藝』というひと言に尽きるかもしれません」



# 民藝を愛し、 自ら体现した 芹沢銑介の仕事

柳宗悦と紅型に導かれ、生涯を通して数限りない  
名作を生み出し続けた稀代の染色工芸家。  
その、ものづくりに捧げた人生を振り返る。

編集&文: 佐野慎悟  
edit & text by Shingo Sano

民藝運動の中心人物のひとりであり、20世紀の日本を代表する工芸家として国内外で高い評価を得た芹沢銑介は、1930年に日本の伝統的な染色技法である型染を始めて以来、84年に88歳で鬼籍に入るまで、実に半世紀にわたり、型染作品の制作を続けた。一般的には絵師、彫師、染師といった職人たちの分業によって制作される型染だが、芹沢はそれらの工程をすべて自らの手で一貫して手掛けることで、より作家性を高めてい

った。その手法は56年に「型絵染」として重要無形文化財に認定され、芹沢は61歳の時に人間国宝となった。

芹沢が本格的に染色を始めたのは、東京高等工業学校（現 東京科学大学）卒業後に図案家（「デザイナー」として働くかたわら、妻や近所の若い女性たちを集めて始めた手芸グループ「このはな会」の活動からだ。このはな会ではクッションカバー、手提げ、壁掛けなどを制作したが、その際に用い

たのが模様部分を蠟（ろう）で防染して染色するろうけつ染だ。芹沢はこれらの作品を主婦の友社主催の「全国家庭手芸品展覧会」に出品し、2年連続で最高賞を獲得している。その後型染に移行するまでは、ろうけつ染で数多くの作品を残した。

芹沢の人生に大きな転機が訪れたのは、彼が31歳の時。柳宗悦に私淑する同郷の友人、鈴木篤とともに朝鮮旅行に出た際に、その船中で雑誌『大調和』に連載中だっ

## 芹沢銑介

染色工芸家

Keisuke Serizawa

1895年、静岡県生まれ。1927年に柳宗悦の論文「工藝の道」に感銘を受け、民藝運動に参加する。55年に芹沢染紙研究所開設。56年に重要無形文化財「型絵染」の保持者に認定。76年に文化功労者、83年にフランス政府より芸術文化勲章が贈られた。84年に88歳で逝去。







### 東北窯めぐり六曲屏風

1939年

東北地方を訪れた際に見た窯場の風景を、赤絵と藍絵の絵皿風に仕上げた作品。それぞれに益子、小菅、成島、平清水、新庄東山、檜岡、陸中久慈、境の地名が添えられている。

絹地 型絵染 124.5×282cm  
静岡市立芹沢銈介美術館蔵

## 創作意欲をかき立てた、 日本各地の風土と文化



### 津村小庵文帯地

1967年

1957年から農家の離れを利用し、創作の場とした鎌倉市津の風景を表現した作品。草庵の縁側で寝転ぶ芹沢自身の姿も描かれており、「津村の昼寝」と呼ばれている。絹地(縮緬) 型絵染 485×37cm  
静岡市立芹沢銈介美術館蔵

### 沖縄絵図

1939年

沖縄の地図をモチーフに、海を藍、島を朱や黄土で染め上げた作品。「首里 すい」「那覇 なふぁ」など、地名にはすべて沖縄口(沖縄の方言)でルビが振られている。絹地 型絵染 133.5×109.8cm 日本民藝館蔵



### 那覇大市

1939年

沖縄取材の折に現地で学んだ伝統的な紅型の手法を使い、色鮮やかに表現された作品。形附屋、竹籠屋、雄穀屋などの店が立ち並び、活気に満ちた市場の様子を捉えた。木綿地 型絵染 55.3×70.3cm 静岡市立芹沢銈介美術館蔵



た柳の論文「工芸への道」を読んだ芹沢は「工芸の本道初めて眼前に拓けし思いあり」と、深い感動を覚えたという。さらにその翌年、芹沢は東京の上野恩賜公園で行われた大礼記念国産振興博覧会で、柳らが出品した「民藝館」を訪れ、床の間に掛けてあった鮮やかな紅型(びんがた)の風呂敷に心を奪われた。紅型は沖縄を代表する伝統的な型染の技法で、その鮮明な色彩、大胆な配色、図形の素朴さは、その後の芹沢の作風に大きな影響を与えた。

急速に進む近代化の陰で、各地方に脈々と受け継がれてきた手工芸と、それを生み出す無名の職人たちのていねいな手仕事を愛した芹沢の作品には、取材で訪れた津々浦々の風土も色濃く現れる。彼の取材旅行の中でも最も重要な経験となったのは、39年に柳宗悦ら民藝協会の同人7名と59日間にわたって旅した沖縄だ。そこで芹沢は、長年憧れた伝統的な紅型の指導を受けたほか、本島各地や久米島などを旅してその風景をスケッチしたり、民謡の手ほどきを受けたり、芝居を観たりと、沖縄の文化や風土を思う存分に吸収した。帰京後に芹沢は、沖縄から持ち帰った膨大な数のスケッチをもとに「壺屋のろくろ師」(1939年)、「沖縄絵図」(39年)、「那覇大市」(40年)など、後世に残る質の高い作品を立て続けに制作し、これ以降、芹沢の作風は明



るく伸びやかなものとなった。

この頃は東京の蒲田に拠点を置いていた芹沢だが、45年に第二次世界大戦の空襲によって自宅と工房が全焼し、それまでの作品、型紙、収集品の大半を焼失させてしまう。芹沢は以降6年間にわたり寄寓生活を送ることになるが、その間も本の装丁や雑誌の挿絵などの仕事を手掛けつつ、狭い場所でも制作できる染紙のカレンダーやうちわ、カードなどを量産するようになった。

51年になり、かつて住んでいた蒲田の土地を購入してようやく制作環境が整うと、芹沢の創作意欲は堰を切ったようにあふれ出し、動物、文字、風景など、新鮮な模様を用いた大作が数多く生まれた。こうして作家としての円熟期を迎え、56年には人間国宝にも認定された芹沢の仕事は、最晩年まで続けられた。その長い作家人生の集大成となったのが、76年にフランス・パリの国立グラン・パレで開催した個展『Serizawa』だ。出品作品の選択から陳列まで、芹沢が精魂を傾けた最後の大作とも言えるこの展覧会は、地元紙でマティスやクレーに匹敵するという評論が掲載されたこともあり、約2万9千人の来場者を集めて大成功を収めた。

生涯を通して民藝の魅力を体現し、世界に広めた芹沢の仕事と功績は、これからも広く語り継がれていくことだろう。



### 文字文部屋着

1971年

象形から成り立つ「日、月、木、雲、花、山、水、草、鳥」をグラフィカルにアレンジしたモチーフを、全面に配置した芭蕉布地の軽やかな部屋着。芭蕉布地 型絵染 131.5×64cm 静岡市立芹沢銑介美術館蔵



いまなおモダンに映る、  
ポップで大胆な意匠

### 寿の字のれん

1974年

朱と藍と黄土で染めた雲のモチーフを組み合わせ、抽象化して「寿」の字を表現。楽しく大らかで、明朗快活な芹沢の作風を体现する作品のひとつ。木綿地 型絵染 152×104cm 静岡市立芹沢銑介美術館蔵



### 御滝図のれん

1962年

雲間から悠然と流れ落ち、地表で大きな水飛沫を上げる那智の滝の姿を、ダイナミックかつシンプルな構図と意匠で表現した作品。絹地(紬) 型絵染 135×112.5cm 静岡市立芹沢銑介美術館蔵



### いろは文字文帯地

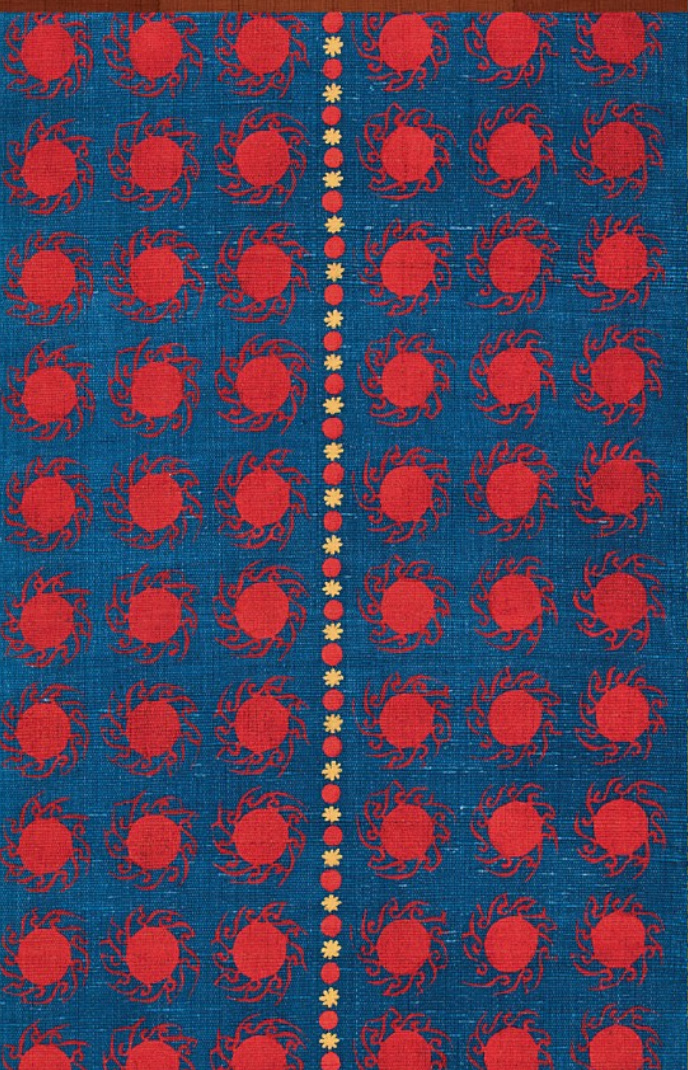
1958年

書家に弟子入りしていた父の影響もあり、若い頃から書に親しんでいた芹沢は、人間国宝に認定された1956年頃から、文字をモチーフにした作品を数多く手掛けた。絹地 型絵染 498×37cm 静岡市立芹沢銑介美術館蔵



Penオリジナル 芹沢銈介ポストカード

芹沢銈介がデザインした帯地や間仕切りからモダンな柄をセレクト、絵葉書にしました。





✂ 点線に沿って切り取り、ご使用ください。

POST CARD

壺文裂(1965)静岡市立芹沢銈介美術館蔵  
Pen 2025年2月号特別企画 Penオリジナル 芹沢銈介ポストカード

POST CARD

松文間仕切(1961)静岡市立芹沢銈介美術館蔵  
Pen 2025年2月号特別企画 Penオリジナル 芹沢銈介ポストカード

POST CARD

幾何文帯(1965頃)静岡市立芹沢銈介美術館蔵  
Pen 2025年2月号特別企画 Penオリジナル 芹沢銈介ポストカード

POST CARD

太陽文帯地(1955)静岡市立芹沢銈介美術館蔵  
Pen 2025年2月号特別企画 Penオリジナル 芹沢銈介ポストカード



ジャンルを超えて広がる、  
芹沢の自由なデザイン



### 「工芸 一号」

1931年

「雑誌そのものが工芸品である」と考えた柳宗悦が企画監修した、民藝運動の機関誌。創刊号から12号分の装丁を担当。毎月500～600部の布を染め上げ納品した。晒木綿地 型絵染 聚楽社刊 静岡市立芹沢銑介美術館蔵



### 大丸百貨店 日本民藝館展ポスター

1955年

大丸百貨店で開催した「日本民藝館展」のポスターは、アール・ヌーヴオーを思わせる洋風のデザイン。河井寛次郎らによる陶芸や、芹沢の型絵染が展示された。和紙 型絵染 76×48.5cm 静岡市立芹沢銑介美術館蔵

### 「すずや・寿」の字のれん

1960年

柳宗悦や芹沢銑介も足繁く通った新宿・歌舞伎町にある「とんかつ茶づけ」の人気店、すずやのために制作されたのれん。当時のメニューなどは横方志功が手掛けた。木綿地 型絵染 109×93cm



### 「絵本どんきほうて」

1937年

「ドン・キホーテ」に関する本の蒐集家カール・ケラーの依頼によって制作した絵本。スペインの騎士を鎌倉武士に置き換え、独創的な日本訳をつくり上げた。和紙 合羽刷 筆彩 28.7×20.8cm 静岡市立芹沢銑介美術館蔵



画像提供：大原美術館

### 大原美術館 工芸・東洋館

1961年

1961年に開館した陶器館(現 工芸・東洋館)の内外装のデザインを芹沢が担当。

㊦岡山県倉敷市中央1-1-15

㊦9時～15時(3月～11月は17時)

㊦月(祝日、振替休日は開館)

### 芹沢銑介 卓上カレンダー、プレゼント！

2025年版 芹沢銑介 卓上カレンダーが、今年も桂樹舎から発売。昭和20年から約40年間制作されてきた型染めカレンダーの復刻版を縮小印刷した卓上タイプ。2025年版は1947年の復刻版で、型染めカレンダー初期のもの。数字や月のアルファベットのデザイン性が高く、色づかいも明るく繊細。今回で制作が終了となる貴重なカレンダーを、20名にプレゼント！

購入詳細はこちら





# 伝統を継承しつつ、 変化を厭わず ものづくりに挑む

坂本 創

小鹿田焼 陶工



So Sakamoto

1990年、大分県生まれ。佐賀県立有田工業高校セラミック科卒業後、鳥取県の名窯・岩井窯の山本敦行に師事。2年の修業を経て家業の坂本工窯に入り、父とともに制作を行う。

柳宗悦が、「誰にも読めぬ地名が  
いまでは多くの人の口に上るま  
でに至った」と記した大分県日田  
市皿山のおんた小鹿田焼。1705年の  
開窯以来、一子相伝の世襲制で長  
い歴史を築いてきた。そうした伝  
統を見据えつつ、自身の創作に挑  
むのが坂本工窯の坂本創だ。  
小鹿田焼は1955年、国の重  
要無形文化財の指定を受けた。川  
の水を利用し、陶土を砕く唐臼の

姿は昔から変わらぬものとして訪  
れた人々の心を動かす。土づくり  
から窯出しまで、いまも人の手で  
つくるところが小鹿田焼の魅力だ  
と坂本も言う。ただ現状に強い問  
題意識も抱いている。  
「歴史の継承や文化財指定によっ  
て小鹿田焼が守られている側面は  
大きいでしょう。僕も基本的なル  
ールを守ります。ただ歴史を遡る  
と必ずしも文化財に指定される手

法だけが正しいとは言えません。  
そこから逸脱したつくり手が幾人  
もおり、ときにルールを外れたこ  
とを明示すれば、極端に言えばな  
にをやってもいいと思います」  
坂本はいま、新たな窯を築いて  
いる途中だ。登り窯はもちろん使  
いながら、それとは別に、現代的  
な造りの窯を新設する。それには  
いくつもの理由がある。以前のよ  
うに大家族で馬力のある環境では

## 民藝の心を継ぎ 未来へとつなぐ、 つくり手たち

歴史に敬意を払い、伝統を守りながらも自身の思いや  
技術を活かして挑戦を続ける現代のつくり手たち。  
彼らはどのように民藝を思い、対峙し、制作に活かしているのだろうか。

写真：中島光行、大城 亘 文：山田泰巨、猪飼尚司  
photographs by Mitsuyuki Nakajima(P60～67), Wataru Oshiro(P68～73)  
text by Yoshinao Yamada(P60～63), Hisashi Ikai(P64～73)



坂本が作陶した器。蹴りろくろを回しながら表面に刻みを入れる「飛び鉋」、ろくろで回転させながら刷毛で模様を描く「刷毛目」など、小鹿田焼にはさまざまな魅力的な技法がある。上から時計まわりに、七寸皿 ¥3,850～、四寸五分飯碗 ¥3,300～、五寸鉢 ¥3,080～、尺皿 ¥8,800～、六寸鉢 ¥3,960～、中央は五寸皿 ¥2,420





なく、数日をかけて登り窯で焼成することの難しさ。薪や灰の調達も年々難しくなっていること。そもそも登り窯の燃焼効率も現代の窯に比べてはるかに悪く、今後の維持が難しい。幸い土に恵まれた土地で、それを継続的に採取する方法は近年進んでいると坂本は言う。歴史と向き合いながら、現実に産地を守る方法を考え続けねばならないという。

そんな坂本に、民藝をどう捉えているかを尋ねると、「学ばほどにわからなくなる」と言う。僕「民藝はもはや文化のひとつ。僕たちの集落で活動する十数人のつくり手それぞれが別の答えを持っているでしょうし、僕自身も聞かれるたびに答えが変わってしまふ。ただ生まれた時からこの環境に身を置く立場としては、続けていくことでそれに応えていくほかはない。なにより100年を経て、いまなお議論が続くことが魅力です。そこにある面白さは人それぞれで、その違いに触れることが楽しい。自分の中にある常識を壊してくれる人と出会うこともある。ものそのものではなく価値の共有に意味があるように思います」



上、左：坂本の作陶風景。菊練りから始まる作業は力強くもリズムカルに進んでいく。父・工(たくみ)と横並びの作業場では、音楽を聴きながら作陶することも多い。「小鹿田焼は人間本来のリズムがかたちになって表れているように思います。だからこそいまも人の心に届くのかも。そして、人間的な魅力も重要です」

## 歴史と向き合いながら、 産地を守る方法を考え続ける

登り窯での窯焚きは年に数度。窯から水分をなくすための火入れから、焼き上がりまで数日を要する。火のコントロールは難しく、最終的に納得のいく仕上がりになるのは6割程度という。



上、右：父の作品とともに登り窯で焼かれるのを待つ器の数々。小鹿田焼は現在9軒が作陶を行う。今後は減っていく可能性も高いと坂本さんは言う。しかし300年の中で5軒まで減ったこともあるといい、「長い歴史で見たらそれほど不思議な変化ではない」とも。







左、上：坂本工窯の作業場および販売所。作業場の天井近くに渡した板に次々と作陶を終えた器が並べられる。販売所には、新たな窯をつくるために解体した古い納屋から出てきたデッドストックも。その時々でラインアップが変わる。作業時は声をかければ見学も可能。著名な産地らしく、観光客も多く訪れる。左奥は自宅で、まさに職住一体。

右、下：小鹿田の里の中心を流れる川の水を利用して、唐臼で陶土を砕く。臼を突く音とせせらぎが響き渡る姿が、柳やバーナード・リーチの心をもったんだ。唐臼で砕かれた土は、その後いくつかの工程を経て作業場へ。集落内には各窯元に唐臼がある。小鹿田焼の土は力強い黒を特徴とする。だからこそ、釉薬や鉋を用いたユニークな紋様が映える。



また、小鹿田焼の若い陶工として注目されてきたが、それに続く若手も増えてきた。かつて閉じられていた集落が柳宗悦によって開かれたように、現在は移動と情報によってさらなる開かれ方が進んでいると坂本はみる。

「民藝が、いわゆる薄利多売寄りのシステムを維持し続けてきたことに難しさを感じています。先ほど触れたように、小鹿田は恵まれた環境ではあるものの、作陶に多くのコストを要するようになっていきます。同時にいまは、ものに魅力や価値を感じてくれる人々とながりがやすい仕組みがいくつもあ。後輩たちにはなるべく多くの経験を共有することで、彼らがそこから選択していく手伝いをしたい。僕らの仕事はアウトプットしていくこと。他の産地の素晴らしい陶工に会いに行ったり美術館に行ったり、なにかを見つけてほしい。結局のところ、人が、ものに出る。小手先の技術を学ぶのではなく、もっと懐の深いなかを鍛えなければいけないというのは、僕自身にも言い聞かせていること。そうして受け継がれてきたものを後輩に届けつつ、小鹿田焼の歴史の歯車のひとつとして多少なりとも恩返しできたら、それほどうれしいことはないです」

いろいろ話しても無心で土に向かう時間が最も心穏やかでいられると坂本は笑う。その手が次なる歴史を築いていく。







ハンドメイドだけでなく、機械でつくったものにもそれなりのよさがある。そう考える菊地は、燕三条の工場と協働し、自身のデザインを工業生産したコレクションも手掛けている。

## 日用の道具に垣間見える、“人間らしさ”

### 菊地流架

真鍮 作家



Ruka Kikuchi

1983年、岡山県生まれ。2000年より父のもとでアクセサリーづくりを始める。06年にカトラリー製作を開始。10年に工房Lueを構える。25年5月には東京のカシカで個展を開催予定。

細く長い柄の先にぶくりと丸みを帯びた匙が付いた、菊地流架のカトラリー。有機的なシルエットと表情豊かな曲面、ところどころに残るハンマーの槌目がていねいな手仕事の様子を映し出す。

「特に民藝の枠組みや思想を意識した仕事をしているわけではありません。でも、つくったものが民藝の仲間であると認めてもらえるのは素直にうれしいですね」

菊地の作品は、全国各地の民藝店で販売されると同時に、エッジの利いたコンテンポラリーデザインショップや人気のライフスタイルストアなど、幅広いジャンルの店舗で取り扱われている。

「無名の職人による普遍的な仕事、日常に寄り添う健康な美しさを宿す民藝の基本精神は好きです。でも『民藝はこうあるべきだ』と言われてしまうと、なんだか息苦しいし、つまらなくなってしまう。民藝の存在や価値は一部の許された専門家が決定づけることではなく、広く大衆に委ねられるもの。民藝の考えも時代によって変化しますが、根本的にはよし悪しの区別はなしに、モノの中に見え隠れする“人間らしさ”を微笑ましく、心穏やかに感じ取ることだと思っています」

手づくりでアクセサリーを製造販売していた両親を、17歳の頃から手伝ってきた菊地。結婚して子どもが誕生したことをきっかけに独立を決めるが、学校で美術やデザ



Lueの定番カトラリーシリーズ。購入時は黄金色に輝く真鍮は使うほどに味わいを増す。右から：一枚板サーバー ¥5,940、ケーキフォーク ¥3,740、フルーツフォーク ¥3,520、よつばフォーク ¥4,180、小スプーン ¥3,300、大スプーン ¥3,960、サーバー ¥4,400、コーヒーサーバー ¥5,500、ティーサーバー ¥4,180



刃のかたちとそれぞれの用途に合わせて、柄の幅を適切に調整。菊地のナイフシリーズは、卓上に置いただけでも絵になる。右から：チーズナイフ 小 ¥13,200、大 ¥14,850、ペーパーナイフ 各 ¥5,720





インを学んだわけでも、工芸の特別な訓練を受けたわけでもない。両親と寄り添う中で自然と身についた金工の技に、料理好きの気持ちを乗せながらつくり始めたのが真鍮のカトラリーだった。そこからおよそ15年を経た現在でも、基本的な私たちは当初からほぼ変わらないのも興味深い。

「僕がつくっているスプーンは、独立する直前に父が『カトラリーをつくるならこうやってみれば？』と教えてくれたものから派生したかたち。初めてつくった時、先端と柄の部分を口ウ付けして、横と上を順番に叩いて成形する工

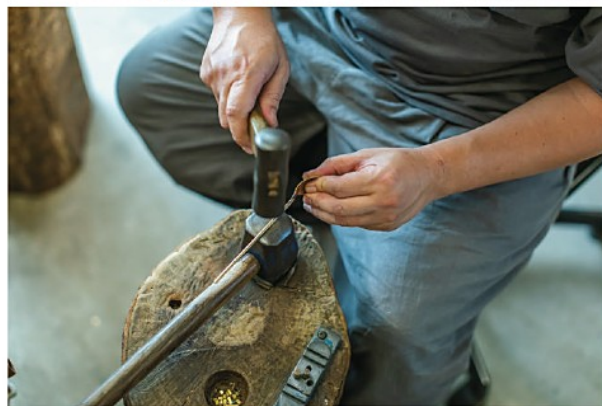
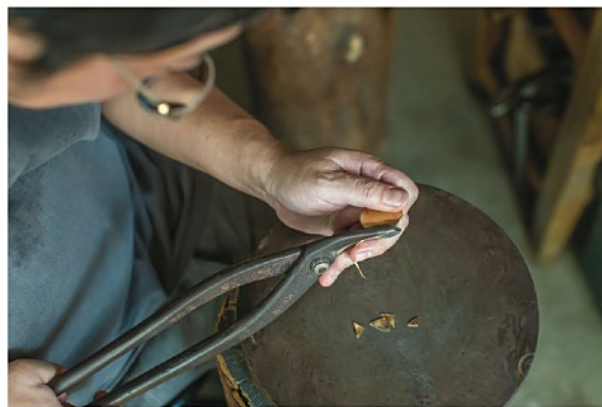
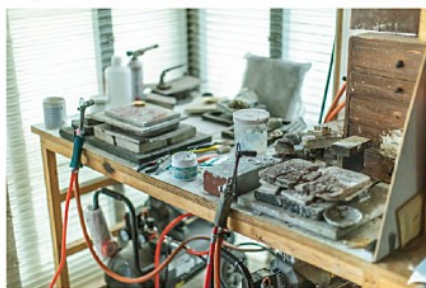
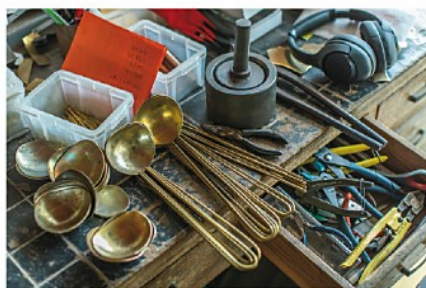
程が理にかなっており、均整の取れた美しいプロダクトだと感じました。その時の印象がずっと変わらないからこそ、同じものをつくり続けているんでしょうね」

機能性をどう考えているかについて問うと、自分が使い勝手がいいと思うものは、世の中すべての人に共通する感覚ではないという言葉が返ってきた。

「カトラリーは食事のために使うものですから、道具として機能するのは当然のこと。でも、僕にとって機能的であることが第一優先ではありません。人それぞれにフォルムや大きさの好みがあるよう

## 真鍮を叩いているうちに、 ちょうどいいポイントが見えてくる

上：作業中のレードル。U字に曲げた柄の先付いたお玉は浅めで横広のため、鍋の底に残ったものも掬いやすい。軽量で扱いやすく、フックなどに吊るして収納できるのも便利だ。 下：バーナーで金属を熱する「焼きなまし」の作業スペース。手元で火を使うため、夏場には汗を垂らしながらの仕事になる。



ひとつずつ工程を重ね、真鍮の板からカトラリーをかたちづくっていく菊地。上から順に、1枚目：定尺の板の上に、自身が決めた寸法とかたちのアウトラインを針先で描き込んでいく「ケガキ」。2枚目：ケガキで定めたラインに沿って、金切りばさみで部材を切り出す「本切り」。3枚目：丸く切り出した皿をバーナーで熱を加え、やわらかくした状態にして細かな加工をしやすい「焼きなまし」。このあと、菊地が金型に当てて叩きながら調整を加えることで、やわらかく広がる美しい3次元曲面の匙が生まれる。4枚目：もうひとつの特徴である長細い柄は、四方を「叩き出し」することでかたちを整えつつ、強度を増す。強すぎれば凹み、弱すぎるとうまく成形できない。菊地のカトラリーのように細かな部材をバランスよく仕上げるには、かなりの技術力を必要とする難しい作業だ。





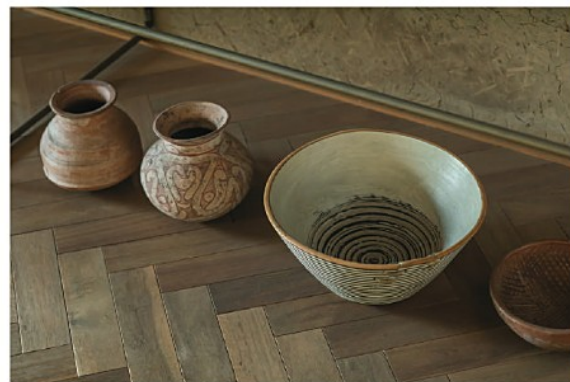
真鍮製の大きなキッチンカウンターが印象的な工房2階のラウンジ。客を招いてミーティングスペースとして使うほか、好きな作品を並べたギャラリーショップとしても活用している。



田園に囲まれたのどかな風景の中に、菊地のアトリエはある。玄関先から見える雑木林の中にぽつんと立つ八幡宮は、江戸時代の歴史書『備陽国誌』にも登場する由緒ある社だ。



工房2階の一角にある、菊地のお気に入りコーナー。アジアの土器、北欧のクラフト、日本各地の民藝に加え、自身の昔の作品と父が手掛けたアクセサリーなどが美しく並んでいる。



焼き物の原型といわれる壺は、菊地のコレクションのひとつ。アメリカの現代作家からイランのアンティークまで、時代も出自もさまざまなが、どことも類似した空気感を醸し出す。

に、機能性にもいろんな見方が存在する。あえてこれが機能的な私たちだと断定すると、それ以外の感覚や意識を否定しているようにで居心地が悪い」

できるだけ同じかたちに仕上げたい、きれいに整えてクオリティを維持しようという意識もかつてはあった。しかし、経験を重ねるほどに、自身がよいと判断するものを純粹に好きだと言ってくれる多くの人がいることに気づく。

「定尺の真鍮板からかたちを切り出し叩いているうちに、ここがちょうどいいというポイントが自ずと見えてくる。一律に整っていないけれども、自分がよしと思い求めてもらえるのなら、それが正解なのだろう」といまは感じています」

いまでは工房にスタッフも加わり、生産体制も比較的安定してきた。2024年の秋には、現在の瀬戸内市の田園地帯にある工房から少し離れた日生エリアの高台にもうひとつのアトリエを開設。「ひとりになって自分と向き合ってみると、これまでの、家族を養い日々を暮らしていくための仕事とはまた違った感覚で仕事をしてみたくなる。真鍮でやってみたくことがまだまだあるし、やれることも見えてくる。もっと仕事に集中して、新しいものができるような気がしています」

25年春には個展も開催する。さらに自由に、大らかな表現を楽しむにしたい。







塗師

渡慶次愛

木地師

渡慶次弘幸

Hiroyuki Tokeshi

1980年、沖縄県生まれ。2003年、輪島の桐本木工所に弟子入り。退職後、寒長茂に挽物を習った後沖縄に戻り独立。11年に木漆工とけしとして初個展。16年より中山木工も始動。

Ai Tokeshi

1979年、沖縄県生まれ。2003年、輪島で福田敏雄、赤木明登の工房に勤務。10年、沖縄に戻り独立。11年より木漆工とけしとして作品を発表、個人の漆作家としても活躍している。

## 沖縄の自然と暮らしの風景に根ざしたものづくり

沖縄県北部の名護市にアトリエを構える「木漆工とけし」の渡慶次弘幸と渡慶次愛。彼らの手から生まれる器や生活の道具には、豊かに広がるやんばるの森に眠る、大らかで野性味あふれる大地の生命が映し出されている。

「私たちが木地に使っているのは、沖縄産の木です。南国特有の気候と土壌の影響から、沖縄の樹木はあまり高くは伸びず、曲がりくねったものばかり。触感もやわらかいものから堅いものまで幅広く、高温多湿のため虫にも喰われやすい。漆器の木地としてはとても扱いにくいものばかりです」

全国を視野に入れば、漆器に適した木材はもっと簡単に手に入るはず。なぜ彼らはあえて扱いの難しい県材にこだわるのだろう。

「僕らがここに暮らし、生きていくから。それに尽きると思います」

ともに沖縄に生まれたふたり。

県内の工芸指導所で愛さんは漆、弘幸さんは木工を学んだのち、輪島に渡り、匠に弟子入り。徹底的に伝統の技を身体に叩き込んだ。7年の修業を経て、帰郷。晴れて独立というタイミングで大きな壁にぶち当たってしまう。

「つくる技は身に付けたものの、つくりたいもののイメージが自分たちから湧き上がってこない。どこから手を動かしたらよいのかさっぱりわからなかったんです」

そんな時に出会った読谷の陶芸家・大嶺實清の「ものづくりは思想。結果は自然に出てくるもの」というひと言が、心を強く打った。

「自分の目の前にあるものから手を伸ばしていく。沖縄の自然、時間の流れ、暮らしの様子。答えはすぐそばにあると感じました」

当初懸念していた、沖縄の木の特性が逆に助けとなり、触れるほどに、沖縄の風土や生活の風景が



製材屋で仕入れた木材のほか、時折原木の丸太を譲り受けることも。仕入れた材は一旦近隣の倉庫で保管し、作業をする直前にアトリエに搬入。玄関前の半屋外スペースで美しいかたちに削り出される時をゆっくりと待つ。



県産材限定といっても入手できる木材は時々で変わる。幅広い木肌の違いが楽しめるのも木漆工とけしの作品の魅力。上：(右)子ども椀 ¥12,100、(上)ボウル ¥18,700、(下)湧田椀 ¥16,500。すべてクスノキ。  
下：(上)シマグワの丸盆 大(価格未定)、小 ¥35,200、(下右2つ)イタジイの皿 大 ¥14,300、小 ¥11,000、(下左)クスノキのリム皿 ¥15,400



伸びやかな佇まいと、持ち上げた時にすっと手にほどよく収まる印象的なかたちの椀。(右)イジュの端反り椀 ¥22,000、(左)クスノキの子ども椀(高) ¥14,300



作品に如実に映し出されて、自分たちがなにを求めているのかが、はつきりと見えるようになってきたのだという。

「上質な輪島の漆器はもちろん素晴らしいのですが、沖縄に住み、沖縄の木を使って仕事をしていると、しっかりと木肌を感じる素朴な器も美しく見えてきて」

扱うのは、野生で自由奔放に生きた木々。豊かな個性は収め難い強いクセへと転じ、仕上げにはかなり手間と時間を要する。

「木によっては参照すべき資料もないので、頼るべきは地元のおじいをはじめとした先人の知恵。失敗を繰り返しながら、経験を重ねていく中で少しずつ予測し、解決できるようになってきました」

材料が最適な状態でなければ、手元に届いたもののクセを素早く読み解き、適切なスキルを加え、美しく育つ活路を自身が見出せばいい。いまの時代に沖縄でできる木工と漆芸をひたすら持続していれば、必然的に沖縄でしかできないものづくりになる。

「自分たちのリアルな経験と暮らしの体感から見た豊かさを素直に表現していく。そんな感覚を大切にしたいと思っています」

たとえば沖縄の県花として知られるデイゴ。初夏の鮮やかな赤い花は美しいが、幹は非常にやわらかく、木材にしても放置するとすぐにカビが生えてしまう。一方で、漆の吸い込みがよく、木地として

## 過去に人々が培った 知恵や文化の重なりが、 生きる糧となる

上：木漆工とけしの木製品部門、中山木工の仕事。沖縄のデザインスタジオ、Luft(ルフト)と協働で手掛けているイタジの四角箸とソウシジュのカトラリーレスト。箸のすべての角がていねいに面取りされており、握り心地が優しく、自然に手に添うかたちになっている。下：同じく中山木工の作品。(右)ハマセンダンの鍵入れ ¥8,800、(左)ハマセンダンの綿棒入れ ¥6,600



職人としての制作とは異なる、渡慶次弘幸個人の作家的なものづくりも行う。ハマセンダンの入隅盆は、自身で拭き漆を施している。

張り出すようにつくられたスペースには、電動のノコギリやカンナといった木工機械がところ狭しと並ぶ。この空間では、仕入れた木材を制作する作品のサイズや用途に応じて、大きなかたちにカットしていく。





床にあぐらをかいた状態で  
直に座り、最終の仕上げを  
施していく弘幸さん。「椅  
子に座るよりも、こうして  
膝を自由に動かせたほうが  
体勢も安定。力がコントロ  
ールしやすいですね」



1. 左手の指先で木肌を感じながら、  
ゆっくりとカンナを動かし、箱物の  
縁をていねいに削り上げていく。  
2. 作業台のかたわらに置かれてい  
る道具の数々。持ち物一つひとつ  
にも意識が及んでいる様子がうか  
がえる。 3. 工房の壁には、大小  
さまざまなカンナが美しく並ぶ。

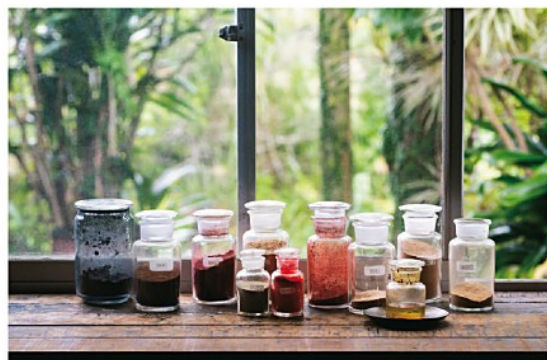




塗りの作業は、すべて愛さんが担当。机に向かい座ったまま、ひとりで黙々と作業をこなしていく。作業の合間にふと眺めるアトリエを取り囲む緑が気持ちを優しくほぐしていく。



下地から上塗りまでの工程を示した見本。素材の状態や目的に応じて、さまざまに塗りを調整するのも木漆工とけしの特徴だ。



作業部屋にはさまざまな材料が置かれている。ガラス瓶の中には、色漆のために使われる顔料や木地の合わせ目や割れ目などに埋め込むための木粉、筆を洗うための油などが入っている。

暮らしの中に見る豊かさを、  
素直に表現していきたい



塗りの作業中は、漆にほこりや塵が混じらないように細心の注意を払わなければならない。塗る前に紙で濾して、細かなゴミを取り除いていく。



木漆工とけしとして発表する素朴な器とは別に、愛さんが近頃挑戦しているのは、伝統的な琉球漆器の復刻だ。写真は「黒漆雲龍螺鈿椀」。

も寸法が狂いにくいという特性も持つ。素材から聞こえる声に耳をそばだて、そっと寄り添いながら、無理のないかたちに仕上げていく。ふたりがつくる漆器にはそんなつくり手の態度も表れている。

キャリアスタートから15年。ふたりで力を合わせ、木漆工とけしとしてのものづくりを行うかたわらで、愛さんは沖縄伝統の琉球漆器を学び、そして弘幸さんは沖縄の木をまた違ったアングルから活用すべく、中山木工という屋号で木製品を発表するなど、最近では個別の活動も始めた。

「昔は沖縄にも木工や漆芸の歴史がきちんと存在し、木造の家や家具づくりが行われ、国が管理する工房で献上品や朝貢品として豪華な漆器をつくっていました。この地でできることがようやくはつきりと見えてきたいま、改めて沖縄の伝統に敬意を払いながら、お正月や家族のめでたい日など、祝いのための「ハレの器」もつくっていきたくと思っています」

伝統にがんじがらめにならずに、時代の流れをつぶさに捉え、ともに姿を変えてきたうれしさと大らかさがあるのも沖縄の特徴かもしれないという。

「昔の人々が、生きる中で培った知恵、技術、文化、歴史の重なりがすべての糧となります。過去があったからこそ、現在の自分がある。そう思いながら、日々手を動かしています」





漆が乾くのを待つへら匙。  
漆は空気中の酸素を取り入れながら、ゆっくりと硬化する。丈夫な構造となめらかな表情を兼ね備えた確かなものにするために、ひたすら時間をかけ、大切に育てるのが漆器づくりの基本だ。





1. イギリスのコーンウォール州にある海辺の街、セント・アイヴスはロンドンから列車でおよそ6時間という距離にある。たくさんのボートが停泊している港エリア以外にも美しい砂浜のビーチがあり、多くのサーファーたちが訪れる名所となっている。2. どこを歩いても風光明媚な情景が目の前に広がり、時を超えて多くの芸術家を魅了してきたことが納得できる。テート・ギャラリーの分館であるテート・セント・アイヴスもあり、バーバラ・ヘップワースなどの「セント・アイヴス派」と呼ばれる地元アーティストの作品を多く展示している。2012年からは栃木県益子町の友好都市となっている。3. リーチ工房の外観。街の中心部から緩やかな坂を上り、徒歩約15分ほどの場所に位置している。4. 左から柳宗悦、バーナード・リーチ、濱田庄司。1952年撮影。



1



3



2

**イギリスの海辺の街、セント・アイヴスにリーチ工房を訪ねて**

日本での民藝活動に多大な影響を受け、故郷イギリスで陶芸を芸術の域に高めたバーナード・リーチ。いまも残されている、彼の工房が伝えるものとは。

写真：山内ミギ 文：坂本みゆき  
photographs by Miki Yamanouchi  
text by Miyuki Sakamoto



4

photo: From the collections of the Crafts Study Centre, University for the Creative Arts

イギリスの最西端近くに位置するセント・アイヴス。美しい海辺の風景で名高いこの町は、J・M・W・ターナー、ジェイムズ・ウィスラー、ベン・ニコルソン、バーバラ・ヘップワースら、18世紀から現代まで時代を超えて数々のアーティストに愛されてきたことでも知られている。陶芸家のバーナード・リーチもそのひとりだ。

1887年にイギリス人の両親のもと香港で生まれたリーチは、母親の死去によって当時関西で暮らしていた祖父に引き取られて幼少時代を日本で過ごした。その後イギリスに帰国するが、ロンドンに留学中だった高村光太郎との出会いをきっかけに望郷の念を強く持ち、1909年に再来日を果たす。そして東京・上野に開いたエッチング教室を通して柳宗悦ら白樺派の作家たちと出会い、柳邸内に窯を築いて作陶を始める。20年には陶芸家の濱田庄司を伴ってイギリスに戻り、濱田とともにセント・アイヴスにリーチ工房を設立して、以後生涯の拠点とした。

「1920年代のセント・アイヴスでは、既にアーティストのコロニーが確立していました。地元の慈善家であるフランス・ホーン女史はこの街に職人たちの自治団体を設立し、地元社会における工芸職人たちの雇用を推進していたのです。彼女はリーチに運営資金と融資を提供し、彼が土地を購入して最初の工房と窯を設立する手



5. バーナード・リーチの大きなポर्टレートとともに旧工房内を再現したディスプレイ。彼の面影がここかしこに息づく。 6. 自然光が降り注ぐ窓の側にある「蹴ろくろ」。長身だったリーチに合わせて座が高くつくられている。大型の器を制作する際には回転するテーブルの上にさらに大きな板を置いて作業したという。 7. 旧工房の片隅にある暖炉は、リーチや職人たちが集まって勉強会や批評会を日常的に催す場だった。その時リーチは、暖炉脇の鉄の大釜に木材を渡してその上に座ることが多かったという。壁の本棚には参考文献を取めた。手前の台は絵付けの作業に使われていた。



6



5

7







1

photo: From the collections of the Crafts Study Centre, University for the Creative Arts

1. 長身をかがめて登り窯の前で作業をしているリーチ(左)。旧工房開設当初の窯は、リーチと濱田が独学しながら手探りで仕上げたものだったという。その後、松林がつくり直したことで性能が飛躍的に改善され、1970年代まで使用されていた。2. 旧工房の壁にかけられた、使い込まれた釉薬のカラー見本。調合のバランスや表面のテクスチャーで微妙に変わる色の具合を細かく示している。リーチの目指した陶器の佇まいを察することができる、貴重な資料とも言える。3. 現在の登り窯。ヨーロッパ初という歴史的な価値もあり、重要な文化遺産として保護しながら一般に公開している。



3



2

助けをしたことでも知られていますが」と、リーチ工房の副館長でありキュレーターのマシュー・タイヤ博士は語る。

リーチ工房は現在、リーチが設立した旧工房と登り窯を保存して一般公開しつつ、隣接する近代的なスタジオでリーチの意志を受け継いだ陶器づくりを続けている。

リーチがつくった旧工房は思いのほか小さい。その中で、窓から差し自然光を背にした明るい一角に足で蹴り回す、その名も「蹴ろくろ」が置かれている。それまでのイギリス式のろくろや日本式の手動で回すろくに変わって30年代にリーチの息子デヴィッド・リーチと、当時リーチのアシスタントを務めていたディコン・ナンスによって設置されたものだ。蹴りの強弱によって生み出されるブリミティブでリズムカルな動きが器のフォルムに個性を与え、リーチの作品づくりで欠かせない、本質的な道具となっていたという。

別の一角には大きな暖炉が設けられている。ここはリーチ工房で働く作家や学生、リーチに会いにきた人々が集い、批評や意見の交換を繰り返した場でもある。暖かな炎を囲み、薪がはせる音を聞きながら、リーチの言葉に耳を傾ける人々の姿が目につくだろう。

「初期のリーチ工房でつくられた陶器の大部分が実験的なものでした。リーチは『陶芸家』芸術家」という考えを持っていました。陶



## リーチ工房の ギャラリーに並ぶ、 リーチや濱田の名品たち



5



4



6



8



7

### リーチ工房

● Higher Stennack,  
St Ives, Cornwall TR26 2HE  
☎ +44-0-1736-799703  
🕒 10時～17時(入館は16時まで)  
📅 日  
💷 一般8ポンド  
🌐 [www.leachpottery.com](http://www.leachpottery.com)

4. イギリスの伝統的な装飾技法、スリッブウェアを使い、「ヒルズ・イン・チャイナ」と呼ばれるデザインを描いた大皿。裏にはリーチ工房とリーチの刻印がある。1930年作。 5. なめらかな質感、淡い色合いと温かみのあるフォルム、使い勝手のよさそうな取っ手と注ぎ口を持つリーチによる磁器製のティーポット。1942年作。展示スペースでは、同じ素材でつくられたミルクジャグも並んで展示されている。 6. 騎手と馬をかたどったオーナメントは1920年代のもの。生活のなかで使われる実用的な器をつくるのが多かったリーチにとって、装飾を目的とした珍しい作品だ。 7. 濱田庄司の手によるストーンウェアの瓶も展示されている。ワックスを使って描いた抽象的な絵柄が、釉薬を弾いて浮き出される技法を使っている。制作年不明。 8. リーチが手掛けた、縁を波状の模様で飾り、中央にフクロウを描いたダイナミックな素焼きの大皿。かつては旧工房の暖炉の上に飾られていた。制作年不明。

芸家は芸術家と同じように受け止められ、作品も評価されることを理想としていたのです。当時のイギリスでは陶芸品には芸術的な価値があると見なされず、単なる実用品としてしか扱われていませんでした」とタイヤ博士は説明する。

この旧工房で最も威厳を持って佇んでいるのは間違いなく3室ある薪炊きの登り窯だろう。1921年にリーチと濱田の手によってつくられ、その後ヨーロッパに留学中だった陶芸家で窯業技師の松林霏之助<sup>つるのすけ</sup>を呼び寄せ、改良したものだ。ヨーロッパで初めての登り窯である。3室の内部を異なる温度に保つことで、まったく違う作品を同時に焼くことができた。たとえば、最高温度1300度に達するひとつ目の窯では淡いブルーグリーンのストーンウェアを、ふたつ目の窯では黒い光沢が特徴の釉薬テンモクを使った品を、3つ目の窯では900度で素焼きの陶器を同時に焼く、といった具合だ。

その後リーチの名声が徐々に高まるにつれて、彼は執筆活動とともに世界中での講演を積極的に行い、彼が目指した陶芸家と陶芸作品の地位向上に邁進する。

79年にリーチが亡くなった後は、リーチの妻だったジャネット・リーチがリーチ工房を引き継ぎ、その後数々の所有者を経たのち、現在は管理のために新たに設立された慈善団体バーナード・リーチ・トラストが運営を担当している。





1



3



4



2

## 若いつくり手たちに 脈々と受け継がれる、 リーチの精神

1. 新しく設置された工房は、旧工房とは違い明るい光で満たされており、その中で若い職人たちが和気あいあいと作業を進めている。  
2. 定番商品である「リーチ・スタンダード・テーブルウェア」のストーンウェアは、同じコーンウォール州でセント・アイヴスから見て北東に位置する、セント・アグネスの土を使ってつくられている。3. 窯入れの準備を進めているところ。蓋付きの容器は人気商品のひとつで、すべて手作業で成形されている。表面の凹凸がある模様によって釉薬のかけ方に濃淡が生まれ、個性ある表情に仕上がる。併設のショップだけではなく、他のミュージアムショップやギャラリーでも販売されている。4. ここでつくられた商品には、すべてリーチ工房でつくられた証しとなる刻印が押される。

リーチ工房は「陶芸品は日常生活に美をもたらす芸術のひとつである」との考えを普及したバーナード・リーチが拠点とし、また100年以上にわたって世界的に有名な作家を含む何百人もの陶芸家が修業を積んだ貴重な場所だ。「彼の築いた工房を守り、その仕事を伝えて思想を受け継ぎ、多くの人にインスピレーションを与えるのが私たちの重要な役目と考えています」とタイヤ博士は語る。そして途切れることなく制作を続けることも大切になっている。

旧工房の隣にある2008年に建設されたスタジオでは、実用陶器シリーズの「リーチ・スタンダード・ウェア」をはじめとする作品制作が行われている。このシリーズは近隣の土を使い、リーチが好んで用いた釉薬を使って焼き上げる。熟練の職人たちとともに、国内外からの研修生や若い職人も積極的に受け入れており、工房内は活気であふれている。この品々は併設のショップで販売されていて、店内には旅行者や地元の人々が入れ替わり立ち替わりやってきては、それらの器を慈しみを込めて手に取り購入していく。

「手仕事によってつくられる陶器には温かみがあり、その制作過程は人間味あふれる精神的な活動でもあります。それを伝えるために、リーチ工房はいつの時代もクリエイティブな活動をする場であり、人々の交流が生まれる場であり続





6

5. 窯の中の器の並べ方で焼き加減も変わってくる。火の回り方を踏まえながらの器の配置は、職人の大切な作業のひとつだ。現在は工房の建物と隣接して別棟につくられた近代的な設備を使用している。6. 工房の一角にはサンプルや資料が数多く並んでいる。おもな釉薬は、リーチが好んで使ったアッシュ、テンモク、ドロマイトの3種だ。



5

7. 併設されたショップでは、リーチ工房の実用陶器シリーズである「リーチ・スタンダード・テーブルウェア」とともに、工房で制作をしている陶芸家や同工房で修業したのち、世界中で活躍している作家たちのオリジナル作品を販売している。取り扱い作家は70人以上にのぼる。8. 飴色のポットや小さな壺、ピッチャーなどが並ぶ。どれも素朴な表情が魅力だ。



8



7



#### 故人の人生を祝福する リーチが手掛けた墓

セント・アイヴス中心部の丘の上に位置するバーヌン墓地。ここにはリーチによる灯台を描いたタイルで飾られた墓がある。眠っているのは漁師であり画家だったアルフレッド・ウォリス。陶芸を芸術として高めようとしながらも、住民に自分の思想を押し付けることなく、制作を通して街と人々とともにあり続けたリーチの思想を象徴する存在だ。

「けたいと思っています」  
受け継ぐだけではなく、高めていくことも大切だ。リーチは主流の文化から見過こされていった工芸品を再発見し、それらの素晴らしさを伝えることに生涯を捧げた。イギリスでも民藝の概念が広く知られるようになったいまこそ、「リーチの思想を現代に即して再解釈し、次世代の陶芸家を育成しながら、つくり手にとっても、使い手にとっても、生活を豊かにする作品づくりを目指したい」とタイヤ博士は力を込める。  
美を追い求めたリーチの精神は、これからも脈々と受け継がれていくだろう。





# 泊まりながら体感、民藝と過ごす宿

## 楽土庵 [富山県砺波市]

RAKUDO AN

●富山県砺波市野村島645  
☎0763-77-3315 全3室  
¥88,000~(1室2名、夕・朝食付き)  
www.rakudoan.jp

土地性を活かした民藝を感じさせる宿が、日本各地にある。それぞれの地に根ざす歴史や手仕事の妙を感じながら、暮らしの中での民藝を、旅先で楽しみたい。

写真:内藤貞保 編集・文:脇本暁子  
photographs by Sadaho Naito (P80~83) edit & text by Akiko Wakimoto



1. 釘を使わない富山の伝統工法「ワクノウチ」のラウンジ空間。堅牢な黒い木組みと白壁のコントラストが美しい。宿に到着すると立札茶席で抹茶と地元の菓子でもてなされ、ほっと一息つける。2. 江戸時代の金沢の武家屋敷に倣ったといわれる切妻屋根の伝統家屋アズマダチ。屋敷の周囲を冬の雪や夏の強い日差しから家を守る防風林としてカイニヨ(屋敷林)が囲む。宿泊料金の2%を散居村保全活動の基金に充てている。3. ライブラリーには、建築家の安川慶一が約70年前、松本民藝家具のために試作したライティングビューローとビエール・ジャンヌレのラウンジチェアが置かれている。ゲストは自由に使うことができる。かたわらには現代美術家・内藤礼のドローイング「color beginning」と小さな木彫の「ひと」が。



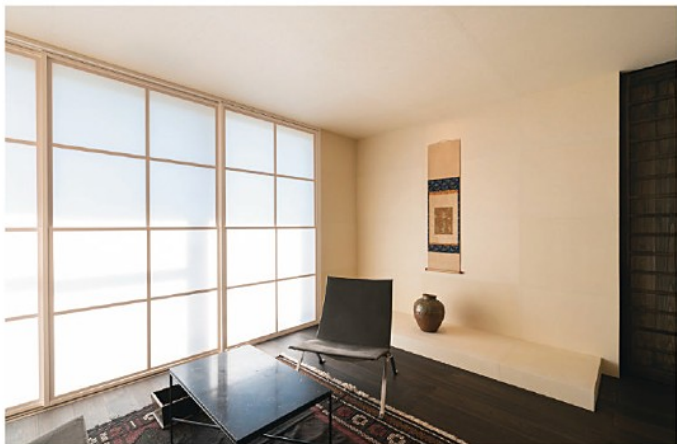




各部屋には開閉式の木塀から田園を眺められるテラスが。この時期はやわらかな緑が広がるが、田植えの時期は水鏡のように月が水田に反射する幻想的な景色を見せてくれる。心地よい風とともに午後のお茶を。



稲わらを混ぜ込んだ土壁の「土do」の部屋。ハンス・J・ウェグナーのソファがよく馴染む。ホテル内の民藝の作品や工芸品の多くは隣接しているブティック、水と匠で購入できる。



右：「絹ken」の部屋の壁と天井に張られた「しけ絹」は、富山県で伝統ある城端絹（じょうはなきぬ）を唯一手掛ける松井機業によるもの。節があり、不均一な絹糸の表情が美しい。左：ハタノワタルの「紙shi」の部屋には、ポール・ケアホルムのラウンジチェア「PK22」が置かれ、床間には李朝の刺繍仏の掛け軸と、室町時代の古丹波が飾られている。やわらかな和紙が醸す雰囲気と相まった心地よさが広がる。

## 民藝の精神性を体感する、古民家のアートホテル

富山県西部に広がる砺波平野は、かつて大名前田家が統治し、加賀百万石の4分の1を担う年貢米が収穫された一大穀倉地帯だった。この地を特徴づけるのは、水田の中に農家が離れて点在する「散居村」だ。

散居村の美しい景観と豊かな文化を保全しようと、2022年秋に開業したのが楽土庵。水田に囲まれた「アズマダチ」と呼ばれる築200年の古民家を再生したアートホテルだ。

木の引き戸を開けると、目に飛び込んでくるのは染色家・芹沢銈介の四曲屏風。他にも富山に疎開していた板画家・棟方志功、濱田庄司、河井寛次郎ら民藝の巨匠の作品が。そう、このホ

テルは民藝を随所に感じることができるのだ。それらがビエール・ジャンヌレのラウンジチェアやジャスパー・モリソンの照明と不思議な調和をみせている。

「富山は民藝の精神性と親和性があります。浄土真宗の信仰が篤く、大いなる力に身を委ねる“他力”という考え方が根付き、それを柳宗悦は“土徳”という言葉で表現しました。つくり手のはからいを超えた民藝の他力美と通じるものがあるのです」と、ホテルを運営する、水と匠のプロデューサー林口砂里は話す。

3つの客室はテーマごとに内装が異なる。壁と天井一面に和紙職人ハタノワタルの手漉き

紙が張られた「紙shi」。二頭の蚕が一緒につくる繭から紡いだ「しけ絹」を壁と天井に使った「絹ken」は、天然のレフ板と言われる絹が光をやわらかく反射させ、まるで繭に包まれるような心地よさだ。「土do」の部屋では、土を扱う現代作家の林友子が敷地内の土を採取し銀箔を混ぜて製作したアートワークが床間に施され、光の加減で煌めいている。

どの部屋にも民藝の品が置かれ、北欧や李朝の家具、現代美術作品、西アジアのトライバルラグなど、時代や国を超えて出合い共鳴する空間だ。ここを訪れば、民藝の新たな魅力に開眼する滞在となるだろう。



# 杜人舎 [ 富山県南砺市 ]

MORITOSHA

●富山県南砺市城端405  
城端別院善徳寺内  
☎0763-77-3732 全6室  
¥30,000～(1室2名、朝食付き)  
www.moritosha.jp



富山市民芸館の初代館長を務めた建築家・安川慶一が手掛けた建物を改修。かつての同朋研修道場を暮らしの中に息づく民藝の美を体感する宿舎として、富山県西部観光社、水と匠により2024年春に開業した。



2階の客室はすべて違う間取りのツイン5室と総檜風呂を備えるトリプルルームの全6室。長期滞在も可能だ。奥の引き戸を開けるとデスクがあり、テレワークするのも使い勝手がいい。



1. 時を経た質実の美を感じさせる講堂。テーブルやラッシュ編みの長椅子は、当時の松本民芸家具のもの。 2. 1861年創業、福光屋磯右エ門むらた食品のぶっくりとした油揚げや、ふるさとの味加工組合の味噌を使った味噌汁など、地域で昔から食べられてきた滋味深い朝食が供される。 3. 1階のショップでは、濱田庄司や芹沢銈介など民藝ゆかりの作家や、韓国から移住し南砺の土を活かして作陶する金京徳の器などの作品を販売。奥のカフェスペースでは、地元の和菓子店5軒の味を一度に味わえる「城端銘菓とドリンクのセット」(¥1,000)や、昆布入りベーグルサンドなどの軽食が味わえる。

## 寺の敷地に立つ宿で、柳宗悦の美の心を知る

550年の歴史を持つ北陸の浄土真宗信仰の拠点のひとつ、富山県南砺市の城端別院善徳寺。柳宗悦が62日間逗留し、民藝思想の集大成である『美の法門』を書き上げたことでも知られている。その敷地の一角に、2024年3月に開業したのが“泊まれる民藝館”をコンセプトにした宿・複合施設の杜人舎だ。この建物は、もともと柳の愛弟子であり建築家・木工家の安川慶一により、僧侶や門信徒が仏教の学び舎として集う研修道場として設計されたもの。その端正で美し

い佇まいはそのままに、富山出身の建築家でチームラボアーキテクツのパートナー・浜田晶則が率いる浜田晶則建築設計事務所がリノベーションを手掛けた。

1階はカフェと民藝ショップ、講堂があり、2階は長期滞在も可能な全6室の客室だ。なかでもトリプルルームは檜の芳香漂う総檜風呂があり、室内には実際に安川慶一が愛用していたメキシコの革張りの椅子が置かれている。空間自体が民藝を体現しており、床の間にしつらえた

民藝の品は一部購入が可能だ。

翌朝は善徳寺の勤行にぜひ参加してほしい。朝の清々しい空気の中、寺院の本堂で厳かに響く読経と地域の住民が真摯に祈る姿に、柳宗悦が「土徳」と表現した土地の人々が持つ精神性に触れることができるだろう。

朝食は、かぶら鮓や赤かぶ漬物など、地元の伝統的な発酵保存食を中心とした郷土料理を民藝の器で味わえる。暮らしの中で育まれた民藝の本質を知ることができる宿だ。



# なぜ富山は民藝の聖地となったのか？



阿弥陀仏を表す「無量寿」の言葉を描いた棟方志功。  
手前は、アフリカ先住民の手彫りベッドと一木彫りの椅子。「アフリカの椅子は脚が6本あるものも。楽しんで創ったことが伝わります」と高坂住職。

## 光徳寺 [富山県南砺市]

KOUTOKUJI

●富山県南砺市法林寺308 ☎0763-52-0943  
●9時～17時 ●火、水、木 ●¥500



右:豪農の屋敷を移築した庫裡「躑躅閣」には、国境を越えさまざまな国や時代、デザインがミックスされた民藝品がひとつの空間で調和。左:本堂の横の座敷も実際に生活しているスペース。光徳寺のつづじが咲き乱れる様子から靈感を受け一気描き上げた横絵「華厳松」も、土蔵の展示室で観ることができる。

誰もが知っている有名な産地ではないにもかかわらず、富山が民藝運動の聖地と言われるのはどんな理由があるのだろうか。

そのカギとなるのが、富山の西部・福光町（現南砺市）に1471年に建立された、真宗大谷派寺院「光徳寺」だ。板画家の棟方志功が第二次世界大戦末期に、50年以上の歴史を持つ富山の光徳寺に家族で疎開したことはあまり知られていない。

「祖父の十八世高坂貫昭が河井寛次郎の紹介で棟方と知り合い親交があつて、疎開を勧めたそうです」と、現住職である二十世高坂道人が話す。

棟方は、福光の人々と触れ合う中で作風も変化していく。福光時代の棟方のもとを訪ねた柳宗悦は、作品を見てそれまでの我執の強い作風から我による濁りが消えたと感じたという。6年8カ月にもおよぶ福光での暮らしが棟方の作風の変化に強く影響を及ぼした理由を、高坂はこう説く。

「富山では浄土真宗の信仰心が篤く、目に見えない仏や自然に対して畏敬し感謝する精神がこの地の人々に根づいています。浄土真宗の「他力本願」という思想で、柳はそれを「土徳」と表現しました。名もなき職人がつくる生活用品や民衆のための工芸品に、なぜこんなにも自由で健やかな美が宿るのか、そのことわりを長年、解き明かしたいとしていた柳。浄土真宗の一個人のはからいを越えた先である「他力本願」に、民藝思想との深い共鳴を見出した。

その後、柳は近隣の城端別院善徳寺に62日間滞り、民藝思想の集大成というべき論文『美の法門』を完成。富山は、民藝の美の法則を見出し、民藝思想の形成に欠かせない地だったのだ。

光徳寺は河井寛次郎、濱田庄司をはじめ民藝運動の巨匠たちが多く訪れ、サロンのような存在になつていく。

民藝運動に共感した高坂貫昭住職の時代より、世界・日本各地から蒐集した民藝コレクションが圧巻だ。築200年の豪農の屋敷を移築した豪快な梁が渡る空間に、アフリカの一本彫りスツールや18世紀のグレゴリオ聖歌の楽譜にピアノ、古染付の猪口など、国や時代、宗教がミックスされた世界の民藝品が一堂に会している。どれも存在感はあれど声高に主張することなく絶妙な調和を見せる。「これでも出しているのは3分の1程度で、器や家具は実際に暮らして使っているものばかりです」民藝館にあるような英国のウィンザーチェアも、ていねいに修繕しながら普段使いされている。柳が提唱した用と美が一致した民藝の暮らしがここにある。



# 燃る屋 [岡山県倉敷市]

YORUYA

●岡山県倉敷市東町2-7  
☎0763-77-3315 全13室  
スタンダード¥56,870〜、  
スイート¥189,970〜(1室2名、朝食付き)  
<https://yoruya-kurashiki.com>



明治期は呉服屋が軒を連ねた東町。倉敷・美観地区の入り口から少し奥へ進んだ場所に位置し、静かな暮らしを垣間見ることができる。早朝、観光客が訪れる前の街歩きもお薦めだ。



屋号は「より合わせる」という意味の古語「燃(ねん)」に由来。繊維の街である倉敷の、新・旧、工芸・工業など異なる要素を調和し、街をより合わせる願いを込めている。

右：レセプションがある母屋棟と、スイート棟や漆喰・レンガ棟の客室をつなぐ空間である中庭には、岡山と広島の間境近くにある仙養ヶ原から採掘された黒い仙養石と、夏に花咲く紅色の百日紅が。左：コの字型に配された16席のダイニングでは、瀬戸内や地元の旬の食材が日本料理のコースで供される。



## 民藝のDNAを受け継ぐ、倉敷の新しい宿

江戸時代から残る蔵屋敷、白壁に幾何学的なまこ壁、倉敷川にたゆたう柳並木。岡山を代表する観光地の倉敷は、日本屈指の民藝の聖地でもある。この地の大地主で実業家の大原家が柳宗悦や民藝のつくり手たちを支援し、日本で2番目の民藝館である倉敷民藝館が誕生。倉敷ガラスや倉敷織通、花むしろなど、民のための優れた工芸品が開花した。

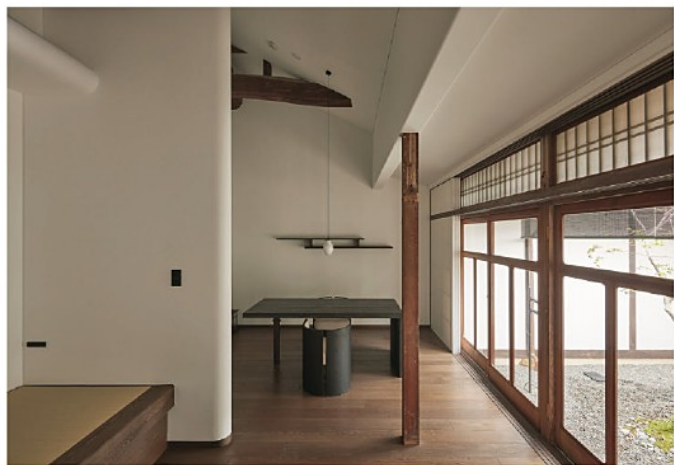
そうした倉敷民藝のDNAを受け継いだ料理宿が2024年11月に開業した。明治期に呉服屋

の別邸として建てられた築110年の伝統的建造物と新築棟に5様の趣きの13室。そこかしこに倉敷や岡山に根付く手仕事の技を見ることができる。入り口に掲げられているい草の縄暖簾は、かつてい草の一大産地だった倉敷で、1886年に創業した須浪亨商店五代目の須浪隆貴の手によるもの。客室に設えた平盆は岡山県美作市在住の木工家・加賀雅之、湯呑みは2024年2月に倉敷青木窯を開窯した三宅康太による作陶と、倉敷民藝の新しい担い手たちだ。

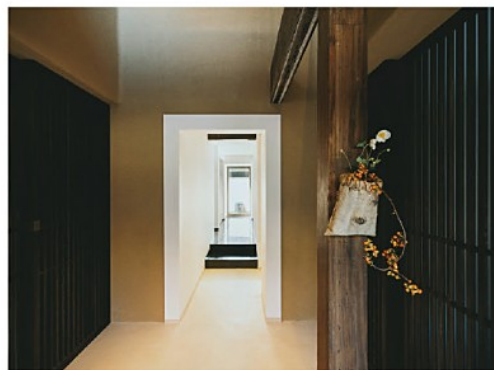
燃る屋では、食を通して倉敷の地域性を体験できる。江戸時代に干拓が行われた倉敷は水運を活かし、さまざまな物資が集まる一大拠点として繁栄。この地の歴史に想いを馳せ、瀬戸内で獲れる魚や近郊の山の幸などの食材を二十四節季・七十二候の季節の移ろいに合わせた割烹料理が味わえる。併設のワインバーで余韻を楽しむのもいい。歴史を継承し先人の想いを燃り合わせた手仕事と食を通して、より深く倉敷を知ることができる宿だ。



伝統的建造物に指定された建物を改修した母屋棟。2階はスタンダードの部屋。太い梁が印象的。内装はSIMPLICITY。建築は今井健雄建築設計事務所が設計。



既存の建物を改修したジュニアスイートルーム。寝室とリビングが一体となった開放的なつくり。部屋の壁は、当時そのままを残した黒漆喰と、当時の左官壁の下地を残した黄色い土壁で構成。



上：細い路地を倉敷の方言で「ひやさい」と呼ぶ。母屋と各客室4棟をつなぐ細い通路は、そうした往時の付まいをいまに残す倉敷のひやさいに着想を得ている。下：76㎡のスイートルームのリビング。天井は4mほどある開放的な空間となっている。部屋専用の庭を望める、半露天風呂も併設されている。





## ものづくりの聖地で、倉敷の美に浸る

2018年以降、倉敷の美観地区で1日1組限定の宿や素泊りの宿泊施設、ギャラリーを運営する滔々。町家や江戸後期の蔵などを改修した、それぞれ趣の異なる7つの宿が点在する。

なかでも民藝好きなら見逃せない宿が、倉敷民藝館や日本郷土玩具館の隣に位置する「倉敷民藝館南 奥の宿」だ。22年4月にオープンした

倉敷のものづくりを衣食住で体感できる複合施設、倉敷SOLA内にあり、部屋の北の窓から倉敷民藝館を眺めながら滞在できる。

1階はミシュランガイドで1つ星を獲得した日本料理店ブリコールの姉妹店、雲。多様な民藝の器で供される、地元の食材を使った美食で身も心も満たされる。

1. 家具はほぼすべてオーダーメイド。ソファは福岡の柴山家具製作の柴山信一の作。 2. 倉敷のものづくりを衣食住で体感できる複合施設、倉敷SOLAの2階に位置する。中央のみんながい広場を歩いて民藝館に行くことができる。 3. 倉敷美観地区の表通りの喧騒から離れ、窓から緑豊かな借景を楽しめる。ベッドのふとんは名古屋で150年続く老舗、丹羽ふとんによるもの。快適な寝心地だ。備品の一部はギャラリーにて取り扱いがあり、購入することができる。

●岡山県倉敷市中央1-4-13 ☎080-9799-7751 全7棟  
倉敷民藝館南 奥の宿 ¥44,000～(1室2名)  
<https://toutou-kurashiki.jp>



## 民藝館に泊まる、唯一無二の体験

江戸時代、徳川幕府直轄の天領となった飛騨高山で、御用商人として繁栄した日下部家。民藝運動に関わりが始まったのは11代目当主の日下部禮一からだ。民藝運動に共感し、国の重要文化財にも指定された日下部家住宅の一部を改装して、日下部民藝館として1966年に開館。

2023年、民藝館に隣接する築100年あまりの

離れを改修した1日1組限定の宿が誕生した。ゲストには日下部家の亭主自ら茶を点てお出迎え。滞在中は隣の民藝館に自由に入出入りでき閉館後もプライベートラウンジとして囲炉裏端で食事をするのが可能だ。綿々と受け継がれてきた飛騨高山の文化を体感できる、宿泊者にのみ許された特別な滞在を約束する。

1. 明治の名工・川尻治助による近代民家建築の最高峰、日下部家住宅の一部を一般公開する、日下部民藝館の囲炉裏。ここで、料亭の仕出し料理などの食事をいただける。 2. 空襲の被害を受けず、城下町の街並みがそのまま残る飛騨高山。伝統的建造物が立ち並ぶエリア。 3. 左官職人として金閣寺などの文化財の修復に携わった建築家の森田一弥がリノベーション。左官職人の扱土秀平率いる秀平組による土壁や、800年の歴史を持つ手漉き和紙の山中和紙など、飛騨の匠の粋を極めた空間。

●岐阜県高山市大新町1-55 ☎080-2450-6222  
¥154,000～(一棟貸切、定員4名)  
<https://taniya-hida.com>



## 松本ホテル花月 「長野県松本市」

MATSUMOTO HOTEL KAGETSU



### 松本民芸家具を楽しめる、歴史あるホテル

松本城を訪れる旅人のための宿として、1887年に創業した老舗ホテル。松本民芸運動の旗手であり松本民芸家具の創設者・池田三郎のアドバイスによって、約50年前の旧館建築時、明治の洋風様式に松本民芸家具を随所に配した。2016年にリニューアルし、建築家の永山祐子がホテル外装のデザイン、濱川秀樹がインテリア

デザインを手掛け、民藝を体感できる内装に快適さも加わった。

併設している喫茶室、八十六温館も趣深く、池田の監修による店内は創業当時のまま。飴色に艶めく椅子にもたれながら、店名の由来にもなった86度で淹れるネルドリップコーヒーを嗜みつつ、往時に思いを馳せたい。

1. 当時の意匠そのままの喫茶室、八十六温館。アルプスの雪解け水が染みこんだ湧き水でいねいにネルドリップした珈琲と、昔ながらの固めのプリンが人気。ホテルのモーニングも喫茶室でいただける。 2. 漆喰の壁に、木の梁の内装の旧館スタンダードツインルーム(1室2名、夕朝食付き¥43,120〜)。 3. 松本民芸家具の重厚なチェアとテーブルを設えたロビー。創業当時の写真なども展示され、雑誌「民藝」や書籍も読むことができる。

●長野県松本市大手4-8-9 ☎0263-32-0114 全89室  
ツイン 旧館¥22,220〜、同 本館¥22,660〜(1室2名、朝食付) ※2025年1月1日からの料金  
<https://matsumotohotel-kagetsu.com>

## ホテルシツ 「島根県出雲市」

HOTEL shitsu



### 器とともに、暮らすように旅する宿

島根は器の街だ。柳宗悦、濱田庄司、河井寛次郎、バーナード・リーチ……彼らに指導を受け、民芸運動の影響を受けた窯元が勢揃い。柳が愛したコバルトブルーが特徴の出西窯や、ぼったりとした黄釉が愛らしい湯町窯、河井最後の内弟子が開いた森山窯に二彩の袖師窯など。

2019年7月に開業した一棟貸切の宿shitsu(シ

ツ)は、約80年前に建てられた町家をリノベーション。アイランドキッチンが主役のダイニングで、窯元や作家の器を自由に使うことができる。飲食店が多いエリアなので、テイクアウトしたり、山陰の食材を自分で調理するもよし。触り心地や使い勝手をここで試せる。島根の窯元巡りの旅に覚えておきたい宿だ。

1. 最大6名まで宿泊できる、一棟貸切の宿。出西窯や湯町窯の器など、民藝の陶器を使って調理することができる。 2. 棚には出西窯の灰皿や作家の花器や手仕事の籠、藪などが飾られている。 3. 1階は広めのダイニングキッチン。2階は、北欧や1950〜60年代のミッドセンチュリーのヴィンテージ家具をしつらえた、和洋折衷の和室になっている。出雲市駅北口から徒歩3分なので、出雲の豪農屋敷を改装した出雲民芸館や、山陰の民藝の窯元へもアクセスがよく、観光にも便利だ。

●島根県出雲市今市町918 ☎090-9753-8086  
¥18,700〜(一棟貸切) ※2名まで同一金額  
<https://shitsu.amebaownd.com>





## 並木教授の 腕時計 デザイン講義

写真: 渡邊宏基 (LATERNE)

文: 並木浩一

photographs by Hiroki Watanabe  
text by Koichi Namiki

Koichi Namiki

1961年、神奈川県生まれ。時計ジャーナリスト。雑誌編集長など歴任し、2012年より桐蔭横浜大学の教授に。新著に『ロレックスが買えない』。

### 44 限目 2つ目のパイロットウォッチ

## 正統のツーレジスターが物語る、 パイロットウォッチのルーツ

最近のパイロットウォッチでは、水平にふたつの積算計を配置した「ツーレジスター」機のデザインをよく目にする。往年の名機のリバイバルやインスパイアでは、この一択といっても過言ではないだろう。12時間積算計を廃したヒストリカルな佇まいはいまむしろ新鮮で、ヴェンテージデザインとラグジュアリーなスポーツウォッチの魅力が積層されている。パイロットクロノグラフの最新化形が3つ目であることは間違いない。各ブランドで採用された稀代のベストセラー・縦3つ目キャリバーであるバルジュー(ETA「7750」への差別化として、多くのマニファクチュールは自社製クロノグラフムーブメントを下3つ目のレイアウトで設計することを好んだ。その先の成果とし

て、6時位置の12時間積算計を外すだけで横2つ目が成立する。進化の果てにクラシカルなツーレジスターに回帰する、といった逆説的な流れはなんとも興味深い。ノスタルジー重視ではなく、フライバック機能を搭載した高級モデルの多さも注目値するだろう。ワンアクションでリセットとリスタートを行う機能は、操縦桿を握る手で素早い計測を要求されるパイロットのためのものだ。そもそも飛行機の黎明期、クロノグラフには30分積算計があれば十分であった。1909年、世紀の大冒険と謳われた初のドーバー海峡横断飛行は、飛行時間36分55秒で達成されている。30分計に切り詰めた機能は、飛ぶことに無上のロマンがあった時代の、間違いない痕跡なのである。







## BREGUET

[ブレゲ]

タイプ 20 2057

—ミリタリーバージョン

1955～59年にフランス空軍に納入された1100本のモデルからのインスパイア。従来の「タイプXX」と異なり、名称にはオリジナルと同じアラビア数字の「タイプ 20」を採用した。ミントグリーンの蓄光針や、3時位置の30分積算計が9時位置のスモールセコンドより大きいアシンメトリーなデザインが特徴的。毎秒10振動の高精度ハイビートムーブメントはフライバック機能も装備。自動巻き、SSケース & プレスレット、ケース径42mm、パワーリザーブ約60時間、シースルーバック、10気圧防水。¥3,366,000／ブレゲ プティック銀座 ☎03-6254-7211





## BLANCPAIN

[ブランパン]

エアコマンド

ブランパンが1950年代に製造したパイロット向けモデルにインスピレーションを得たデザイン。特徴的な「ボックス型ガラス」をサファイアクリスタルで再現した。ヴィンテージ感を強調するカムフラージュグリーンは、メゾンのマニファクチュールがあるジュウ渓谷のモミの木を連想させる。毎秒10振動のフライバッククロノグラフを搭載。自動巻き、チタンケース、ケース径36.2mm、パワーリザーブ約40時間、シースルーバック、カーフ×ラバーストラップ、3気圧防水、世界限定100本。¥3,047,000／ブランパン プティック 銀座 ☎03-6254-7233





## LONGINES

[ロンジン]

ロンジン スピリットフライバック

クロノグラフとパイロットウォッチの両分野でパイオニアであるロンジンから、フライバック機能搭載のツールレジスタークロノグラフの新色が登場。アビエーターウォッチの伝統的な特徴を取り入れながら、時計製造の最先端テクノロジーと融合させた、ヒストリカルデザインの最新鋭機。ムーブメントには耐磁性のあるシリコン製ヒゲゼンマイを備え、COSCのクロノメーター認定を取得。自動巻き、SSケース、ケース径42mm、パワーリザーブ約68時間、シースルーバック、レザーストラップ、10気圧防水。¥954,800/ロンジン ☎03-6254-7350



各界で異彩を放ち、存在感を強める旬なクリエイターたちを紹介。新たな時代を切り拓くクリエイションと、その背景を紐解く。

## Awa Ito

1996年、神奈川県生まれ。学習院大学文学部フランス語圏文化学科卒業。noteで公開したエッセイ「パパと私」がXをきっかけに話題となり、「創作大賞2023」でメディアワークス文庫賞を受賞した。

## 伊藤亜和

文筆家

写真:土田 凌 文:篠原諄也 協力:横浜美術館  
photograph by Ryo Tsuchida text by Junya Shinohara  
cooperation by Yokohama Museum of Art

# 19

日常の断片を混ぜ合わせ、  
新感覚のエッセイを紡ぐ



ジェーン・スーや糸井重里にも絶賛される新時代の文筆家、伊藤亜和。昨年の父の日にnoteで書いたエッセイ「パパと私」がXで拡散され、その投稿は910万回以上も見られることに。今年のエッセイ集『アワヨンベは大丈夫』を相次いで上梓し、文芸の世界に旋風を巻き起こした。

セネガル人の「パパ」と価値観が合わずに大喧嘩をしたこと、日本人で文学好きの「ママ」から借りたネックレスをすっかりなくしてしまったこと。そうした日常の断片を、対象と適度な距離感を保ったドライな筆致で綴りながら、時には身近でかけがえのない愛を巧みに描き出す。

エッセイを書くプロセスをシ

シャ（水タバコ）にたとえる。「まず、偶然起きた出来事の関連性を見つけていきます。そこから、シーシャみたいな、いろんな味を混ぜ合わせおいしいフレーバーをつくり出すようにして、一見まったく関係がないふたつの出来事を私が作想的にこじつけることによって、ひとつの物語が立ち上がる。少し大げさですけど、すべては導かれていて、必然だったと感ずることもあります」

かれています。必然だったと感ずることもあります」

### 『アワヨンベは大丈夫』

個性派揃いの家族と過ごす日々を書いた最新作。パパから譲り受けた「周りと違う」という意識、捉え難く「宇宙人」のようなママへの思いなどを綴る。晶文社 ¥1,760



### 『存在の耐えられない愛おしさ』

両親や祖母とのドタバタ劇、モデルやガールズバーの仕事の裏話、女友だちとの弾丸旅行記などを書いた“面白人間集”。ジェーン・スーとの対談も収録。KADOKAWA ¥1,650

伊藤はエッセイというジャンルについて、どんな魅力を感じているのだろうか。「事実を元に書かれたエッセイを読んで希望を持つことは、現実逃避にならないと思うんです。私自身、小説や映画でファンタジーの世界を楽しんだ後、現実の世界に戻りたくなくなることもある。でもエッセイは、現実でそんな素敵なことが起こりうるなら、この世界は生きるに値すると思わせてくれる。そういうものを書けたらいいなと思います」

## PICK UP







ロングバージョンは  
WEBで公開中！

# BREA

クリエイションの

Akihito Sakaue

1994年生まれ。2017年、武蔵野美術大学の卒業制作で描いた漫画『死に神』で第71回ちばてつや賞入選。24年『神田ごくろ町職人ばなし』(リイド社)で第28回手塚治虫文化賞「新生賞」受賞。

## 坂上 暁仁

漫画家

写真：後藤武浩 文：藤井亮一  
photograph by Takehiro Goto text by Ryoichi Fujii

# 20

『神田ごくろ町職人ばなし』で桶職人や刀鍛冶といった江戸の職人たちの生業をリアルな筆致で描く坂上暁仁。本作で、新たな才能を示す漫画に贈られる手塚治虫文化賞「新生賞」を受賞した。小学2年生から漫画を描き始め、大学ではビジュアルコミュニケーションを学んだ。周囲がアートディレクターやデザイナーを志す中、卒業制作の主題を

漫画に据え、落語を題材に描いた『死に神』で「ちばてつや賞」に入選。魅力は画力と取材に裏打ちされたりアルさだ。桶職人の話では、木桶をつくりあげる様子を、木目が浮き上がるような緻密な描き込みと、大胆な「カメラワーク」で描く。映画の撮影技術にも関心があり、望遠や広角レンズによる視野も意識する。「その場にいたらどんな映像を撮るか、という観点

で構図を決めています。主人公に女性の職人が多いのは、よくが江戸で職人を撮影するなら、きつとカメラを向けるからです」と坂上。1話十数ページにかける制作は、長ければ半年以上。資料を熟読して再構成したノットをつくり、動画などで研究した上で、職人の取材に臨む。

「職人をテーマにした漫画で、完成までにどう

しても時間がかかってしまうのですが、職人たちの生き様を丹念に描き、坂上は江戸の町の姿を浮かび上がらせようと挑む。



入念な取材と圧倒的画力で描く、江戸を生きる職人たちの息づかい

### PICK UP



#### 「大工道具」

資料として使うノミなどの大工道具。職人が扱う道具は、物語の中でも重要な役割を担う。ほかにも、大工や建具職人などが読むような書物も紐解き、作画のリアリティを高める。

#### 『神田ごくろ町職人ばなし(一)』

江戸の職人たちの仕事と人間模様を描いた第1巻。桶職人、刀鍛冶、紺屋、畳刺し、左官が登場する。こうした職人たちの姿から、江戸という町と時代を描くことが坂上の目標。





LOUIS VUITTON

## Sophisticated Dog Walker

「DOG LVvers (ドッグ ラバーズ)」をテーマとする、  
ルイ・ヴィトン2025春夏メンズ・プレコレクション。  
犬と人間による共生の姿を、アイコンックに描く。

写真: 工藤佑斗 / スタイリング: 壽村太一  
ヘア: hirokazu endo (ota office) / 編集 & 文: 柳澤 哲

レジンボールがあしらわれたリボンに犬が戯れるモチーフの胸パッチ、また背面にも大きな紋章風パッチが鎮座するスーベニアジャケット。デニムにフロック加工を施し、ベルベット調に仕上げた質感も魅力。ブルゾン ¥715,000、シューズ ¥284,900、パンツ、Tシャツ(ともに参考商品)、ドッグバンドナ ¥40,700、リード(参考商品) / すべてルイ・ヴィトン(ルイ・ヴィトン クライアントサービス)





オーガニックコットンによるシャンブレー生地のパジャマシャツを、共地のパンツにタックインして。ちりばめられた「LV ブラゾン・モチーフ」が、ドレスシャツやアクセサリーとともに華やきをもたらしてくれる。シャツ¥436,700、中に着た白のシャツ¥177,100、パンツ¥397,100、ネックレス、ブレスレット(ともに参考商品) / すべてルイ・ヴィトン(ルイ・ヴィトンクライアントサービス)



ウォッシュの効いたデニムの上下にひと際映えるのが、鮮やかなイエローのモノグラム・ヘリテージ キャンバスで仕立てた「サックブラ 24H」。犬の肉球をかたどったチャームがなんとも愛くるしい。ジャケット ¥337,700、パンツ ¥218,900、シューズ ¥215,600、バッグ ¥572,000、ドッグバンダナ ¥40,700、リード(参考商品) / すべてルイ・ヴィトン(ルイ・ヴィトン クライアントサービス)







愛犬を連れた英国紳士から着想を得たハリントンジャケット。品よく落ち着いた印象の千鳥格子にモノグラム・パターンをちりばめたウール生地は、伝統的なグレンチェックを再解釈したもの。ポケットが便利な「キーホル・バンドリエール 25」をかたわらに。ブルゾン ¥654,500、セーター（参考商品）、パンツ ¥218,900、バッグ ¥542,300 / すべてルイ・ヴィトン（ルイ・ヴィトン クライアントサービス）





英国貴族の宮廷絵画からインスピレーションを受けたというスーペリアジャケットは、前面と背面に愛らしい犬たちのポートレートが描かれた、まさしく「ドッグラバーズ」を体現した逸品。なめらかなシルク生地を贅沢に用いた一着を、モノグラム・ジャカードによるデニムパンツに合わせて。ブルゾン¥715,000、パンツ¥377,300／ともにルイ・ヴィトン(ルイ・ヴィトンクライアントサービス)





ウール生地ボディに、やわらかなラム  
レザーのパッド入りスリーブを組み合わ  
せたブルゾン。犬のシルエットとLV シグ  
ネチャーを組み込んだ「LV ドッグ ハウン  
ドトゥース ジャカード」が、近づくほど遊  
び心表現してくれる。ブルゾン ¥  
775,500、パンツ ¥196,900、シューズ ¥  
195,800、ドッグバンダナ ¥40,700、リー  
ド(参考商品)／すべてルイ・ヴィトン(ル  
イ・ヴィトン クライアントサービス)

●ルイ・ヴィトン クライアントサービス  
☎ 0120-00-1854





1871年にカプシーヌ通りから移転したスクリーブ通り店。ルイ・ヴィトンの旅行用トランクを専門に扱った。

© ARCHIVES LOUIS VUITTON



1888年頃、アニエール工房の中庭にて。馬車に満載したトランクを背に、ルイと息子や孫など創業家3世代と職人たち。

17年の修業の後、ルイはパリのカプシーヌ通りに世界初の旅行靴専門店を開店した。彼が製作したトランクは、当時流行していた「クリフリン」と呼ばれる大きく広がつたスカートを収納するために必要な、軽量で頑丈な箱として評判

に。ナポレオン3世皇后ウジェニ―も、彼の仕事を信頼した。ルイ・ヴィトンには創意の才があった。トランクの蓋を従来の丸型ではなく積み重ねられるフラットな形状にし、多くの荷物の運搬を容易にした。その後もデザインや機能を常に改良し、軽量で耐久性に優れたトランクをつくるための革新的な技術を次々に開発した。当時、豪華客船での旅行需要に応じた「ワイドローブ・トランク」は、衣類をそのまま収納できる画期的なアイテムとして、一等船客を象徴するアイテムともなった。旅の移動手段が馬車や船、鉄道そして自動車へと広がっていく中で、ルイ・ヴィトンはいずれにおいても高度に対応した。なかでも特筆すべきが熱気球旅行用の「マル・アエロ」だ。軽量で耐久性が高く、防水性、気密性も備えたトランクは、水上に落下しても気球のバスケットを浮かせるほど。ルイ・ヴィトンの旅する逸品は、飛行機誕生の以前から、空の冒険旅行に同行したのである。

© ARCHIVES LOUIS VUITTON



1910年の広告。熱気球に取り付ける“不沈”トランクは、海上に落水してもバスケットを浮かせる気密性をアピール。

# 熱気球旅行への憧れをかたちにした、ルイ・ヴィトンのタイム・オブジェ

ルイ・ヴィトンからユニークな時計が発表された。

職人の手仕事とメゾンの美意識を込めたその造形は、創業の原点にあるトランクづくりの逸話につながっている。

文：並木浩一 text by Koichi Namiki

ルイ・ヴィトンのルーツは、19世紀のフランスに生まれた同名の創業者に遡る。彼が生み出したトランクは、旅することそのものにも影響を及ぼした。旅の道具づくりを超えて、旅のためのブランドに。ルイ・ヴィトンの成功は、手仕事の傑作それ自体がスタイルに昇華した、無二の物語である。

1821年、フランス・ジュラ地方の山間部アンシエ村で生まれた創業者ルイ・ヴィトンは、14歳で家族を離れてパリを目指す。2年間に及ぶ徒歩の旅の末に400km離れたパリにたどり着き、少年ルイは仕事に就く。木箱をつくり、自ら荷造りまで行う職人への弟子入りだった。見習いから始まるその経験が、後の革新的なトランクづくりの基盤となる。

ルイ・ヴィトンには創意の才があった。トランクの蓋を従来の丸型ではなく積み重ねられるフラットな形状にし、多くの荷物の運搬を容易にした。その後もデザインや機能を常に改良し、軽量で耐久性に優れたトランクをつくるための革新的な技術を次々に開発した。当時、豪華客船での旅行需要に応じた「ワイドローブ・トランク」は、衣類をそのまま収納できる画期的なアイテムとして、一等船客を象徴するアイテムともなった。旅の移動手段が馬車や船、鉄道そして自動車へと広がっていく中で、ルイ・ヴィトンはいずれにおいても高度に対応した。なかでも特筆すべきが熱気球旅行用の「マル・アエロ」だ。軽量で耐久性が高く、防水性、気密性も備えたトランクは、水上に落下しても気球のバスケットを浮かせるほど。ルイ・ヴィトンの旅する逸品は、飛行機誕生の以前から、空の冒険旅行に同行したのである。





「モンゴルフィエール アエロ モノグラム」。手巻き、高さ34cm、時・分表示、パワーリザーブ8日間、真鍮＆ガラス(熱気球)、真鍮＆モノグラム・キャンバス＆ウッド(トランク)、数量限定品。¥9,856,000/ルイ・ヴィトン クライアントサービス

© Ulysse Frechelin



# WHAT IS AVAXHOME?



# AVAXHOME-

the biggest Internet portal,  
providing you various content:  
brand new books, trending movies,  
fresh magazines, hot games,  
recent software, latest music releases.

Unlimited satisfaction one low price

Cheap constant access to piping hot media

Protect your downloadings from Big brother

Safer, than torrent-trackers

18 years of seamless operation and our users' satisfaction

All languages

Brand new content

One site



# AVXLIVE:ICU

AvaxHome - Your End Place

We have everything for all of your needs. Just open <https://avxlive.icu>





**職人技を駆使した  
小さなトランクと、  
手巻き式の機構が融合**

熱気球のバルーン部分に相当する箇所では透明とレッドのガラスを真鍮製の枠に嵌め、透かし細工の球形をかたどったものだ。その中心には、軽く押すと軸に沿って回転するモノグラム・フラワーを置いた。時刻を表示するのは、水平方向に回転する時・分のリング状バンド。現在時刻をモノグラム・フラワーが指し示す方式は、ルイ・ヴィトンならではの趣向だ。その下のぞくのが機械式時計ムーブメントの輪列と脱逃機。心臓部分であるバランスホイールの神秘的な動きも、すべて露わにした。優美な造形のオブジェがのぞかせるメカニカルな理性は、お互いの魅力を引き立て合う。

圧巻なのは熱気球の搭乗部分のバスケットを模した、モノグラム柄のミニチュアトランクである。特注の旅行用トランク製作を得意とするアニエールのアトリエで、特別にハンドメイドされたものだ。全体の構造は通常サイズのトランクと同じくウッドで製作して

トランクの外装を飾るモノグラム・キャンバスもすべて、手作業でいてねいに仕上げられている。さらにコーナーの金具やビス（鉋）はすべてミニチュアサイズで製作し、職人の手で留めたものだ。さらにはサイドを補強するロジンにエンボス加工で施したルイ・ヴィトンの小さなシグネチャの連続まで、精緻なディテールにメゾンのノウハウと歴史的なコードをすべて極小サイズで実行した。機能的でありながら美しいルイ・ヴィトンのトランクの伝統が、見事に反照しているのである。

特別なクロックには、設置方法が2通りある。ひとつはデスクや棚に静かに置くことだが、もうひとつは熱気球の正しい居場所と同じ様に、天井から吊るして空中に浮かぶ姿勢のインスタレーションだ。ルイ・ヴィトンがつくり上げたのは、時を超えて受け継がれる空の旅への憧れの、どこまでも芸術的な表現なのである。





右：熱気球の形をただ再現するのではなく、真鍮と2種のガラスによってダイナミックな立体構成を試み、モノグラム・モチーフを巧みに融合させた。 下：ムーブメントは収めるのではなく、機械が描く“用の美”を積極的に見せる趣向だ。

●ルイ・ヴィトン クライアントサービス  
■ 0120-001854



© Piotr Stoklosa



© Piotr Stoklosa



Chrome Hearts

# 上質さを身に纏う 喜びを教えてくれる日常着

冬の訪れとともに欲しくなるのが、自宅とワンマイル圏内で活躍する  
コージーなニットウェア。上質なカシミアが一着あれば、他にはなにもいらない。

photographs by Ayumu Yoshida edit & text by Shingo Sano

高級カシミアニットを、  
あえて部屋着で使う贅沢

エアリーな着心地がリラックス感を誘う、ざっくりと編み上げたオーバーサイズのカシミアニット。両袖口にクロスモチーフのレザーパッチが施された、シングルながらもアクセントの利いたデザインが特徴。背中のリブ中央部分にも、シルバーのスクロールラベルとクロスモチーフのレザーパッチが付属。目覚めた時に素肌で着る、贅沢な日常着として使うのもお勧めだ。¥673,200/クロムハーツ(クロムハーツ トーキョー)



普遍的なスタンダードを、  
上質にアップグレード

ふんわりと肌を包み込むような手触りが魅力のフーテッドパーカは、通常コットンでつくられる日常着を、最上級のカシミアニットでアップグレードしたオルタナティブなスタンダード。左胸に施されたダガーモチーフが、ブランドの美意識をさりげなく主張する。自宅やワンマイルに限らず、リゾートで過ごす旅先の、快適なルームウェアとしても活躍してくれるだろう。¥676,500／クロムハーツ(クロムハーツ トーキョー)







LEXUS

# 豊かな時間が流れる、 BEVとの“暮らし”

今泉 悠

Yu Imaizumi

アイウエアデザイナー

1983年、茨城県生まれ。福井県鯖江でメガネづくりを学び、2010年アイウエアブランドayameを設立。“温故知新”を掲げ、長く愛されるアイウエアを目指す。自社ブランドの他にも、国内外でデザインやディレクションを担当。

自動車の電動化は、単にクルマの乗り方が変わるだけではない。

レクサスは、それに伴い生まれるライフスタイルに新たな価値を見出している。

今回そんな“BEVライフ”の魅力を、人気アイウエアデザイナーの今泉悠が体験した。

photographs by Yoshiaki Tsutsui edit & text by Castro Toshiki (c3ec-creations)

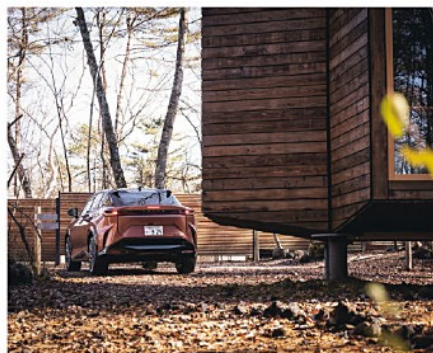


ガソリンなどの化石燃料を使わず走行できる、電気自動車（BEV）。急速に普及が進んでいるとはいえ、充電や航続距離の問題など、まだまだ不安に思うドライバーも多い。レクサスは、そうしたユーザーにも向き合い、安心してBEVを楽しんでもらうため、BEVに特化したスタッフ「BEVコンシェルジュ」の育成や充電器無償提供など、サポート体制に力を入れている。また、BEVと過ごす時間をより豊かにしてもらおうべく、オーナーに向けた体験サービスも展開。レクサスは、そうした2軸からなるプログラムを「LEXUS Electrified Program」と称し、BEVにおける豊かなライフスタイルを提案している。

## そんな、BEVライフを、人気アイウェアブランドのデザイナー・今泉悠が体験。BEV「RZ」を駆って、軽井沢まで出かけた。

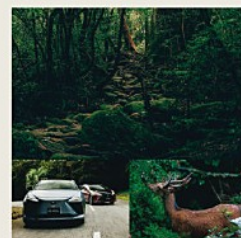
「素直に面白いですね、RZは。乗った感じはやっぱり快適で、加速も滑らか。とても気に入りました」今泉は、RZに乗った印象をそう語る。自身ではSUVとスポーツカーを所有するが、BEVに乗る機会はこれまでなかったという。軽井沢まで約150km。今回

「SANU 2nd Home 北軽井沢2nd」を訪れた今泉さん。14棟の部屋で構成され、サウナ付きキャビンや、愛犬と泊まれるキャビン、レクサス普通充電器付きのキャビンがある。豊かな自然に囲まれ、静寂に包まれた環境に浸れる。



普段から、ひとりでクルマに乗ってリフレッシュに出かけるという今泉さん。息抜きだけでなく、デザインのアイデアを練ったり、事業計画について考えたりできる大切な時間だという。

## レクサスが提案する、特別な体験プラン



レクサスでは、BEVオーナーに向けたさまざまな特別な体験プランを提供している。今回紹介したSANU以外にも、LEXUSとともに旅をして、その土地でしか味わえない景色や食事を楽しむ旅「TOUCH JAPAN JOURNEY」の優待や、ミシュラン星付きレストランを楽しむ「LEXUS DINING JOURNEY」など、ライフスタイルを豊かにするサービスが用意されている。

のRZ450eの航続距離は494km（WLTCモード）なので、途中に充電することなく十分にドライブできる。

「東京からクルマで2時間半という、ひとりで考えることをするには、ちょうどいいかなって。この車内もパーソナルな時間を過ごせますね。静かなので、考え事をするのにもいい」

今泉がまず訪れたのは、会員制のシェア別荘サービス「SANU 2nd Home」。都市から自然へ、BEVでのドライブの楽しさや自然の中の心地よい暮らしをオーナーに体験してもらおうべく、1滞在最大2泊まで無料で宿泊できる「2nd Home EXPERIENCE by SANU」をレクサスは提供している。

「以前からSANUの会員になることを考えていたので、うれしいです。こんな素敵な別荘にふらりと来られるのはいいですね。地方をまわる出張も多く、ノマドワークのような生活をしているので、こんなところで仕事ができたら最高だと思います」

北軽井沢にひろがる森にあるSANUは家族での利用はもちろん、リモートワークが普及した現在、ひとりで訪れる会員も多い。

「自由気ままにサウナに入った、夜は焚き火をしながらお酒も飲む。そんな贅沢な時間を過ごせそうです」



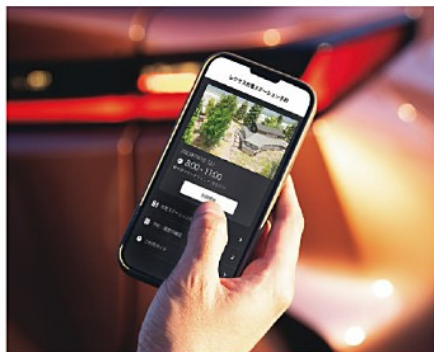


カーボンニュートラル社会の実現を目指しているレクサスと、自然と共生する理念を掲げるSACUは、サステイナブルという点でも共鳴している。

「僕らは、チタンなどのメタルパーツの廃材を使って製品をつくる事業を立ち上げているのですが、まだまだ乗り越えなければいけないハードルや障害が多くあります。このようなサステイナブルな取り組みは、僕らのような企業にとっても大変重要な課題だと思っています。その意味でこの小旅行は、移動でも宿泊でも環境負荷が少ないので、すごく気持ちがいいですね」

「LEXUS Electrified Program」こそ、このSACUと提携したサービス以外にも、さまざまな価値体験が用意されている。

「LEXUS ELECTRIFIED JOURNEY」と名付けられたプログラムでは、充電施設のある宿が用意され、その地ならではの体験プラン、たとえば「信州・松本の旅」であれば、木曾漆塗り体験や奈良井宿散策、乗鞍高原での季節に合わせたネイチャーアクティビティなどが楽しめる。宿・食・体験に、レクサスならではのドライブをかけたあわせたプランのほか、国内外のラグジュアリーホテルで特典を受けられるサービス「LEXUS LUXURY HOTEL COLLECTION」など



右:軽井沢のコモンクラウンズには、書店やカフェ、飲食店、コワーキングスペースなどの施設が充実。LEXUS Electrified Programの特典として、Nychairを使用できる。 左:専用アプリ「My LEXUS」で充電器の空き状況確認や予約などが可能。

## 多彩なサービスで、 充電中でも快適に



約4000店舗以上のレクサス・トヨタ販売店に加え、全国約22000口の充電ネットワークなど、充実の充電設備。拡大中の150kWの急速充電が可能なレクサス充電ステーションでは、My LEXUSのアプリを通じて予約・利用ができるほか、充電中でも快適に過ごせるサービスが充実。コワーキングスペースの無料利用など、優待特典が用意されている。



コモンクラウンズにある、150kW急速充電が可能な充電ステーション。充電中は書店やカフェ、飲食店などで過ごせる。軽井沢のほか、東京ミッドタウン日比谷、グラングリーン大阪にも同様の施設がある。

多彩にラインアップしており、オーナーになることで楽しめる体験サービスは、実に豊富だ。

今泉がSACUの後に向かったのは、軽井沢の複合施設、軽井沢コモンクラウンズだ。施設内に設置されたレクサス充電ステーションで、充電を体験してもらった。

待ち時間をむしろ楽しむ、  
新しい充電スタイル

「専用アプリ『My LEXUS』で予約をすることができるとですね。先客が充電していてすぐに充電ができないとか、そういう余計な待ち時間を省けるのはありがたい」レクサス充電ステーションは、一般的な50kWの急速充電よりも所要時間が短く、今回乗車したRZの場合は、約30分で約80%まで充電が可能となる。

「書店に加え、もともと大好きなSPOZCAFEもある。充電中の待ち時間すら、感性を刺激するような豊かな時間にできそうですね」敷地内には、レクサス充電ステーション利用者なら無料で使えるコワーキングスペースもある。

こうしたレクサス充電ステーションは、軽井沢以外では、東京ミッドタウン日比谷やグラングリーン大阪にも設置。2030年までに全国100箇所を目標として、拡充を図っているところだ。



「充電中にコーヒーを飲んだりして時間を潰すのではなく、コーヒーを飲みに行くついでに充電もする」といったように、これからは目的が逆転していくかもしれませんね。加えて、充電速度が速くなっているのも驚きでした」

今泉はストレスなくBEVに乗れる環境が、着実に実現へ向かっていることを実感したようだ。

## 運転だけではない、 レクサスBEVに乗る魅力

「1980年代に世界で初めてタンフレーム採用の眼鏡を誕生させたのは、実は日本人です。マイク口溶接というきめ細やかな職人技術が必要不可欠で、眼鏡のデザイナー視点で見ると、レクサスRZにもそういった日本人ならではの繊細な技術や気配りが感じられます。センターディスプレイがドライバー側を向いているところなど、全体としてもディテールとしても、ユーザビリティとデザインのバランスがすごく考え抜かれているなと思いました」

レクサスBEVで軽井沢まで出かけた感想を、今泉は振り返る。「もしこの先オーナーになったら、色々なコンテンツやサービスを楽しめるのもいいですね。クルマによってライフスタイルが豊かになるというのはいままであまり



右: BEVコンシェルジュであるレクサス用賀の星野剛志さん。技術的なアドバイスや、ライフスタイルに適した乗り方など、さまざまな角度からサポートしてくれる。 左: 購入から日々のメンテナンスまで、ラグジュアリーな空間で相談できる。

## 全国の販売店で活躍！ 「BEVコンシェルジュ」



ガソリン車とは異なるBEVに不安を感じるオーナーも少なくないが、全国のレクサス販売店には、BEVに特化したスタッフ「BEVコンシェルジュ」が在籍し、サポート体制も万全だ。運転や操作方法はもちろん、自分の乗り方に合う最適な充電方法や、自宅やオフィスの充電器設置の相談など、オーナーのライフスタイルに適した提案やアドバイスも受けられる。



## LEXUS RZ

レクサス初のBEV専用モデルとして、2022年に登場。RZ450eとRZ300eの2モデルをラインアップ。高出力モーター「eAxle」が走行状況に応じて四輪の駆動を制御することで快適でスムーズな走り心地を実現している。

考えたことがなかったなので、本当に面白いと思います」

レクサスは、BEVライフをより豊かにするため、クルマの技術開発と両輪で、サービス面での充実も急ピッチで進めている。実際、23年にはそうしたサービス面を専門とする部署が新設され、ここで紹介してきたような新しい取り組みが次々と生み出されている。

一方、販売面では、購入検討時から利用中の不安に寄り添うため、全国188のレクサス店舗でBEVの専門知識をもつ「BEVコンシェルジュ」が在籍している点も見逃せない。

補助金の申請はもちろん、それぞれのライフに合わせた使用方法を提案。時にはBEVがライフスタイルに合わないというユーザーに、プラグインハイブリッドやハイブリッドを提案することもある。さらに、今後BEVの買い換え時には、販売店が責任を持ってバッテリーを回収し3R（リビルト、リユース、リサイクル）ができる体制を整え、ユーザーのサステイナブルな思いを最初から最後までサポートできるよう、バックアップを行っている。

レクサスのBEVオーナーになるということは、ライフスタイルにおいて、新たな価値に出会い、変化をもたらす、確かな可能性を秘めているのだ。





© LOUIS VUITTON MALLETT

表彰式ではLVMH(ルイ・ヴィトン・モエ・ヘネシー)会長兼CEOのベルナルド・アルノーとルイ・ヴィトン会長兼CEOビエトロ・ベッカーリからトロフィーが渡された。

# 最高峰のヨットレースを支える、ルイ・ヴィトンの革新的なヴィジョン

バルセロナで開催された、世界最高峰のヨットレース「アメリカズカップ」。  
チーム・エミレーツ・ニュージーランドが連覇を果たした栄光の舞台を振り返ろう。

文:並木浩一 text by Koichi Namiki

2024年10月19日、スペイン・バルセロナで開催された「ルイ・ヴィトン 第37回アメリカズカップ」は、エミレーツ・チーム・ニュージーランドの3連覇で幕を閉じた。至高の銀杯の異名を持つ伝説的な優勝トロフィー「オールド・マグ」は、ルイ・ヴィトン特製のトランクに収められ、勝者の手に渡された。

アメリカズカップは、1851年に始まる世界最高峰のヨット・マッチレース大会である。その長い歴史の中で栄冠を獲得できたのはアメリカ、オーストラリア、ニュージーランド、スイスの4カ国のチームだけだ。名門ニューヨーク・ヨット・クラブは1983年にオーストラリアのチームに敗北するまで、132年間もカップを保持していた。カップの奪取は世界のトップセイラーの願いであるが、きわめてまれなことである。

今大会にはデیفエンディング・チャンピオンであるニュージーランドに対して「イネオス・ブリタニア」「アリンギ・レッドブル・レーシング」「ルナ・ロッサブラダピレリ」「NYCアメリカン・マジック」「オリエント・エクスプレス・レーシング」の

5チームが、挑戦者を決定する「ルイ・ヴィトンカップ」を争った。8月から10月にかけて、バルセロナのボート・ヴェルとポート・オリンピック周辺で行われたレガッタには、セーリング界のトップ選手たちが集結し、海上で激しい争いを繰り広げた。

大会終了後、ルイ・ヴィトンの会長兼CEOビエトロ・ベッカーリは、エミレーツ・チーム・ニュージーランドの史上初の3連覇を称賛した。また挑戦艇であるイネオス・ブリタニアのチームにも敬意を表し努力と成長をたたえた。ルイ・ヴィトンカップを勝ち抜いたイネオス・ブリタニアもまた、世界唯一の存在なのである。

バルセロナの美しい海を舞台にしたレースは、世界中のセイリングファンを魅了し、アメリカズカップの存在感を再確認させた。そして今回の大会を、世界が待ちわびる。その至高のレースに冠されているのが「ルイ・ヴィトン」の名だ。ルイ・ヴィトンの創業は1854年、アメリカズカップ誕生のわずか3年後である。100年を超えて両者は最も有名なメゾンとヨットレースとなり、しかもその歴史は魅力的に交錯した。





第37回アメリカスカップ、10月14日のマッチ。艇体が水から浮き上がった高速フォイリング状態で競り合うチーム・エミレーツ・ニュージーランド(手前)とイネオス・ブリタニア。



2024年のルイ・ヴィトン カップは熾烈な戦いが続いた。マークを回航するイタリアの「ルナ・ロッサ ブラダ・ビレリ」(右)と英国艇「イネオス・ブリタニア」のマッチ。



© LOUIS VUITTON MALLETIER

photo: Gilles Martin Raget



レース直前のイタリア艇「ルナ・ロッサ ブラダ・ビレリ」。ルイ・ヴィトンのロゴが入ったメインセイル・アップに備えるクルー。

## 英国艇がルイ・ヴィトン カップの頂点に

photo: Gilles Martin Raget



フランス艇「オリेंट・エクスプレス」(右)をかわして前に出るスイスの「アリンギ・レッドブル・レーシング」。高速レースならではのダイナミックな航跡。

「ルイ・ヴィトン」は、1983年にはじめてアメリカズカップとのパートナーシップを結んだ。アメリカズカップの挑戦艇を決めるレースを主催し、独自のトロフィーを授与することを申し出たことから、このパートナーシップは「ルイ・ヴィトンカップ」は、世界のトップセイラーの目標として、胸に刻まれた名前となった。地上のラグジュアリー・メゾンの代名詞は、海上でヨットマンの闘志を起動する魔法の言葉となったのである。

「ルイ・ヴィトン」第37回アメリカズカップ」本戦への挑戦艇決定シリーズが「ルイ・ヴィトンカップ」だ。2024年8月29日からスペイン・バルセロナでスタートした同レースに挑んだ5つの強豪チームは、1対1で2回ずつ対戦するダブル・ラウンドロビン方式のマッチレースを戦い、その後5勝先取の準決勝、7勝先取の決勝を経て、最終的に英国のイネオス・ブリタニアが挑戦権を獲得した。英国艇はアメリカズカップ奪取はならなかったものの、挑戦者として獲得したルイ・ヴィトンカップは、忘れられることのない記録であり、記憶である。



右：ルイ・ヴィトン カップを勝ち抜き、挑戦艇に決定した英国艇「イネオス・ブリタニア」。そもそもヴィクトリア女王が下賜したアメリカズカップの奪還は英国の悲願だった。下：ルイ・ヴィトン カップの優勝トロフィーを獲得し、勝利を噛み締める「イネオス・ブリタニア」チーム。



© LOUIS VUITTON MALLETIR

© LOUIS VUITTON MALLETIR



そしてルイ・ヴィトンは、アメリカズカップに絶対的なレガシーを残した。アメリカズカップとルイ・ヴィトンカップ、それぞれのトロフィー・トランクの製作である。洗練された職人技を発揮し、アメリカズカップにふさわしいデザインを追求したトロフィー・トランクは、優勝チームに贈られる特別な賞品であり、その製作にはルイ・ヴィトンの伝統的なサヴォアアフエール（匠の技）が色濃く表れている。このトロフィー・トランクは、フランス・パリ郊外のアニエールにあるルイ・ヴィトンの歴史的アトリエで製作され、アメリカズカップの美的コードからインスピレーションを得たデザインが施されたものだ。トランクの扉には勝利の頭文字「V」が描かれ、ルイ・ヴィトンらしいエレガンスと力強さを表現している。

2024年で37回目を迎えるアメリカズカップで、ルイ・ヴィトンはタイトルパートナーとして大会に参加した。そのパートナーシップは、単なるスポンサーシップにとどまることなく、両者が共有する価値観である自己超越、卓越性、そして革新へのコミットメントを象徴しているのだ。





ルイ・ヴィトンがはじめて挑戦艇シリーズをサポートした1983年大会のポスター。  
次の挑戦艇シリーズから正式に「ルイ・ヴィトン カップ」の呼称が定められた。

アメリカズカップの歴史は、1851年にロンドン万国博覧会の記念行事として実施されたレースに始まっている。ヴィクトリア女王から銀の優勝杯を下賜されたレースには、米国から参加したアメリカ号が優勝。アメリカ号のカップ、すなわちアメリカズ・カップはその後ニューヨーク・ヨットクラブが、あらゆる挑戦者と戦いながら1世紀以上保持し続けたのである。長い歴史の中でそのレースは、選手や関わる人々にとって人生をかけた挑戦となり、舞台に立つこと自体が名誉となった。

アメリカズカップで最も注目すべき点は、その大会形式にある。アメリカズカップは「防衛艇」と「挑戦艇」が戦うマッチレース。前回の優勝者が防衛艇として出場し、挑戦者決定戦を勝ち抜いたチームがその防衛艇に挑む仕組みだ。しかも国対国の対決ではなく、ヨットクラブ同士の闘いであり、ひとつの国から複数のチームが参加することも可能である。

かつてアメリカズカップには数多くの名だたる大富豪が挑戦してきた。代表的な例としていまも語られるのは紅茶王として知られるサー・トーマス・リプトンや、米国CNNの創業者であるテッド・

## アメリカズカップの 長い歴史に秘めた、 知られざる物語

© LOUIS VUITTON MALLEIR



2003年に優勝したスイス艇「チーム・アリンギ」(左)。アメリカズカップ史上はじめてヨーロッパ大陸にカップ(優勝杯)をもたらした。

© LOUIS VUITTON MALLEIR



2017年の第35回アメリカズカップでは挑戦艇「エミレーツ・チーム・ニュージーランド」(上)が、防衛艇「オラクル・チームUSA」に勝利した。





© LOUIS VUITTON MALLETIER/DANIEL MOLINA

© LOUIS VUITTON MALLETIER/DANIEL MOLINA



右:ルイ・ヴィトン カップの勝者に贈られるトロフィーとトランク。ルイ・ヴィトンはモノグラム柄のトランクを製作。 左:アメリカスカップのトロフィーとトランク。トランクはともにパリ近郊アニエールのメゾンの伝統的なサヴォアフェール(匠の技)で生み出される。

●ルイ・ヴィトン クライアントサービス  
☎0120-001854

ターナーだ。リプトン卿は巨額の私財を投じて何度も挑戦を試みたが、結局一度もカップを手にすることはなかった。一方ターナーはスキッパー(艇長)として勝利を収めたが、見合うような経済的利益を得てはいない。ビジネスの成功は時にスノッブだが、その果実を惜しげもなくスポーツに注ぎ込む行為は、賞賛に値する。「無償の酔狂」に見えるものがスポーツの文化を推進してきた。

いまアメリカスカップに関わるブランドにも、同様の精神が根付いている。彼らは既にエスタブリッシュな存在であり、これ以上知名度を上げる必要はない。それでも、スポーツと文化への無償の投資の精神を体现するのである。アメリカスカップへの関与は広告や宣伝を目的とせず、自らの価値観を確認するためだ。



## メゾンが結ぶ、スポーツ界との固い絆とパートナーシップ

アメリカスカップだけでなく、ルイ・ヴィトンはさまざまなスポーツ競技とパートナーシップを結んでいる。ラグビーW杯やテニスの全豪オープンなどなど。2024年パリ五輪のトーチ・トランクとメダル・トランクもメゾンが手掛けたものだ。

© LOUIS VUITTON MALLETIER



サッカーの世界年間最優秀選手に贈られるバロンドール。2024年の男子部門はマンチェスター・シティ所属のスペイン代表のロドリが獲得。

© LOUIS VUITTON MALLETIER



フォーミュラ1 モナコグランプリの勝者に贈るトロフィー・トランク。勝利の「V」が施されたモノグラム・キャンバスのトランクだ。



NAGATO YUMOTO ONSEN

# 名窯の世代が見据える、 深川萩の未来

360年を超える歴史を誇る、山口県の深川萩。  
日本の茶の湯文化を支えてきた窯元を襲名したばかりの、  
十六代坂倉新兵衛のもとを訪ねた。

photographs by Keishi Asayama text by Hisashi Ikai

楽焼や唐津焼とともに、日本有数の茶陶として知られる萩焼。なかでも、山口県長門市深川三ノ瀬地区では、この自然豊かな山間の登り窯でつくられるものは「深川萩」と呼ばれ、多くのファンを惹きつける。そんな深川萩の名窯のひとつ、坂倉新兵衛窯が2024年に代替わりを発表。1983年生まれの若き当主の誕生に注目が

集まっている。

「ここで生まれ、幼い頃から焼き物に親しんでいたので、大人になるまでは自分の置かれている環境がいかに特別で貴重なものかをきちんと認識できずにいました」  
穏やかで朴訥とした表情の中に上品さを湛える深川萩。焼き締まりの少ないざっくりとした土っぽさが魅力だ。どのように作陶

## 十六代坂倉新兵衛

Sakakura Shinbe 16th

陶芸家

1983年、山口県生まれ。東京藝術大学、大学院で彫刻を専攻。京都市伝統産業技術者研修で陶芸を学ぶ。2011年より父、十五代坂倉新兵衛のもとで作陶。24年5月に十六代坂倉新兵衛を襲名した。





上：坂倉新兵衛窯の登り窯。焼成時には、油分をたっぷり含んだ地元産のアカマツを使い、窯の内部温度を一気に1200度まで上げる。これにより、萩焼特有の窯変や灰かぶりの表情を引き出していく。 下：長門湯本温泉から車で10分ほど山道を登った先にある深川萩の里、三ノ瀬地区。小川と山の斜面に挟まれた細い土地に、坂倉新兵衛窯をはじめ現在5つの窯元が存在する。

すれば土が持つ本質的な魅力を伝えられるか、悩んだ時期もあった。「試しに山に分け入り、自分で掘り出した土と、曾祖父が残した萩焼の原土とを混ぜ合わせて焼いてみたら、とてもいい土の表情ができました。時折立ち止まり俯瞰して見て、いまあるものも活かすことで、新しい景色が見えるのだと気付きました」

ふと辺りを見渡すと、地元の長門湯本温泉にも変革が訪れていた。バブル後は閑散としていたが、2016年には官民一体で、長門湯本の再生計画が始動。日本各地から才能が集まり、8年経って街は魅力的に変化を遂げた。いまその流れの中心に、十六代坂倉新兵衛をはじめ、若い世代もいる。

窯元が現代に残るのは、歴代の当主の努力のみならず、同じ土地

に生きる人々が深川萩を愛し、大切に守ってくれた背景がある。

「襲名を機に大勢から注目していただけるようになりました。受けた恩に報いるために、坂倉新兵衛として、地域のためにできることは積極的にやりたいです」

スポークスパーンソンとして街に貢献するには、真摯に創造にいきしめ、茶陶の道を極め、もっと名を上げなければならない。

「土と向き合うほどに感覚は鋭くなり、意識は広がっていく。自身の創意と伝統的なスタイルとの間でもがくことも多々ありますが、この地の風土の中でこそできることを体現していきたいです」

厳しい壁ながら、それが自分の生きる道であり、豊かで尊いもの。そう信じて今日もまた、土を捏ね、ろくろを回す。



3



2



4



1

#### 坂倉新兵衛窯

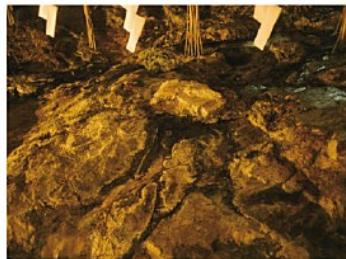
●山口県長門市深川湯本三ノ瀬1487 ☎0837-25-3626

Instagram@masahiro.s.h

※作品は長門湯本温泉のcafe & pottery音や大谷山荘、別邸音信などで購入できる。訪問希望時は事前連絡が必要。

1. 窯の裏手にある山の中に分け入り、自分で採取した土と萩の土を混ぜながら作陶した花瓶。古代の土器のような表情を醸し出している。十六代を襲名する前に、坂倉正統の名義でつくった作品(2〜4も同様)。当時は萩焼の風合いを感じさせながらも、より自分らしい独創的な表現にトライしていた。 2. 素材と技法は伝統の萩焼にのっとった上で、表面に細かな凹凸を施し、豊かな質感を表したオブジェ。 3. 山の中で岩に土の塊を投げつけて成形。自然の岩肌に刻まれたテクスチャーをそのまま写した茶器。 4. 黒土の上に白土を重ねて化粧掛け。斜めに走るラインが新鮮な夏向きの茶碗だ。さまざまなものをつくってきたが、襲名後しばらくは「茶碗を中心に、より深川萩の真髄を目指していきたい」と語る。





#### 恩湯 (おんとう)

1427年にまで歴史を遡ると伝えられる長門湯本温泉の元湯として、観光客だけでなく、地元民からも愛される立ち寄り湯。8㎡の小さな湯船は、毎分130Lで湧き出る39度のぬる湯を余すところなく堪能できるように考えられたもの。建物は建築家であり「温泉家」としても知られる岡昇平が担当している。しめ縄の先にある岩盤からひたひたと流れ出る元湯も神秘的。

●山口県長門市深川湯本2265 ☎0837-25-4100 🕒10時～22時 🔥第3火 💰一般 ¥990  
<https://onto.jp>

## 感性を刺激する、 長門湯本温泉

深川萩の集落から山を下った先にある、約600年の歴史を持つ長門湯本温泉。名所旧跡に加え、新たな観光スポットが近年続々と誕生。十六代坂倉新兵衛がお薦めのスポットを案内する。



「茶陶産地である深川萩と県内最古の長門湯本温泉。ふたつの文化が、長い時間をかけて緩やかに絡み合っている様子を感じてもらえるとうれしい」と新当主は語る。



#### 瓦そば柳屋 長門湯本店

熱した瓦の上に茶そばをのせ、そこに錦糸卵と牛肉、薬味を盛った「瓦そば」は、山口名物のローカルフード。長門湯本の中心部を流れる音信川のほとりに立つ築70年の校舎をリノベーションした複合施設の1階にある同店は、土壁の落ち着きのある店内で出来たての瓦そばを堪能できる。そばがバリバリになった「おこげ」の部分もおいしい。注文を受けてから焼き上げるみたらし団子のテイクアウトもお薦め。

●山口県長門市深川湯本1325-1 だいがく長屋1F ☎080-9185-3070  
 🕒11時～19時 🔥火、第3水  
<https://kawasobasoba.co.jp>



#### 大寧寺 (たいねいじ)

1410年に創建された曹洞宗の寺院。その隆盛から「西の高野」と呼ばれ、室町時代に山口に栄華をもたらした大内義隆公をはじめ、戦国～江戸期の覇者たちの墓石が立ち並ぶ。また恩湯は同寺の所領でもあり、さらに深川萩はもともと大寧寺の土地と薪の供給を受けて創業されている。長門湯本の暮らしと文化に深く関わり支え続ける、なくてはならない存在だ。「歩くだけで気持ちが落ち着く」と坂倉。

●山口県長門市深川湯本1074 ☎0837-25-3469  
[www.taineiji.jp/index.html](http://www.taineiji.jp/index.html)





#### cafe & pottery 音 (おと)

「深川萩をもっと身近に感じてほしい」と、坂倉新兵衛が共同オーナーのひとりとなり、2017年に誕生したカフェ。若手作家の常設展を行うほか、カフェで使用する器にも自身の作品や深川萩を用い、地元のフルーツを使ったケーキやタルトを提供。展示台には倒木した松の老木や廃校になった地元小学校の理科標本ケースを再利用するなど、随所に街の記憶を刻み込んでいる。

●山口県長門市深川湯本1261-12

☎0837-25-4004

🕒10時～16時 🍷水、木

<https://oto-cafe.jp>

#### THE BAR NAGATO

キャリア30年超えのベテランバーテンダーがオープンした本格派のバー。地域のフルーツなどを使ったフルーツカクテルが人気。

●山口県長門市深川湯本1325-1だいご長屋  
2F 🕒18時～24時 🍷月



#### 大谷山荘 別邸音信 (おとずれ)

全18室のプライベート感ある贅沢な宿。開放的なエントランスでは四季折々の自然美を肌で感じることができる。左下は茶室一峰庵。

●山口県長門市深川湯本2208 ☎0837-25-3377 全18室 🍷¥44,300～(1室2名、夕朝食付) <https://otozure.jp>

#### 人気の土産は、はちみつ&ビール

長門湯本に近年登場した新スポットでは、土産としてもお薦めの商品が揃う。右：養蜂から蜜搾り、瓶詰めまで、ていねいな手仕事でつくる「孫農園」のはちみつ(1本¥2,000～)。純粋・非加熱・完熟が基本の長門のスローフードだ。cafe & pottery 音(☎0837-25-4004)で購入可。 左：長門湯本に2021年に誕生したビール醸造所「サンロクロクビール」(Instagram@sanrokuroku\_beer)では、併設のタッブルームでテイクアウト用のオリジナル瓶ビール(¥700～)を各種販売している。



#### ロバの本屋

長門市の山中にあるカフェ併設の本屋。古い牛舎を改装した店内に、店主がセレクトした古本や新刊本、雑貨やクラフトが並ぶ。

●山口県長門市俵山6994 ☎0837-29-0377

🕒11時～17時 🍷水～金

[www.roba-books.com](http://www.roba-books.com)





# 創造の 挑戦者 たち

Creator's Voice

写真:野村佐紀子  
photographs by Sakiko Nomura

服づくりへのひたむきさが、  
世界へ届ける力となる

文: 中 text by Kazushi



#97 浅川喜一郎 ファッションデザイナー





#### Kiichiro Asakawa

1986年、山梨県生まれ。東京学芸大学を卒業後、一般会社勤めを経て東京・原宿のナイチチのショップスタッフに。2016年、自身の店であるキャロルを原宿にオープン。店の運営と並行して自身のブランド、シュタインをスタート。23年、東京で初のファッションショーを開催。24年に「ファッション プライズ オブ トウキョウ 2025」を受賞。

ファッションデザイナーの浅川喜一郎にさまざまな質問を投げかけた後、彼の口から何度も飛び出すふたつの言葉があった。その言葉とは「つくりたい」と「届きたい」だ。彼はいまファッションをつくることに夢中で、その成果を客に届けることに喜びを感じている。そのためにふたつの職を兼任

し日々を過ごしている。ひとつは自身の美意識を表現するブランド「シュタイン」のデザイナー、もうひとつは世界中のエッジなブランドを集めたセレクトショップ「キャロル」のオーナーである。ショップ運営から本格的なキャリアをスタートさせ、ファッションデザイナーにもなった浅川。その

活躍ぶりが日本のモード界で話題になり、2024年に世界進出を狙うデザイナーの登竜門である「ファッション プライズ オブ トウキョウ 2025」を受賞。同賞のサポートを受けて25年1月にパリメンズ・ファッション・ウィークでランウェイショーのデビューを果たす。今回の海外進出への思

いを、彼は次のように語った。

「世界戦略を進めていたタイミン  
グで権威ある賞を受賞できたこと  
を本当にうれしく思っています。  
日本にきたお客様だけでなく、世  
界中の人に自分の服を届けられま  
すから。近年、少し海外で仕事を  
して印象的だったことがふたつあ  
ります。ひとつはドイツでシュタ  
インのポップアップショップを開  
催した時。日本でも時間が許す限  
り店頭に立ち、お客様に商品の魅  
力をお伝えするようにしているの  
ですが、この時も店に立って海外  
の人が着た時のバランスを間近で  
見られ、彼らからの直接のフィード  
バックもたくさん得られたのは  
うれしかったです。もうひとつは、  
パリで2回ほどシュタインのロケ  
撮影を行った時。街の空気が寛容  
に感じられたのです。クリエイテ  
イブな活動を拒絶しない姿勢があ  
りました。自分たちのファッション  
ン感覚が世界中で受け入れられる  
可能性も感じられました」

海外経験では、触って初めてよ  
さを感じる生地といったストイッ  
クな日本的センスが世界で認めら  
れる手応えも得たようだ。

「世界各国のバイヤーがシュタインの生産背景に強い興味を持って  
くれており、『日本の生地か？』『日  
本の縫製か？』と尋ねてきます。  
日本発信であることが取り扱いブ  
ランドのアイデンティティになる  
ようです。シュタインは日本生産









写真：シュタイン

## ファッション プライズ オブ トウキョウ

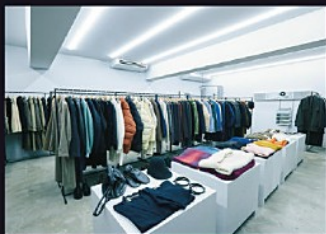
東京都の一般社団法人日本ファッション・ウィーク推進機構が主催し、毎年一組のファッションデザイナーが選ばれた海外ビジネスのサポート制度。シュタインは25年度に選出。過去にはオーラリー、CFCLらが受賞した。



写真：神淵

## シュタイン 24AW コレクション

欧文ブランド表記をsteinからsssteinに変更し、ロゴも刷新して世界戦略に歩みを進めたコレクション。ベースとなる色彩は黒、グレー、カーキ。発表したルックでは女性モデルも着用しているが、服の基本構造はメンズだ。



写真：瀬口祐

## セレクトショップ「キャロル」

2021年に現在の閑静な表参道エリアに移転した、浅川が運営するセレクトショップ。旬の感性漂う国内外からの買付け商品に加え、国内で最もシュタインの品揃えが豊富だ。東京都渋谷区神宮前5-45-3 コスモビル1F

日本のカッコいい  
ものづくりの  
素晴らしさを世界中に  
届けていきたい

が主軸で、これまで日本の機屋さん、縫製工場さんを訪ね歩きまして。ご高齢の方が多く働いていて、プライド高くものづくりをしています。それがめっちゃめっちゃカッコいい。こうした服の感動や生産背景の素晴らしさを、世界にお伝えしたいです」

貪欲に学び続け、  
よりいいものを届ける

パリコレへの切符も手にし、いっそう勢いを増す浅川だが、心の奥底にはクリエイターとしての焦りを抱えているらしい。自身を追い込む焦りが、彼の行動を突き動かしているのだろう。

「子どもの頃からファッションを仕事にすると決めていた人たちと

比べると、一般大学を卒業してセレクトショップ勤めからキャリアを始めた自分では出発が遅れている。最初に服づくりをしたのも、キャロルでお客様のサイズに合わせ、1点もののリメイクデニムを仕立てた時です。このような経歴ですから、世界の偉大なデザイナーやファッション関係者たちの実力に早く追いつきたいのです。もっといいものをつくり、もっと多くの人に届けたい。いまは勉強して勉強して、自身の内側にインプットしてはアウトプットする生活。いつかは仕事に余裕が生まれるかもしれないが、いまは頑張らなくては」

忙しい日常の中でも、デザイナーと店のオーナーとの役割を浅川はしっかりと振り分けている。シュタインのコレクションが充実するキャロルは、あくまでもセレクトショップ。「店が仕入れるブランドのひとつがシュタイン」という位置づけで展開している。

「店のお客様には、自分が新しいファッションに感動する気持ちと一緒に感じていただけたらと願っています。世の中にはいい服がたくさんあります。シュタインをそんな服を集めたこの店に並べるのにふさわしいブランドに成長させていきたいです」

ものづくりに情熱を燃やしながらも、その感情に溺れず冷静に自身を見つめる浅川。日本のモード界が期待を寄せるプレッシャーにも耐えながら。彼の謙虚な人柄は、世界のファッションシープにどのように映るだろうか。





## 縦型ショートドラマの脚本を募集し、優秀作品を映像化



メンター

志村 優

Yu Shimura

ごっこ倶楽部統括プロデューサー。累計再生数30億回を超えるごっこ倶楽部で、縦型ショートドラマの脚本から撮影、編集にまで携る。TikTok Awards Japan 2022の受賞に貢献。

### 縦型ショートドラマ部門

近年、TikTokなどでスマホ視聴に最適化した縦型ショートドラマが人気を集めているのをご存じだろうか。NEXTの「縦型ショートドラマ部門」では、そのトップランナーであるクリエイター集団、ごっこ倶楽部のプロデューサー志村優さんをメンターに迎え、実写化を前提とした脚本を募集。多くの応募作品から、「TikTokでバズるテーマか?」などの視点で5組を選抜し、ワークショップ

を開催した。当日は志村さんから各脚本に対するフィードバックを行い、終了後もSlackでやりとりしながら、約1カ月後を予定していたドラマ撮影へ向け、ギリギリまで改稿を繰り返した。「ごっこ倶楽部が求めるクオリティに達した場合のみ映像化」という厳しい案件の中、見事すべての脚本の映像化が実現。現在、ごっこ倶楽部のTikTokアカウントで配信 중이다。



育児ってコスパいいですか？

### 最優秀賞

きむらまい

『効率女子』

“コスパ”と“タイパ”に執着する女性。デートで訪れたホテルのバイキングでも大量のケーキを抱えて持ってきて、「貧乏くさい」と恋人から怪訝な顔をされるが……。

### メンターコメント

5名の脚本の評価にほとんど差はありません。それは映像化して改めて感じたことです。それぞれの脚本の持ち味がしっかりと反映されている素晴らしいドラマになったと思います。その上で『効率女子』が特によかったのは、テーマ設定や会話のテンポ感が、最もショートドラマ向きだったこと。そして、その要素を見事に脚本へ落とし込めていました。フィードバックに対する修正の的確さも素晴らしいかったです。

### 受賞者コメント

この作品では目の利益ばかりを追求していると、やがて本当に大切なものを失うのではないかと問いかけをしています。編集でカットになりましたが、この物語には続きがあります。サンダルが切れて転んだ山田は最後に「次はちゃんとしたのを買おう」と呟き、自分の意思で物事を選択をしようと改心しているのです。違う結末もあったことを踏まえてもう一度作品を鑑賞していただけますと幸いです。

### WORKSHOP



ワークショップでは、志村さんがごっこ倶楽部で培った縦型ショートドラマ脚本の極意を、3時間以上かけて参加者に伝授した。

石丸一帆

『思い出の屋台』



4

北野真子

『桃源郷』



3

上谷周平

『週5の8時間労働なんてムリ』



2

軸

『愛情弁当』



1

1. BL要素を取り入れた作品。高校生の矢嶋は友人の和田のお弁当をつくってあげていたが、女子生徒のある言葉がきっかけとなり、ふたりの間に微妙な空気が流れる。 2. 毎日の労働が嫌になった会員のマサヤは、オフィスで突然「辞めまあつす!!」と叫び、勢いで退職。そのことを恋人に報告すると、「距離を置こう」と拒絶されてしまい……。 3. 社会人一年目のりなは、新しい生活に疲れ果てていた。そんな時、大好きなおばあちゃんから電話がかかってくるが、忙しさや疲労のあまり、すぐに電話を切ってしまう。 4. 大人数の飲み会。その場に馴染めなかった男女が、二人だけで抜け出して夜の街に出る。たまたま見つけた屋台でラーメンを食べていると、徐々にいい雰囲気になるが……。

作品の動画はこちらから



# 次世代のクリエイターに光を当てる、Penの「NEXT」プロジェクトとは？

コンペティションとワークショップを通じて未来のクリエイターを支援するプロジェクト、「NEXT」が開催された。豊かな才能が集まり力を発揮した、その模様をお届けする。

写真: 齋藤誠一、井手勇貴、岩崎高也、神水麗、湯浅 亨

photographs by Seichi Saito (P124), Yuki Ide (P125), Takaya Iwasaki (P125), Mirei Sakaki (P126), Toru Yuasa (P127)



# A～Zのタイポグラフィで、部屋に飾るポスターをデザイン



メンター

植原亮輔

Ryosuke Uehara

2012年に、渡邊良重とともにデザインユニット・KIGIを発足。企業やブランドのアートディレクション、グラフィックデザイン、空間ディレクション、プロダクトデザインなどで幅広く活躍する。

## ポスターデザイン部門

「ポスターデザイン部門」のテーマは「AからZ、すべてのアルファベットを使ったタイポグラフィ」。メンターを務めたのは、オリジナルポスターを販売するECサイト「ポスターズ」のメンバーでもあるKIGIの植原亮輔さん。「一見[A]に見えないかたちも、AからZまで揃うと[A]に見えてきたりと、デザインするとフォントの可能性が見えてくる。既存のルールの限界を考えさせるタイポ

グラフィによる、面白く美しいポスターを期待しました」とテーマ設定の意図を語る。200を超える個性豊かなポスター作品の中から12組が選拔され、植原さんとゲスト審査員の高田唯さんを前に、作品のコンセプトをプレゼンするワークショップを開催。タイポグラフィの新鮮さや「部屋に飾りたくなるか」などを基準に、最優秀賞1組と、植原賞と高田賞を含む優秀賞4組が選ばれた。

最優秀賞

道木ジェイミー

「Poster of Typeface "Rei"」



タイプデザイナーである道木さんは、「Rei」と名づけたタイポグラフィをデザイン。この書体はコム・デ・ギャルソンのデザイナー、川久保玲にインスパイアされたものだという。

### メンターコメント

タイポグラフィはフォントを素材としてデザインされたもののことです。一般的にフォントにはルールがあり、整っていることが大前提ですが、思い切ったデザインをしてみると、フォントの限界値が見えてきます。この作品は近くで見たり、離れて見たりすると印象が変わって、見れば見るほどよさが伝わってきます。ディティールの面白さ、文字をつくる面白さが伝わってきます。コム・デ・ギャルソンの服のテクスチャーに近い雰囲気を感じましたね。

### 受賞者コメント

書体「Rei」は、川久保玲率いるコム・デ・ギャルソンの反骨精神やパンクといった精神を反映するため、コンパクトな幅、コントラスト、カーブを意識し、とても極端な造形をしています。「Rei」を用いて制作した本ポスターは、そのデザインコンセプトをストレートに、かつ力強くレイアウトしたデザインです。書体を用いて新たな表現をつくるのではなく、タイポグラフィや文字デザインそのものの特性を活かすことを目的に制作しました。

優秀賞(植原賞)

小森香乃

「交信」



2

優秀賞(高田賞)

荒井大輝

「あぶく ベタ」



1

優秀賞

浅井ひとみ

「Nora | 野良」

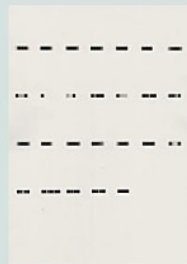


4

優秀賞

鈴木竣介

「文字を操る者の視点」



3

### WORKSHOP



リモート参加者も含む12名が集まり、メンターの植原さんと特別審査員、高田唯さんとともに、それぞれの作品について意見を交換し合った。

### EXHIBITION



入賞した5名の参加者のポスターはA1サイズでアクタス・丸の内店に約1か月間にわたって展示。多くのインテリア好きの目に触れる機会となった。

### ワークショップ参加者

豊島森林  
竹中実玖  
ミウラユウタ  
佐藤 雄  
加藤綾羽  
tysy  
金子義幸

1. カッコいいポスターもいいけれど、子どもが描いた落書きみたいなものがあってもいいのではという発想から制作。ひらがなやかたかな、一つひとつの文字の構成を解釈し直し、崩した書体で構成。 2. コミュニケーションをテーマにした作品。フォントを3DCGでモデリングし、声を震わせたようなゆらぎを加えている。 3. アルファベットを立体にして、さらに上から見たところを表現したという、ひねりの効いたデザイン。 4. 植物をイメージし、タイポグラフィに落とし込んだ。見る人が日常を過ごすなかで、葉っぱに見えたり木に見えたりと自由に感じてほしいという。折り紙をスキャンし、制作した。

2023年からpenが主催する、クリエイターの支援を目的としたプロジェクト「NEXT」。クリエイターを志している人やこれからの若手クリエイターを対象に、出会いと実践の場を提供している。24年は「縦型ショートドラマ」「ポスターデザイン」「ウェイトゥーン」「アニメーション」という多様な4つの部門を開催し、各界で活躍するトップクリエイターたちをメンター（講師役）に迎えて、コンペティションやワークショップを行った。

「NEXT」の基本的なステップは以下。①各部門のテーマに沿った作品を公募②5〜10組前後を選抜し、少人数のワークショップを開催③ブラッシュアップした作品を再提出④最優秀賞作品の決定⑤発表会・交流会の実施。

プロジェクトの最大の特徴は、コンペティションのプロセスの中にワークショップが含まれていることだ。提出した作品に対して、メンターから対面で細やかなフィードバックを受ける機会があることで、実践的なノウハウや気づきを得られるのである。そして、もうひとつ重要なのが「出会い」。ワークショップではメンターからの講評に加えて、参加者同士でのディスカッションや交流の機会も用意されている。同じジャンルでクリエイターとして修業中の仲間との出会いは、創作の刺激となるに違いない。



# 「漫画」の可能性を拡げる、新形態に挑戦



メンター

村松充裕

Mitsuhiro Muramatsu

講談社に新卒入社し「週刊少年マガジン」などに所属。「中間管理録トネガワ」「食糧人類」などを担当。2023年に退職し、サイバーエージェントが運営するコンテンツスタジオ、STUDIO ZOOMに参加。

## ウェブトゥーン部門

スマホでの閲覧に最適化し、縦型のフォーマットで読ませるウェブトゥーンは、韓国発の新しい漫画の表現形態として注目されている。メンターを務めた村松充裕さんは講談社で数々のヒット作を手掛けた後、現在はSTUDIO ZOOMでウェブトゥーンの仕掛け人として活躍中だ。本部門では既存の漫画を書いている人を含め、新たな表現を模索するクリエイターを対象に募集。応募

者のポートフォリオをもとに「ウェブトゥーンと相性がいい」と村松さんが太鼓判を押す5名が選抜され、ワークショップを開催した。1回目のワークショップの後、参加者はネーム(漫画の絵コンテ)を提出。2回目のワークショップで村松さんが講評を行った上で、最優秀賞に輝いたカンビキ旭さんの作品は連載化へ向けて始動。現在、村松さんが担当編集者について鋭意執筆中だ。



## 最優秀賞

## カンビキ旭

「絶対攻略不可能」と或るFランクダンジョンはSSSランクダンジョンへと至る」

剣士や魔術師、暗殺者などがダンジョンの攻略を生業とする異世界に、現代日本から突如転生した主人公。そこには前世と変わらない「格差社会」があった。

## メンターコメント

すごく面白かったです。まずワークショップでリクエストしたウェブトゥーンに必要な要素について、真正面からしっかり打ち返していました。ダンジョンという馴染みのいい王道の世界観設定を用いながらも、設定やキャラクターに独自のアイデアがあり、見せ方にも工夫がある。わかりにくさなど少し課題もあったが、ほんの数回の打ち合わせでしっかり訂正する対応力もすごい。実際に連載できる日が楽しみです。

## 受賞者コメント

これまで出会ってきた素敵な人たちの思い出が道標になってくれました。キャラクターをつくるために、自分が見てきた誰かの感情をヒントに、読む方々の日々の気持ちを想像しました。「強いけれどあたたかい友だち」のように思える主人公なら喜んでもらえると思い至り、ネームを描きました。ファンタジー世界の物語ですが、この現実世界にも確かに存在する感情の物語になっていたらなによりです。

## WORKSHOP



ワークショップは計2回行われた。初回はウェブトゥーンと従来の漫画表現の違い、市場規模といった細かな数字も含めた業界事情など、クリエイティブだけにとどまらない実践的なレクチャーが展開された。2回目のワークショップでは、提出されたネームに対してフィードバックが行われた。

## ワークショップ参加者

奥瀬幾多[encha]  
十ロメメ「選ばれしダンジョン攻略者」  
縹ゆり「最強ダンジョンツクール」  
ponzoo「時渡りの竜は真実の愛を知る」

ワークショップを経て、見事最優秀賞に輝いた参加者には賞金10万円を贈呈。さらに最終的に完成した作品は、部門によってかたちは異なるが、さまざまな場所での世の中に発表されている。

脚本家志望者を対象とした「縦型ショートドラマ部門」では、完成した5組の脚本はすべてメンターの志村優さんがプロデューサーを務める「まごっこ倶楽部」で映像化された。TikTokで配信され、5作品の合計で650万回以上の再生数を記録している。

「ポスターデザイン部門」では、家具・インテリアショップのアクタス・丸の内店で1カ月以上にわたる展示を実施。「アニメーション部門」は完成版をPenのYouTubeチャンネルで公開中。ネームでの提出だった「ウェブトゥーン部門」の最優秀作品は連載化へ向けた打ち合わせが進行中。早くも次のチャンスをつかみつつある参加者が現れている。

参加者の声を聞くと、「憧れのクリエイターから講評を聞けてよかった」「近い立場で創作をしている人と話せたことが新鮮だった」などが挙がった。クリエイターは孤独に自分と向き合う仕事でもあるが、誰かの声に耳を傾けることが躍進のきっかけになることもあるだろう。今後の彼らの活躍に注目を。そして、機会があれば、あなたもぜひ「NEXT」に参加してみてほしい。



# 架空の「オノマトペ」を、アニメーションで表現



メンター

和田 淳

Atsushi Wada

2002年頃からアニメーションを制作し、大阪教育大学、東京藝術大学大学院等で映像を学ぶ。ベルリン国際映画祭短編部門銀熊賞、文化庁メディア芸術祭優秀賞など数々の賞を国内外で受賞。

## アニメーション部門

アニメーションと言ってもさまざまな制作手法や表現方法があるが、メンターの和田淳さんは「間」と「気持ちいい動き」をテーマに独自の作風を確立するクリエイターだ。そんなエッセンスを参加者に伝えるために和田さんがお題としたのは、「新しいオノマトペ」。参加者は和田さんが考えた「ゆんすゆんす」「ばろんばろん」「のつつ」という架空のオノマトペから好きなものを1つ選

び、10秒～15秒程度の短尺アニメーションを制作した。和田さんは「このオノマトペをどのような状況で使うのか、正解はありません。みなさんの想像力で、みなさんの正解を教えてください」と参加者に投げかけた。応募作品の中から選抜された5組は、ワークショップで和田さんからの講評を受け、作品をブラッシュアップ。完成版はPenのYouTubeチャンネルで公開中だ。

## 最優秀賞

船田彩加

『チューブマン』

パチンコ店の前に置かれるチューブマン(電動扇風機で膨らませる街頭広告用の人形)と、その周りを囲む人々、リズムカルなBGMで「ゆんすゆんす」を表現した。

## メンターコメント

新しい擬音語をアニメーションで表現するという、正解もなく全員にとって未知なお題に、それぞれが独自の解釈によるアイデアと説得力と表現力で応えてくれました。なかでも船田さんの「ゆんすゆんす」は奇妙さ、かわいさ、胡散臭さなどの魅力的な要素を自身の世界観で表現し切った点が素晴らしい、正解はないはずなのに正解だと思いました。みなさんこれに懲りずに変な作品をつくってほしいです。

## 受賞者コメント

誰も使ったことのないオノマトペは、形容しがたい空気感や状況に対面した時に使いたくなるのだと思います。ギラついたがスター、騒がしい店内、入り口にある奇妙な動きの人形……。パチンコはしませんが、人からの話、お店の前の様子など情報を得るうちに、どこか不思議でおかしみのある存在として捉えるようになりました。個人的な妄想に近いパチンコの空気感を、音・色彩・動き・間などで感覚的に表現しました。



近藤ころ

『inu』



膝掛けを背中に乗せたまま歩いていた飼犬の動きや足音から、「のつつ」をイメージ。実写をトレースする「ロトスコープアニメーション」という手法で作品を制作した。

Marskasei

『犬耳はデンデン太鼓である』



「ばろんばろん」から、でんでん太鼓のリズムや犬の耳が頬にあたるやわらかな音を感じ取り、草むらに佇む少女と犬、そよぐ風で、そのイメージを見事に表現している。

新見真央

『のつつ話す』



「のつつ」から、話したいことがつかつかって言えなかったり、話すのがゆっくりになってしまったりするもどかしさを感じ取り、その様子をマンガチックに表現した。

篠崎舞子・澤口有里・永田 幸

『タップ』



口内遊びでやわらかい舌先で硬い歯をアタックする音が「のつつ」だと感じ、電車で口を動かしているというシチュエーションを思いついた。

## WORKSHOP



## SCREENING



ワークショップでは、和田さんからアニメーション表現に関するレクチャーを行った上で、参加者たちが課題となったオノマトペをどのように捉え、自身の作品をつくったのかをプレゼンテーションし、意見交換を交わした。その後、ブラッシュアップした作品の上映会を開催し、参加者同士の交流をさらに深めた。

作品の動画はこちらから





pen  
BOOKS

# 歌麿、写楽、北斎を世に送り出した 江戸の出版王の粹な人生と時代背景を大解剖。 葛屋重三郎 とその時代。

2025年大河ドラマの主人公！  
葛重を知る  
最初の1冊に最適！

葛屋重三郎研究の第一人者・鈴木俊幸氏、  
江戸文化を深く知る講談師・神田伯山氏のインタビューほか、  
江戸の研究者・専門家たちが語る葛重の真の姿。

好評発売中！

ペン編集部[編]

定価1,980円(本体1,800円)  
160ページ(A5判・並製・フルカラー)  
ISBN978-4-484-22119-9



- ◎葛重が仕掛けた7つの偉業
- ◎歌麿・写楽・北斎etc. 作品解説
- ◎人物相関図・生涯年表
- ◎江戸のメディアと政治／当時の出版文化
- ◎葛重が生まれ育った吉原遊廓
- ◎江戸時代の出版統制

書店・出版を生業に粋な町人文化を発信し、ヒット作で江戸の街を熱狂させた葛屋重三郎。その顔は時に堅実な経営者であり、時に人気文化人を繋いで斬新な企画を立ち上げる編集者であり、時には新たな才能を育て、世に打ち出す名プロデューサーであった。研ぎ澄まされたビジネス感覚と、体制や弾圧にも挫かれない気骨を今こそ彼の生涯から感じてほしい。



# Welcome to Pen

CREATORS  
FES.

20  
25

これまでPenは、アートからデザイン、カルチャー、プロダクトまで、  
さまざまな情報を、新しい視点を通して届けてきました。  
2025年1月、雑誌やウェブから飛び出して、  
読者のみなさまに向けた大型イベントを主催します。  
創刊から大切にしてきた「上質な日常を提案する」というコンセプトと  
世のなかのあらゆるクリエイションをリスペクトする姿勢のもと、  
特別な上映会、トークショー、音楽ライブなどを企画しました。  
心躍るエンターテインメントなイベントにぜひ、ご参加ください。

## Program

#1

### AI生成映画『ジェネレイドスコープ』 初公開&トークセッション

全編AI生成によるオムニバス形式の映画「generAldoscope：ジェネレイドスコープ」新作映像を世界初公開。さらに各作品で原作・監督を務める映像作家、安達寛高(乙一)、曾根剛、山口ヒロキの3名を迎えたトークセッションで"オリジナル物語×全編AI生成"というクリエイションの現在地点を探ります。

#2

### ウイスキーベディア ×Pen 「ウイスキートーク」

BSフジで放送中の番組「ウイスキーベディア」5周年を記念した特別企画。番組でナレーターを務める俳優の青木崇高をゲストに、ウイスキーをめぐる一夜限りのトークセッションを行います。TOKYO NODE CAFEでは、洋酒販売サイトsaketry提供による高級ウイスキー試飲会も実施。

#3

### 小川哲×大森時生トークショー 「現実と虚構」

フェイクドキュメンタリーの旗手であるプロデューサー大森時生と、2023年に『地図と拳』で直木賞を受賞した作家の小川哲。活躍する領域は違えど、“現実と虚構”の境をゆらす作風で知られる両者が今回、大森による新作映像とともに、“現実と虚構”をテーマとしたトークを展開します。

#4

### Pen CREATOR AWARDS 2024 授賞式

2017年からPenが実施し、その年に活躍したクリエイターをたたえる「Pen CREATOR AWARDS」。現代アート作家からピアニスト、アニメーション監督、脚本家まで5組6名のクリエイターが受賞した2024年度の授賞式を、TOKYO NODE HALLで実施。イベントのオープニングを飾ります。

#5

### 蓮沼執太& コーネリアス スペシャルライブ

インストゥルメンタルからボーカル曲まで、さまざまな楽曲で魅了する音楽家・蓮沼執太にコーネリアスの小山田圭吾が加わってスペシャルライブをお届けします。2025年1月号で特集したミュージシャン、細野晴臣にちなんだ楽曲も演奏予定。スペシャルゲストの登場にもご期待ください。

※プログラム内容は変更の可能性があります。最新の情報は公式サイトをご参照ください

## Welcome to Pen 2025 CREATORS FES.

[日時] 2025年1月25日(土)15時～21時

[場所] TOKYO NODE(虎ノ門ヒルズステーションタワー)

[チケット料金] 前売 ¥10,000(税込) 前売・Tシャツ付き ¥15,000(税込)

[主催] CCCメディアハウス

※チケットの販売は売り切れ次第終了となります。

※チケットの販売に関する詳細は、チケット購入ページにてご確認ください。

詳細は  
こちらから





pen

with New Attitude



日本には北から南まであちこちに、  
民藝の世界観を体験できる専門店がある。  
今回、Penの視点でお薦めをセレクト、  
そのラインアップを楽しんでほしい。

# いま買いたい、 暮らしを楽しむ 民藝カタログ

## MINGEI Catalogue

民芸 パパヤー(秋田)

やわい屋(飛騨高山)

モギフォークアート(東京)

YAMADA MPD ART CLUB(京都)

融民藝店(倉敷)

objects(松江)

工藝風向(福岡)







### 八柳商店の樺細工ボックス

角館の伝統工芸・樺細工。材料の山桜の樹皮は、東北の厳しい環境で育つことで綺麗な光沢と耐久性、防湿性を備えるという。箸入れや時計ケースに。(H26×W6.5×D4cm) ¥8,800



### 照屋窯の飛び鉋七寸皿

恩納村・照屋窯の照屋佳信は70代の大ベテランで、家族で窯を営む。100%沖縄の土の素地に施す飛び鉋模様は、釉薬に馴染んでやわらかな表情。(φ22×H4cm) ¥5,940



### 田村一のしのぎ汲出し

秋田出身の田村一は雪景色を思わせる磁器を制作。薪ストーブの灰を釉薬に用いるシリーズより、こちらは青森のゲストハウスのアカシアの灰釉を使ったもの。(φ8.5×H7cm) ¥5,500



### 菅原謙のカップ

昔ながらのやちむんのつくり方にこだわる菅原は電力を使わずまわす、蹴ろくろによるゆらぎのあるかたちと自然の釉薬の優しさを大事にしている。(φ8.5×10.5cm) 各¥2,420



### 三温窯の飯茶碗

秋田の土をできるだけ使い、地元で採れる薬灰の釉薬など天然の材料を活かした丹精な仕事ぶりは重ねると一目瞭然。大(φ13×H6cm) ¥2,530、中¥2,310、小¥2,200



### 中嶋窯の灰釉押紋楕円鉢

島根の森山窯で修業し秋田に築窯した中嶋窯。「灰釉の雰囲気と調和する紋様を意識した、奇をてらわれない器づくりにひかれます」(阪本)。(H14×W24×D3.5cm) ¥3,850

生み出している。



素材の力を信じ、人間が最低限必要な手を加えることでにじみ出るその土地らしさを、広い意味で「みんげい」と捉え、秋田の地に北と南の工芸の健やかな交差点を生み出している。

秋田の手仕事を紹介する店を縁あって引き継いだ店主の阪本真千代は、もともと県内で「農家食堂」という、野菜の栽培、収穫から調理まで一貫して行う飲食店を営み、学生時代は沖縄の大学で伝統織物を学んだ、いわば「つくる側」の人だった。だから「自然素材の力を活かすものづくりを見ると、心が通ずる気がする」と話す。

前店のラインアップに新たに加えたのは、秋田市内に住む作家、田村一が知人の家の薪ストーブの灰を集めて釉薬の原料とする磁器や、沖縄で電力に頼らず昔ながらの方法で土づくりやろくろを行う菅原謙のやちむん、北海道の土を自ら掘って器に仕立てる加地学の焼締陶など、見た目こそシンプルだが、手間を惜しまずつくられた優い作品だ。

「原土の精製から行うこともあるものづくりには、雑用も多く時間がかかりますが、かけた時間はもののよさにつながると感じています。使いやすいように加工された材料も簡単に手に入る時代にあって、遠回りのやり方にも見えますが、できたものの自然な雰囲気、尊く、ずっと応援していきたいと思っています」





### やきもの山上の飴釉白樹土瓶とカップ

長野県伊那市の窯元。あたたかみある釉薬を使いながら、薄手でシャープなフォルムが特徴。土瓶 (H22×W17×D16 cm) ¥13,200、カップ (φ7.5×H8.5cm) ¥2,860



### 馬渡新平の白ヒビ粉引鉢

器全体に細かなクラックのあるモダンな表現は、北海道の土と県外の土を合わせて生まれる。土地の材料を慈しんで生まれる白の表現が清々しい。(φ18×H6.5cm) ¥5,500



### ソロソロ窯のアーモンド鉢

ソロソロ窯の白田季布は、沖縄の北窯で経験を積み北海道で築窯。北海道の赤土は、南国沖縄より硬質でキリッとした表情を生む。(H2.5×W13.5×D11cm) ¥2,970



## 北と南の手仕事 秋田の地で調和する

民芸 パパヤー(秋田)

### 加地学の焼締鉢

釉薬を施さない焼締という技法により、北海道の大地の力強さがそのまま伝わってくる。野菜の色を鮮やかに楽しめる器でもある。(H6×W14.5×D13cm) ¥4,950



### 琉球陶器まさひろ工房の唐草文七寸皿

沖縄の土はもちろん、窯の燃料に琉球松を用いる伝統の製法。余計なものを加えない自然派の焼物には、そこはかとない優しさが宿っている。(φ23×H4.5cm) ¥5,610



### 民芸 パパヤー

●秋田県秋田市新屋表町10-14

☎13時～17時

📅日

Instagram@mingei.papaya

江戸時代に秋田と山形の酒田を結ぶ宿場町として栄え、町家や酒蔵が点在するエリア。

### Shop Data





### 奥井木工舎の雪入道

飛騨に伝わるひとつ目で一本脚の妖怪・雪入道の木人形。不揃いな切り口は、杓子をつくる時の木端を利用するため。右の無地は要問い合わせ。色絵 (H18×W4×D4cm) ¥2,420

### かじや窯の七寸皿

熊本県山鹿市で限られた地元の素材だけで制作するかじや窯の米原曉雄は、小代焼ふもと窯の職人時代に会得したスッキリとした仕事が光る。(φ22×H3.5cm) ¥3,850



### 奥井木工舎の有道杓子

飛騨の森に群生し森林整備のために間伐されることも多い朴の木を使い、木の繊維を活かす「割木工」という工法で生木のまま削り、かたちづくる杓子。(H30×W9cm) ¥8,800



### 山中和紙のキッズメジャー

かつて木造の住居の柱に残した背くらべの跡。現代の住空間でならば、手漉きの山中和紙をくるくる巻いたキッズメジャーで。目盛りは66～158cmまで。(W15cm) ¥6,800

## 飛騨の地で、 いまも続く 民藝運動 やわい屋(飛騨高山)

### 小島鉄平のうさぎスリッパ皿

船木研児など民藝作家の古作に倣ったスリッパの表現が「日増しにうまくなる」(朝倉)という小島の絵は、リズム感のあるうさぎモチーフ。(φ18×H2cm) ¥4,180



白川郷の玄関口として賑わう高山駅から車で30分。山間部の集落に築150年の古民家を移築した店舗は、重厚な梁がもたらす天井高と土間の静けさが心地よい。辺りは一面のどかな田園風景だ。店主の朝倉圭一は高山出身で、この家で暮らしつつ店を営む。

飛騨高山は、柳宗悦が幾度も訪れて編笠の一位細工や春慶塗などを取り上げ、地域工芸の振興を促した。一方、戦後の民芸ブームは、地域特有の暮らしを観せることで街を観光地化していった。しかし古きよき暮らしが途絶えたいま、高山の観光は実体を欠いていることも否めない。柳が選んだもののほとんどは、もはや日用ではなくなったが、「土地に根ざした生活文化は、そこに細々と残っている。だからこそ、柳が残そうとした江戸時代の暮らしを連想させる古民家で、柳亡き後も続いている手仕事を紹介していきたい」というのが店を開いた理由だ。

森林に恵まれた高山は、木工芸が盛ん。どの家の台所でも使ってきた有道杓子は、朴の木の塊から割り出すため継ぎ目がなく丈夫。地元の安土草多の照明や長崎の小島鉄平の陶器は、民藝的な意匠の中にモダンな軽やかさがある。

「地域性や、つくる人ごとに異なるもののよさがあることを拾い上げて伝えていく、民藝運動の末端にあるような店でありたいと思っています」







### 城勝彦のモールワイングラス

倉敷のガラス作家・小谷眞三に憧れ独学でガラスを学んだ城。富山県の氷見市でひとりコツコツとつくるガラス器は、やわらかなフォルムに癒やされる。(φ8×H12.5cm) ¥5,500

### 山口和声のスリッ&焼締皿

鳥取の岩井窯で修業し民藝の系譜にありながらも、スタイリッシュな器を手掛ける山口の新作。薄くフラットな形状は、洋菓子にもよく合う。(φ16×H0.8cm) 各¥4,070



### 齊藤十郎のマグカップ

若い頃、高山で活動していた齊藤。こちらは現在拠点とする伊豆で影響を受けた、亡き陶芸家・黒田泰蔵が残した土を譲り受け取り組んだ、無地の仕事。(φ7~7.5×H6cm) 各¥4,400



### 木村俊文の木の匙

飛騨に住む木村俊文は、木工メーカーに勤めながら手彫りでコツコツ匙を制作。口当たりなめらかなカーブを追求する。上 (W15.5×H2.5cm) ¥3,630、下 (W21×H4.5cm) ¥4,620



### 村瀬恭平のオブジェ

近隣の山の木の塊を彫り、器、盆、オブジェを制作しては「やわい屋」に持ち込むという木工家。「存在も作品も自由なのがいい」(朝倉)。(H21×W12×D8.5cm) ¥41,800

### 安土草多のライトカバー

ゆらぎのあるガラスにファンの多い安土は高山出身。部屋の中であちこち移動しやすいドーム型のライトカバーは、卓上に落ちる影まであたたかい。(φ12×H11cm) ¥7,700



### やわい屋

●岐阜県高山市国府町宇津江1372-2  
☎0577-77-9574  
🕒13時~17時  
🔥火、水、不定休  
<https://yawaiya.amebaownd.com>

### Shop Data

『わからないままの民藝』(作品社)の著者でもある朝倉。古民家の2階は私設図書館に。



### 仙台木地製作所のコンゴこけし

仙台木地製作所の佐藤康広に長年依頼しているこけしの新作は、人形の釘を刺して幸運を願うコンゴのおまじないがインスピレーション。(φ7×H24cm) 価格未定



### saon のフチ巻グラス

鳥取のsaon(さおん)工房は倉敷ガラスの小谷眞三に師事した大家具子が営む。定番の小鉢の縁を緑、赤、黄色のラスタカラーで展開した人気商品。(φ10×H6.5cm) 各¥5,720



### 菅原謙の魚紋七寸皿

濱田庄司が所有した沖縄・金城次郎の初期の作品をリプロデュース。同じく沖縄で伝統を守りながらのものづくりを貫く菅原謙の絵付けは、力強く優しい。(φ21×H6cm) ¥5,500

### 濱田窯のリーチバーボウル

大阪のリーガロイヤルホテルの依頼で、濱田窯とコラボし期間限定で制作したカクテルのための器。バーナード・リーチ好みのカーブのある取手を付けた。(φ10.5×H11cm) ¥8,520



### 延興寺窯の面取りジャグ

鳥取の延興寺窯は黒石(泥岩)を使った深みのあるブルーや面取りの意匠が特徴。日本酒なら二合は入る片口は、まっすぐなハンドルで酔っても注ぎやすい。(φ7×H11cm) ¥8,800



### 濱田窯のマグカップ

濱田窯定番のマグカップの色と模様を別注。グリーンは益子の緑釉、鉛釉のドットは濱田庄司がよく使っていた技法を採用したもの。(φ8×H8.5cm) 各¥3,630

民藝と北欧のプロダクトを扱う  
ビームスフェニカのディレクター  
を20年務めたのち、自身の店を開  
いた英国出身のテリー・エリスと  
北村恵子の日常は、以前にも増し  
て忙しい。今日は南へ、明日は西  
へ。作家の元へ足を運び制作の話  
を聞きつつ、モギの別注品につい  
て相談するのが、楽しくて仕方が  
ないのだ。

最近、鳥取の延興寺窯や大分  
県小鹿田焼の坂本浩二窯のピッチ  
ャーに、英国の陶芸家ルーシー・  
リーの作品から着想し「まっすぐ  
な取手を付けて」とリクエスト。  
大きめのものは日本酒の片口とし  
て、小さいものはソース用に重宝  
するなど、ふたりのセンスが新し  
い用途を切り開く。現行の作品を  
アレンジする一方で、金城次郎や  
濱田庄司など物故作家のオリジナ  
ルピースの収集も続け、ときには  
付き合ひのあるつくり手に復刻の  
相談をすることもある。

「それぞれの土地にもともとある  
意匠やつくり方には手を加えない  
ようにしています。その上でサイ  
ズや使い勝手をアップデートし  
て、いまの生活に届くものにして  
いきたい。復刻する意義があると  
作家自身も感じられて、楽しんで  
つくれるものを一緒に残していき  
たいと思っています」

金城次郎の初期作品の意匠を現  
代の陶芸家・菅原謙が蘇えらせる  
という、時代を超えたコラボもこ  
こから生まれている。







#### 小鹿田焼のジャグ

付き合いの深い小鹿田焼の坂本浩二窯にまっすぐな取手のジャグを依頼。ソースなどを入れて食卓で使いまわせる可愛いアイテムが生まれた。(φ6.5×H8cm) ¥4,950



#### 小鹿田焼・坂本浩二窯の五寸皿

飛び駒模様が人気の小鹿田焼だが、このような「刷毛目も洪くてかっこいい」とアドバイス。埋もれそうな伝統に改めて価値を付けていく。(φ15×H3cm) ¥2,420



#### 桂樹舎のハガキ箱

失われつつあった富山県・八尾の和紙づくりを、芹沢銈介との出会いにより型染めを取り入れて立て直した桂樹舎。アフリカ柄のデザインを別注した。(H5.5×W12×D17cm) ¥4,180

#### 海馬ガラス工房のタンブラー

濱田庄司が自宅で使っていたという沖縄ガラスの背高なデザインを気に入り、仙台の海馬ガラス工房に得意な材料で再現してもらったタンブラー。(φ7×H14.5cm) 各¥11,000



#### 中井窯・坂本章の十字八寸皿

柳宗理デザインの掛け分け皿を企画した、中井窯・坂本章の個人の仕事。ダイナミックな絵付けが魅力の特大の皿を家庭に飾る八寸で依頼した。(φ24×H4cm) ¥23,100



いまの暮らしに合う、  
新たな用の美を創造

モギ フォークアート(東京)



photos : Norio Kikura

#### MOGI Folk Art

●東京都杉並区高円寺南3-45-12

☎080-8058-1761

🕒12時～19時

🔥火 水

Instagram@mogi\_folk\_art

高円寺駅から徒歩5分。民藝の品々とともに古着やオリジナルの服も展開する。

#### Shop Data



### 丹波焼の釉流壺

幕末の丹波で流行した白丹波（褐色土に化粧土をし白を表現した焼物）の壺は、配色こそシックだが、破壊的な黒の流れが大胆で粋。江戸末期。（φ17×H17cm）¥120,000



### 瀬戸焼の麦藁手碗

規則的な縦線模様が魅力の麦藁手の中でも特に線がシャープでモダンなものをセレクト。カフェオレボウルとしてなど身近に置いて使ってほしい。江戸末期。（φ10×7.5cm）¥60,000



### 河井寛次郎の菱花陶板

グラフィカルに塗り分けた絵画のような焼物は、ヨーロッパのヴィンテージセラミックを彷彿とさせる。壁掛けとして鑑賞したい。1951年作。（H33×W20×D4.5cm）価格要問合せ

## 民藝の美しさを、 ポップに再解釈する YAMADA MPD ART CLUB （京都）

### 古伊万里赤絵香炉

赤絵×呉須の伝統的な絵付けに見られる繰り返しの紋様に、グラフィックとしての面白さを感じるという香炉は、江戸時代中期のもの。（φ8×H6cm）¥36,000



### 古伊万里の色絵くらわんか

下手（げて）の皿は、柳宗悦が取り上げるまでも目を留めなかった。五客組だが絵柄や配置が揃っていない雑器感も魅力。江戸後期。（φ12.5×H2.5cm）五客揃¥55,000



柳宗悦は、京都の骨董市で名もなき職人仕事の工芸に美しさを見出し、民衆的工芸の収集と保存を志した。そんな京都で民藝作家のオリジナルピースから江戸時代の陶磁器まで古民藝を扱う山田尚人は、かつてロックバンドで活動。岡本太郎など60〜70年代のパブリック&ポップアートやバスキアのグラフィティなど、ストリートカルチャーに影響を受けた世代だ。展覧会で見た河井寛次郎作品の独特な造形と釉薬使いに、音楽やアートに抱いてきたものと同類のエネルギーを感じ、民藝関係の本を読みあさった。誰も目に留めなかったものをすくい上げ、世の中でよしとされているものがすべてではないと社会に問うた柳宗悦の姿勢は、山田が音楽で表現したかったことに通じていた。

「柳はつくり手ではないけれど、従来とは別の角度からものを見て選び、美しいと唱えることで、歴史を変えるほどの二次的な創作をした。現代に生きる僕にとって、彼が取り上げた幕末の石皿の絵付はすごくポップに見えますし、白丹波の流し掛けはグラフィティのようにカッコいい。民藝を過去のものではなく、モダンで洗練されたものと捉えています」

山田による「別の角度」で選ばれスタイリッシュな店内に並び品々は、時代を超えて人の心を動かす美が確かに存在することを確認させてくれる。







### 波佐見焼の染付くらわんか碗

江戸時代の雑器くらわんかは「ゆがんだ形状も、不規則な絵付けも、間違えて描いてしまったような線も、すべてグッときます」(山田)。江戸中期。(H5×W11×D10cm) ¥35,000



### 河井寛次郎の呉須扁壺

釉薬の魔術師とも呼ばれた河井寛次郎らしい深いブルー。植物とも生物ともつかない宇宙的な造形に惹かれる。1957年作。(H23.5×W20.5×D16cm) 価格要問合せ



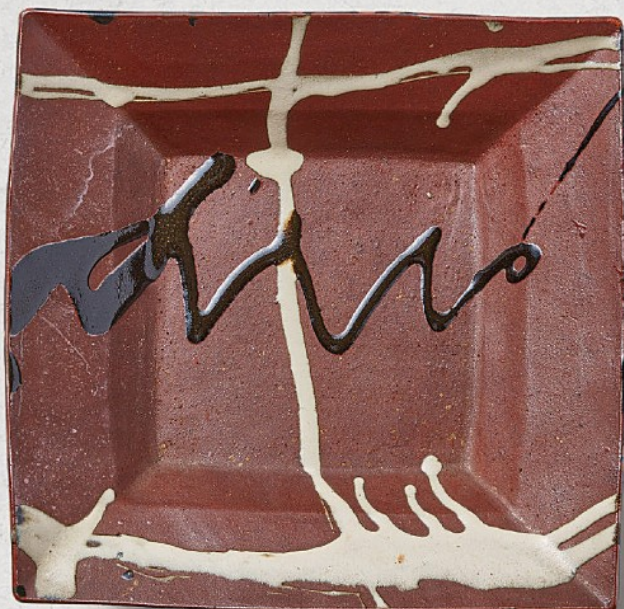
### 船木研児の陶板

2025年の干支でもある蛇をスリップウェアの技法で描いている。船木の作品ならではのデフォルメされた動物のデザインが絶妙だ。1990年代。(H22×W22×D2.3cm) ¥66,000



### 瀬戸焼の石皿

上下に描かれたフリルのような花びらと、中央のキャラクターのような葉に、アニメにも通ずる平面表現の面白さを感じるという石皿。江戸後期。(φ28×H5cm) ¥88,000



### 島岡達三の象嵌ジョッキ

土に縄目を押し付けてできた模様と別の土を埋めて焼く「縄文象嵌」を編み出した益子の人間国宝。存在を際立たせる力強い意匠だ。1970年代。(H15.5×W13×D11.5cm) ¥55,000



### 濱田庄司の焼締釉描角皿

焼締に黒と白を大胆に流し掛け。「高い技術が求められる技法を、いとも簡単そうにやる濱田、カッコいいです」(山田)。1960年代。(H31×W32×D7cm) 価格要問合せ



### YAMADA MPD ART CLUB

●京都市中京区寺町通

竹屋町上る藤木町22

☎075-286-3985

🕒11時30分～18時

🔥火、水、不定休

<https://yamadampdclub.com>

民藝館のケース越しではなく、民藝作家の作品を直に手に取り確かめられる店。

### Shop Data





#### 閑林美圭の丹波布風呂敷

幕末から明治に盛んに織られるも衰退した丹波布は、民藝運動で復興。手紡ぎの木綿糸を草木染めし、つまみ糸という網糸を織り混ぜるざっくりとした風合い。(H66×W66cm) ¥27,500



#### 備中和紙・丹下直樹の張子

備中和紙のつくり手・丹下直樹が取り組む無地の張子。倉敷民藝館収蔵の朝鮮の祝い鴨のかたちを写した。過去にならい新しきを得る好例だ。(H16.5×W24×D8.5cm) ¥17,600



#### 倉敷堤窯の押紋五寸皿

型で成形した粘土にローラー型の道具でほどこす押紋は、創業者の武内晴二郎から続く仕事。使い勝手のいい五寸皿は食卓のいいアクセントになる。(φ15×H2cm) ¥2,200



#### まゆみ窯のピッチャー

小代焼ふもと窯で修業し熊本で窯を開いたまゆみ窯のピッチャーは、持ち手の感触や口づくりのバランスが絶妙な、使ってこそよさのわかる道具。(H15.5×W14×D11cm) ¥19,800



#### 平松竹細工店の花籠

竹芸職人の平松幸夫が、岡山県で採れる真竹を使い、ひごづくりからていねいな仕事でしっかり編む籠。青竹の爽やかさが活きる編み目の美しさが評判。(φ13×H15cm) ¥5,830

倉敷の民藝運動を推し進めた有志らの勧めで、1971年にスタートした融民藝店は、創業50年を機に先代の小林融子が引退。彼女がかつて勤めた岡山県民藝振興株式会社で働いていた山本尚意が事業を承継し、新たな時代を刻んでいる。

「先代はよく、先人のいいとされる器で、コーヒーやお茶を出してくださいました。リラックスした雰囲気の中で『口当たりがいいでしょ』などと話す実感を伴う会話から、民藝を学ばせていただきました」と山本は語る。

倉敷民藝館初代館長の外村吉之介と親交があった先代だが、難しい民藝論は語らず、普段使いをなにより大事にしなごう、ものの本質を伝え、民藝の裾野を広げた。山本も作家名や実績ではなく、「こう使おうと楽しいと思いますよ」という接客を心がけている。民藝の世界では、売り手を「配り手」と呼ぶが、どのように配るかに心を注ぎたいのだ。

つくり手の新たな取り組みにも心を配る。倉敷で染織を学んだ若いつくり手の布物のほか、備中和紙の丹下直樹が本業の仕事のかたわらはじめた張子のオブジェは、倉敷民藝館所蔵の木製の鴨を写した作品が好評だ。

「和紙の新たな楽しみ方として。暮らしの豊かさをつくり手とともに考え、配っていききたいと思っています」





### 瀬戸本業窯の筒湯呑

瀬戸で300年の歴史を持つ窯元が  
つくり続ける黄瀬戸。やわらかな黄  
色の釉薬は経年変化も魅力だ。筒  
湯呑は重ねやすく、晩酌にもいい大  
きさで重宝。(φ8×H6cm) ¥2,750



### 倉敷ガラスの小鉢

1964年創業の倉敷ガラスの2代目・小谷栄次  
の小鉢は、ねじり模様と適度な厚みで美しさと  
丈夫さを兼ね備える。「一器多用の小鉢が私  
のお薦めです」(山本)。(φ10×H6cm) ¥3,080



### 須浪亭商店のいかご

1886年創業、ゴザやイグサの籠「いかご」を製  
造する須浪亭商店の5代目・須浪隆貴が手掛  
ける。部屋に置くと爽やかなイグサの香りに  
包まれる。(H27×W40×D30cm) ¥22,000



### 宮野さとみのピーカー

益子の濱田窯や英国のボタリーで修業した宮  
野の器は安心感のある厚みを備えている。線  
の流れが気持ちよくモダンで、いろいろな器  
に合わせやすい。(φ10×H6.5cm) 各¥2,750

## 使い心地を大切に、 倉敷の名店 融民藝店(倉敷)

### 榎本泰子の木綿のストール

1953年の設立以来続く倉敷本染手織研究  
所で学んだ榎本は、三宅島で綿花を育てる  
ところから織物に取り組む。洗うほどにや  
わらかくなる。(H130×W36cm) ¥19,800



### 倉敷てまり

外村吉之介が熊本の肥後てまりに魅  
せられ、倉敷の婦人方と開発。多色づ  
かいが伝統で、単色の白や青は融民藝  
店のオーダー。糸の繊細な重なり到手  
仕事の力を見る。(φ8cm) ¥3,300



### 融民藝店

●岡山県倉敷市阿知2-25-48  
☎086-424-8722  
🕒11時～18時  
🗓月、火  
<https://toworu-mingei.studio.site>

美観地区の風情ある木造の建物は、倉敷羽鳥  
焼を始めた小河源虎吉も住んだ場所だった。

### Shop Data





木彫大黒像

大黒像は、恵比寿像とともに福の神として江戸の民衆の家に置かれたという。「煤を纏って渋カワイ姿に。たまりません」(佐々木)。(H8×W4×D3.5cm) ¥38,500



西持田窯の八寸皿

松江市内に窯を持つ西持田窯の八寸皿は、料理が映える配置に模様や釉薬の流れがあり、毎日のご飯をおいしく見せると人気。絵柄の種類が実に豊富だ。(φ24×H5cm) 各¥7,700

## 新旧の工藝を 分け隔てなく紹介

objects (松江)

森山窯の呉須釉ポット

澄んだ色みの呉須釉や深みのある瑠璃釉など、島根の土と釉薬が生むブルーが森山窯の真骨頂。ポットは蓋口が広く茶葉や湯量がよく見える。(H11×W17×D7cm) ¥13,750



湯町窯の手付片口

名湯・玉造温泉の近くの湯町窯は、地元産の石が原料の黄釉(きぐすり)の鮮やかさが特徴。見込みの大きな片口は、惣菜も盛り付けやすい。(H7×W16×D8cm) ¥7,700



山野孝弘の牛天神

出雲民藝紙工場の職人・山野による張子は、手のひらにのるほど小さい面に愛嬌たっぷりの天神様の表情が描かれる。(H5×W3.7×D1cm) ¥2,200

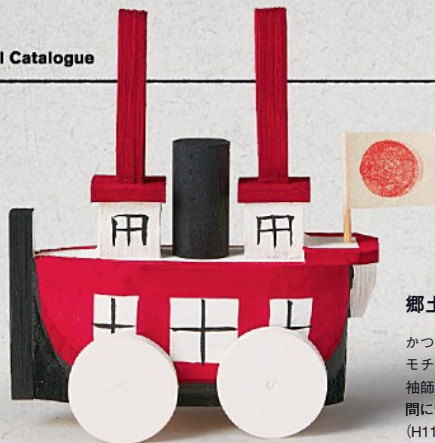


学生旅行の沖繩で観た金城次郎の絵皿のかっこよさに衝撃を受けたことをきっかけに、全国各地の焼物に興味を持ち、それらを中心に扱うオンラインショップを運営していた店主の佐々木創。とある縁でこの場所に空きスペースを見つけ、民藝運動にゆかりがあり河井寛次郎の出身地でもある、島根県に移住。松江市に店舗を持った。取り扱うのは、島根県の森山窯や西持田窯、湯町窯や出雲窯など、この土地の土や釉薬を用いながらそれぞれに個性の光る焼物をはじめ、出雲民藝紙工場の張子や郷土玩具、全国の作家や窯元の作品、そして古民藝だ。江戸時代の石皿やくらわんかななどの雑器と分け隔てなく、民藝運動の中心人物と同時代に活動した、県内の布志名焼の松木研児の色鮮やかな大皿や、益子の濱田庄司の大きな絵付の湯呑みなどが並び、名の知れた作家の作品であっても、できるだけ暮らしに取り入れやすいものを提案する。佐々木自身いくつか所有し、使うことも飾ることも、日常的に楽しんでいるという。

「初めて出合った金城さんの大皿のように、なにを載せなくとも、ものとして存在感のあるものが好きです。民藝という言葉で紹介される窯元や作家が多いですが、必ずしも用に適わなくてもいいのではないかと思っています。観ているだけで心が満たされるものもありますからね」







### 郷土玩具「松江の蒸汽船」

かつて宍道湖を行き来した蒸汽船がモチーフの木製郷土玩具は、松江の袖師家の女将・尾野真弓が家業の合間に制作。櫓のへぎ板を用いている。(H11×W10×D4.5cm) ¥5,500



### 平山元康の土瓶

丹波篠山で若い頃から注目を集める平山の作品は、奇をてらわない丹精なかたちに沿って釉薬が上品な景色をつくる。注ぎやすさも抜群。(H19×W18×D8.5cm、取っ手含む) ¥16,500



### 山野孝弘の藤吉瓶敷

松江の篠細工職人・長崎藤吉の技術を、紙漉き職人の山野が学び制作する藤製の瓶敷。経年によりいい色に育っていく。(φ14cm) 無地¥6,050、黒¥6,600

### 船木研児の線彫二彩大鉢

布志名窯の船木研児は1927年生まれ。濱田庄司に師事しバーナード・リーチの工房で研鑽を積んだ。線彫模様と釉薬の流れが絶妙に混じり合う秀作。1970年代。(φ30×H7cm) ¥77,000



### 垣内信哉の片口とカップ

店の常連客だった垣内は、好きが高じて独学で技術を得しガラス作家に。近年は薄造りの作品をメインに制作する。片口(φ8×H11.5cm) ¥6,600、カップ(φ7×H7cm) ¥4,400



### 島岡桂のジョッキ

陶芸家・島岡達三の孫として縄文象嵌の技法を受け継ぐ。祖父の作品を彷彿とさせるものもあれば、このジョッキのように軽やかなものも。(φ8×H10cm) ¥6,600



### objects

●島根県松江市東本町2-8  
☎0852-67-2547  
🕒11時～18時  
不定休  
<https://objects.jp>

テラーメイドの紳士服店だった大橋川沿いの店舗を改装し、2011年にオープン。

### Shop Data



### 石川硝子工藝舎の面取鉢

岡山県某所（非公開）において石川昌浩が吹く、淡いはちみつ色のガラス鉢は、中に入れるものを艶やかに見せてくれる。手仕事ならではの質感を楽しんで。(φ17.8×H8.3cm) ¥5,500



### 小鹿田焼の七寸ピッチャー

大分県日田市の山間部で江戸時代より続く小鹿田焼。坂本創は先達の仕事や技法、伝統に対して正面から取り組み、いまに生きるひとりのつくり手として日々新しい器を生み出している。(H20.5×W14.5×D11cm) ¥8,800



### 小代焼ふもと窯のスリッパ角鉢

熊本県荒尾市、小代焼ふもと窯の二代目・井上尚之は小石原焼・太田哲三窯で修業。小代焼の特徴であるわら灰釉と並行し、修業先で学んだ技法を活かしたスリッパウェアを制作。(H23×W23×D5cm) ¥8,800



### 山崎大造の四つ目パンかご

高知県南国市で竹籠製作に取り組む山崎。竹に無理をさせず素材の持つ瑞々しさを活かした編み方が特徴。使い込むほど素材本来の魅力が増す。(H9.5×W25.5×D34.5cm) ¥16,500



### 阿部眞士の白磁鑄蕎麦猪口

福岡県北九州市の貯水池湖畔の工房で白磁の仕事を続ける。鑄を入れた蕎麦猪口は、うっすら青白い磁肌とスツとした立ち姿で食卓をキラッと引き締める。(φ8.5×H7.5cm) ¥3,300



### からや窯の七寸皿

会社員生活を経て脱谷山焼北窯松田米司工房で修業した登川均。現在はうるま市に窯を構え、やちむんの技法を現代に伝える。勢いのよさと精緻さが共存。(φ22×H4.5cm) ¥4,785



日本民藝協会の常任理事や雑誌『民藝』の編集長でもある高木崇雄が店主を務める。近くに福岡市美術館や大濠公園のある閑静な場所に佇むこの店には、店主とつくり手の信頼関係によって育まれた日常の品が並ぶ。

「店を始めるにあたって、他の誰かが価値を決めたものを右から左へ回して商売するのは面白くないと思ったんです」

開店当初から小代焼ふもと窯・井上尚之と、石川硝子工藝舎・石川昌浩の仕事を紹介してきた。「同世代の彼らに出会えたことで方向性が決まりました」

その後も豊永盛人や坂本創といったつくり手たちとの出会いに恵まれ、現在のような店の姿ができあがってきた。「つくり手が伸びることで店も伸びる。一緒に育っていく覚悟なので数を増やすつもりはありません」と高木は言う。

店には焼き物を中心に、ガラスや漆器、竹かごなど、暮らしを支えるものが並ぶ。入り口付近にあるワインについて尋ねてみた。

「ワインは酵母の力でお酒に変化し、焼き物は窯の火によって器に変わる。いずれも人の手を離れる工程が入る仕事、祈りが存在する仕事です。自分の力だけでなく、他力によって生まれるという意味で、いずれも工藝なんです。そんな産地の景色が見えるものを扱ってきたい。最後に器を育てるのは、それを使う人です」





#### 小代焼ふもと窯のわら灰釉八寸皿

小岱山から採れる良質な陶土を使い、小代の土とわら灰からできた釉薬で仕上げた温かみのある質感が特徴。淡い青のラインがモダンな印象。井上尚之作。(φ24.5×H4cm) ¥6,050

#### からや窯の六寸まかい

「まかい」とは沖縄の方言で、お椀やどんぶりを意味する。高台が広く、汁物や麺類、おかずなど、さまざまな料理を盛り付けて楽しめる。登川均作。(φ18×H8.5cm) ¥3,465



#### 玩具ロードワークスの琉球雛

かつて沖縄にて、子どもの健やかな成長を祈ってつくられてきた琉球張り子。豊永盛人のつくる張子は鮮やかな色と、温もりのあるフォルムが愛おしい。(H14×W9.5×D7cm) ペアで¥9,900



#### 須浪亨商店の瓶かご

かつて、い草の産地だった倉敷で、祖母が手掛けていた仕事を守り広げる須浪隆貴の仕事。瓶かごは居酒屋の縄のれんの技法を応用してつくられている。(φ11×H41cm) ¥2,200



## つくり手と 一体となり、 器を育む 工藝風向(福岡)



#### 安比塗漆器工房の3.8寸汁椀

岩手県八幡平市。国産漆の主たる産地である岩手において、地元で採れる漆を重ね塗りしてつくられる。ふっくらとした手触りと丈夫さを兼ね備えた、日常の暮らしのためのお椀。(φ11.3×H7cm) ¥8,800



photos: Keishi Asayama

#### 工藝風向

●福岡県福岡市中央区赤坂2-6-27  
☎11時～18時30分 / 19時  
📅月(祝日の場合は翌平日休み)  
<https://foucault.tumblr.com>

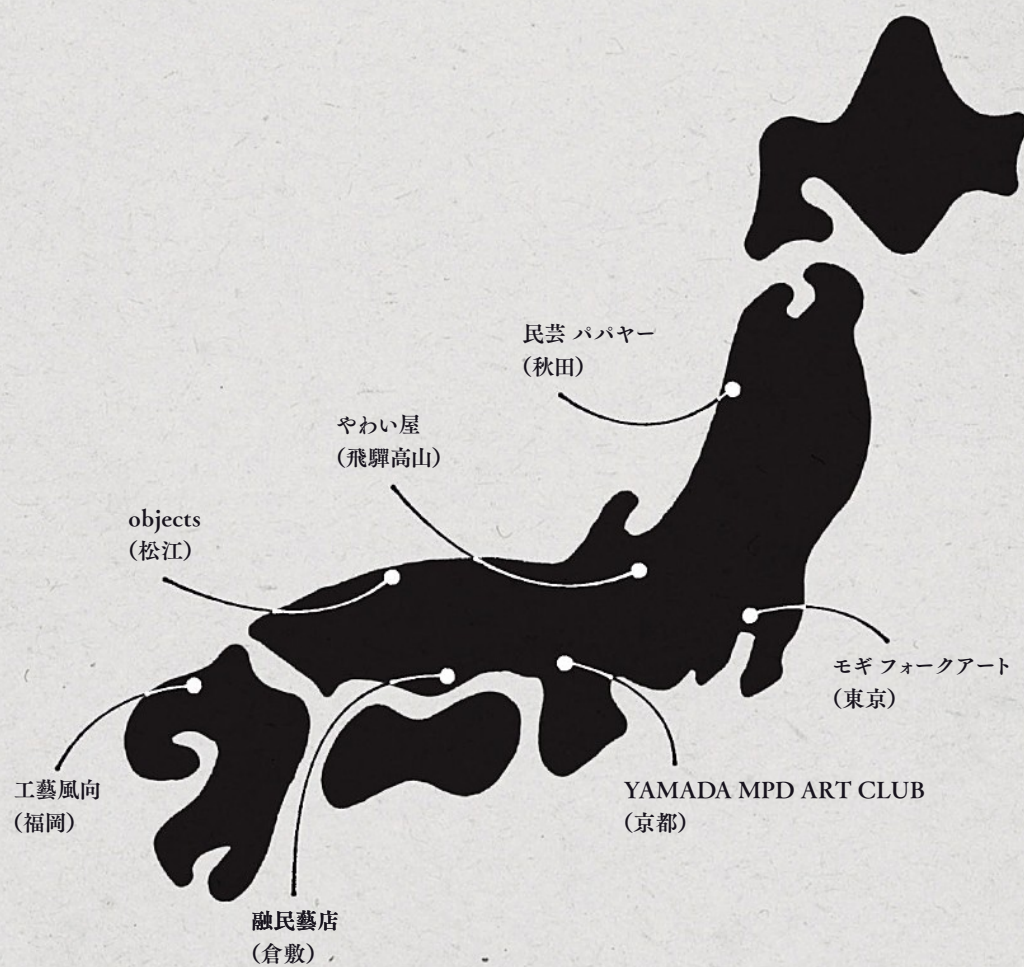
護国神社と舞鶴公園に挟まれた閑静な場所に佇む。日常つかいにくい器が見つかる。

#### Shop Data



写真:宇田川 淳 イラスト:勝山八千代  
編集&文:衣奈彩子 文:久保寺潤子  
photographs by Jun Udagawa (item) illustrations by Yachiyo Katsuyama  
edit&text by Saiko Ena text by Junko Kubodera (P144~145)

※店舗の営業時間、休業日、価格などは予告なしに変わることがあります。  
※掲載している商品は、雑誌発売時に売り切れの場合もあります。





# ART

スイスを代表するグラフィックデザイナーでタイポグラファーのヨゼフ・ミュラー＝ブロックマンと、彼のパートナーであり芸術家の吉川静子のふたりの作品と軌跡を紹介する展示。ミュラー＝ブロックマンといえば、スイス・スタイルとも言われる「インターナショナル・タイポグラフィック・スタイル」の代表格であるとともに、「グリッド・システム」を生み出した人物。これは文字通り、グリッド

に従い安定した文字組みとレイアウトをするデザイン手法であるが、紙媒体だけでなく、いまではウェブデザインの基本中の基本ともなっている。また、音楽を抽象的な図形で表現したことでも知られ、なかでもチューリッヒのコンサートホールで開催されたコンサート用ポスターは、幾何学的パターンや色彩によって音楽を視覚化するように表現。旋律や動的なリズムが感じられる緊張感のあるデザイン

は、世界的にファンが多い。

ミュラー＝ブロックマンは実は日本との関わりが深く、1960～80年代にかけて複数回来日している。亀倉雄策とも親交を持ち、大阪芸術大学やデザイン学校で教鞭を執って日本のデザイン教育に貢献した。一方の吉川は、ドイツのウルム造形大学に留学しデザインを学んだ後、ミュラー＝ブロックマンの事務所で働き、彼と結婚。その後チューリッヒを拠点にコン

クリート・アート芸術家として晩年まで制作を続け、太陽をテーマとした絵画やシルクロードをテーマとした作品を手掛け、2019年に亡くなった。

吉川の没後初の本展は、構成的なデザインが特徴のミュラー＝ブロックマンの作品と、グラフィックデザインおよび幾何学的抽象芸術の両方の精神を持つ吉川の代表作が展示され、ふたりの生涯と作品を追体験できるものである。

## スイス構成主義の精神を持つ、デザイナーと芸術家夫妻

### 『Space In-Between: 吉川静子とヨゼフ・ミュラー＝ブロックマン』

開催中～2025/3/2 大阪中之島美術館  
☎06-4301-7285(大阪市総合コールセンター)  
🕒10時～17時 ※入場は閉場の30分前まで  
📅月、12/31、1/1、14、2/25 ※1/13、2/24は開館  
🎫一般 ¥1,700  
<https://nakka-art.jp>



チューリッヒにて。 1965年頃  
Copyright and courtesy of the Shizuko Yoshikawa and Josef Müller-Brockmann Foundation

近代から現代までのアートにおける、色彩論や色の役割について考察する

### 『カラーズ ― 色の秘密にせまる 印象派から現代アートへ』

印象派の画家たちはチューブから出した絵の具を活用し、色彩豊かな絵画を追求した。そこから光学理論を採り入れた点描技法を生み出したのがジョルジュ・スーラだった。さらにロベール・ドローネーは幾何学的な抽象絵画によって、またモリス・ルイスやケネス・ノーランドは大画面の絵画によって色彩あふれる独自の作品を制作した。本展は印象派から近現代アートにおける芸術家たちの色彩に対する取り組みに焦点を当て、色彩論や色そのものの役割について考察する。



ロベール・ドローネー『傘をさす女性、またはバリエーション』1913年 ポーラ美術館

開催中～25/5/18 ポーラ美術館 ☎0460-84-2111  
🕒9時～17時 ※入館は閉場の30分前まで 無休 🎫一般 ¥2,200  
[www.polamuseum.or.jp](http://www.polamuseum.or.jp)

実は画家としても活躍した、ル・コルビュジエの芸術にフォーカス

### 『ル・コルビュジエ 諸芸術の総合 1930-1965』

ル・コルビュジエのバリのアパートメントはいまも残されていて見学ができるのだが、そこでいちばん大きな空間が絵を描くためのアトリエだ。彼は午前中はここで絵を描いて過ごし、昼から事務所に向かって建築の仕事をしていたという。本展は1930年代以降のル・コルビュジエが制作した絵画、彫刻、素描、タペストリーにスポットを当て、レジェやアルプやカンディンスキーといった同時代作家の作品を対峙させるなど、芸術家ル・コルビュジエの新たな姿を浮き彫りにする。



ル・コルビュジエ『マッチ箱と二人の女』1933年 森稔コレクション蔵

25/1/11～3/23 パナソニック汐留美術館 ☎050-5541-8600(ハローダイヤル) 🕒10時～18時(2/7、3/7、14、21、22は20時まで) ※入館は閉場の30分前まで 🎫水(3/19は開館) 🎫一般 ¥1,200  
<https://panasonic.co.jp/ew/museum> ※本展は、ル・コルビュジエ財団の協力のもと開催されます



怒り、絶望、悲嘆など、生きていれば、避けることが困難な多くの壁に直面することになる。それらと向き合うには、「メランコリー」という感情に落ち着けることが重要だと、著者は主張する。辛いことを「仕方がない」「そりゃたしかに」と受け止める寛大さだ。

メランコリーな人は小さなことに喜びを見出す術を知っている。なにごとにおいても「たまにはうまくいくかもしれない

い」と細やかに期待できる。裏を返せば、この世に確実なことなどないと理解している。著者が強調するのも、まさにその部分だ。不快なことが多い世の中だからこそ、あえてメランコリーを復権させる必要があるというユニークな発想である。重苦しいイメージがあるこの単語に明確な役割を与え、もっと語りやすいものにしようというのだ。

メランコリーな人が優れた知性の持ち主だと言えるのは、数

えきれない失意の種と、人生にたまにある素晴らしいこととの“ちょうどいい折り合い”を上手に見つけているからなのだろう。その証拠に、子どもは面白いことがあれば声を上げて笑うが、悲しいことの多さを知っているメランコリーな大人は、もっと深みのある声で笑う。また、メランコリーな人は内向的であるケースが多いが、その理由は、基準を外発的な人に置いていることにあるともいう。さらにい

えば、メランコリーな人が誠実でいられるのは、自分が不純な人間であることをよくわかっていて、その罪深さを知り尽くしているからだそうだ。

著者が指摘するように、朗らかさが求められる環境や消費社会において、メランコリーな人は苦しむ可能性もある。だが生きていく以上、私たちは現実を受け入れる必要がある。そういう意味において、メランコリーという概念が欠かせないのだ。

## 辛い現実を受け入れるために、“メランコリー”の意外な効能

『メランコリーで生きている』

アラン・ド・ボトン 著 齋藤慎子 訳  
フィルムアート社 ¥2,420



境界と空間を操作する建具とは？  
近現代の建築39作品から考察

『建具の手がかり 境界を操作する39の手法』

設計という作業において、空間のつながりを保ちつつ個別の居場所をつくるのが大切。それを実現するために重要なのが、「閉じた状態でも仕切りながらつなげること」ができる建具——。建築家であり、建具専門メーカーを運営している著者は主張する。そうした考え方に基く活動の中から生まれた本書は、建具を軸に置き、テキスト・写真・図面を通じてさまざまな実例を紹介。戦前期以降から現代に至るまでに生まれた、“建具や境界について特筆すべき設計がなされた建築”39作品を紐解いていく。



藤田雄介 著  
学芸出版社 ¥3,080

軽妙に辛辣に映画を斬った、  
大喜利のようなシネマコラム集

『クチから出まかせ 菊地成孔のディープリックス映画批評』

2012年から現在まで続く、菊地成孔による映画に関する雑誌連載をまとめた一冊。マーベル・ヒーローが集結した『アベンジャーズ』に代表される大作から、B級カルト作品を見事にリメイクしてみせた『サスペリア』まで、多彩な140作を収録している。著者が言うように、「『映画批評』というより『映画に対する反射的な大喜利』としての『コメント芸』」といった趣で、ワインでも飲みながら軽妙な映画談義を聞いているような気持ちになる。だが、その批評は時として辛辣で、“タメ”の効かせ方が心地よいのである。



菊地成孔 著  
集英社 ¥2,200



# CINEMA

2024年11月に行われたアメリカ大統領選挙で、アフリカとアジアにルーツを持つ女性として初の大統領誕生が期待されたカマラ・ハリスと競り合い、再び大統領に返り咲くドナルド・トランプ。時期を同じくして、彼の人生にインスパイアされた映画『アプレンティス:ドナルド・トランプの創り方』が世に送り出される。トランプの弁護士が上映阻止に動いたとも報道された本作は、彼自身を侮辱するような

伝記映画ではなく、トランプのような人物が生み出されたアメリカの本質を探求することに主眼が置かれている。

物語は、トランプが悪名高い弁護士ロイ・コーンに出会うところから始まる。まだ何者でもなかった若きトランプは、手段を選ばないコーンから、常に攻撃的で決して負けを認めない姿勢を教わっていく。トランプにとってコーンは第2の父であるだけでなく、“創造主”ですらあ

った。この映画は、ふたりの男の関係に迫っていく。

本作の監督の座を射止めたのは、『ボーダー 二つの世界』（2018年）で数々の賞を受賞したイラン系デンマーク人であるアリ・アップバシだ。前作にあたる『聖地には蜘蛛が巣を張る』（2022年）では、女性のセックスワーカーが標的となった、イランで実際に起きた連続殺人事件を題材にした。事件の殺人犯である父から息子への負の連鎖が

ほのめかされ、“怪物”の誕生譚となっている点で『アプレンティス:ドナルド・トランプの創り方』とテーマを共有する。

また、コーンはクローズドのゲイでもあった。アメリカでは1980年代初期、HIV／エイズが流行。当初この病気は男性同性愛者たちに多く見られたため、エイズ禍は性的マイノリティの可視化と権利運動にとって重要な歴史であり、今作はそんな時代を克明に記録している。

## ある男との出会いが生んだ、トランプという“怪物”の秘話

### 『アプレンティス:ドナルド・トランプの創り方』

監督／アリ・アップバシ

出演／セバスチャン・スタン、ジェレミー・ストロングほか

2024年 アメリカ映画 2時間3分

2025/1/17よりTOHOシネマズ日比谷ほかにて公開



© 2024 APPRENTICE PRODUCTIONS ONTARIO INC. / PROFILE PRODUCTIONS  
2 APS / TALORED FILMS LTD. All Rights Reserved.



若かりしトランプにしか見えないと評判のセバスチャン・スタンの演技にも注目だ。劇中で頭皮縮小手術や脂肪吸引手術を受ける生々しいシーンなどは、まさにメアリー・シェリーの名作古典『フランケンシュタイン』における“怪物の創造”というテーマを彷彿とさせる。

独身中年女性が初の性体験を経て、迎えた思いもよらぬ展開

### 『ブラックバード、ブラックベリー、私は私。』

ジョージアの小さな村に暮らすエテロは、48歳にして初めて男性と性体験を持ったことがきっかけで、変化を迎えることとなる。結婚も恋愛もしていない中年女性を物珍しがる世間の眼差しにも負けず、ひとりの人生を謳歌するそのありさまと、若くなく痩せてもいない身体を堂々と露わにする本作は、女性を規範から解放するフェミニズム映画として私たちのもとに届けられる。そして映画の最後には、思いもよらない展開が待っている。



監督／エレネ・ナヴェリアニ 出演／エカ・チャヴレイシュヴィリ、テミコ・チチナゼほか  
2023年 ジョージア・スイス映画 1時間50分 2025/1/3よりヒューマントラストシネマ有楽町ほかにて公開

© - 2023 - ALVA FILM PRODUCTION SARL - TAKES FILM LLC

陰影の深い白黒映像によって綴られる、虚構と現実の境界線が曖昧な世界

### 『敵』

『時をかける少女』などで知られる筒井康隆による老人文学の映画化。77歳を迎えた元大学教授である儀助は、わずかな収入を得ながら預貯金の残りを計算して余生を送っている。慎ましくもていねいな古民家での暮らしを、亡き妻の信子、教え子の靖子、バーで出会った大学生だという歩美といった、彼を取り巻く女性たちが彩る。生者と死者、虚構と現実の境界線が曖昧になっていく儀助の世界が、陰影の深い美しい白黒映像によって綴られる。



監督・脚本／吉田大八  
出演／長塚京三、瀧内公美ほか  
2023年 日本映画 1時間48分  
2025/1/17よりテアトル新宿ほかにて公開

© 1998 筒井康隆／新潮社 © 2023 TEKINOMIKATA



『団結した民衆は決して屈しない！』と通称『不屈の民』は、1973年にチリで生まれたスペイン語のプロテストソングで、発表当時、チリの政治状況に注目が集まっていたこともあいまって世界的に有名になった。その2年後、アメリカの女性ピアニストであるウルスラ・オッペンスは、このプロテストソングをもとに変奏曲を作曲してほしいと、作曲家・ピアニストのフレデリック・ジェフスキに依頼。変奏

曲の歴史における最高峰のひとつ、ベートーヴェンの『ディアベリ変奏曲』に比肩するような作品を目指して1975年に誕生したのが『『不屈の民』変奏曲』だ。日本では高橋悠治による1978年の録音が代表的な名演奏として知られ、広く聴かれてきた。

まさにその高橋の録音を聴いて衝撃を受け、いつの日か挑もうと考えてきたのが大瀧拓哉だ。彼はヨーロッパで現代音楽のスペシャリストたちのもとで

研鑽を積み、20世紀以降の音楽に特化したオルレアン国際ピアノコンクールで2016年、優勝を果たした。ソロから室内楽まで、その時々求められる音楽に的確に対応できる幅広い表現力を持ち味で、帰国後も現代音楽を中心に活躍している。そんな大瀧の魅力と能力が最大限発揮されているのが本盤だ。音楽の歴史を総ざらいしているかと思えるほどの多彩さ（口笛も吹く！）をもった36回の変奏の個性を、

大瀧は徹底的に際立たせていく。バラバラになりそうだが、そのほうが終盤の変奏が盛り上がり、作品全体のまとまりもよくなるのだから驚かされた。これぞ新世代の新たな名盤といえるだろう。

併録されたノース・アメリカン・バラード第1～6番は人類の愚かな歴史を生々しく伝えてくれる作品で、ピアノと同時にチェーンを演奏する第5番は鳥肌なしに聴けない。

## 大胆かつ精緻なピアニズムで紡ぐ、個性際立つ変奏曲に驚嘆

『フレデリック・ジェフスキ：  
「不屈の民」変奏曲/ノース・アメリカン・バラード〈全6曲〉』

大瀧拓哉

コジマ録音 JAN 4530835 116004 ￥4,180



1987年生まれ。愛知県立芸術大学及び大学院を首席で卒業、修了。ドイツ国立シュトゥットガルト音楽演劇大学大学院、アンサンブルモデルン・アカデミー（フランクフルト）、パリ国立高等音楽院第三課程現代音楽科修了。フランス、イタリア、ブルガリア、韓国などで多くのリサイタル・音楽祭に出演。

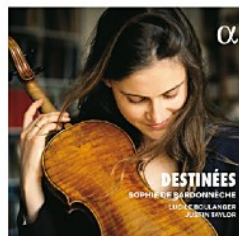


© onitron/2024

男性優位の音楽史に隠されていた才能が、その真価をあらわにする

『運命に選ばれて  
～フランス17・18 世紀の女性作曲家たち～』

欧米では近年、音楽の歴史を再考するべきだという問題意識が広がっており、19世紀以前に関しても白人男性以外の作曲家を再評価しようという動きが盛んだ。女性作曲家を掘り起こした本盤に収録された中で、J.S.バッハと同時代にルイ14世から寵愛を受けた作曲家ジャケ・ド・ラ・ゲールだけはまとまった作品が残っているが、それ以外は生没年が確定できない人ばかり。短い断片を聴くだけでも、彼女たちが作曲家として活躍できる可能性を秘めた存在であったことは明らか。社会がそれを許さなかっただけなのだ……。



ソフィ・ド・バルドネーシュ、リュシル・ブーランジェ、ジュスタン・ティラー  
ALPHA NYCX-10493 ￥3,300

古楽界の偉大な才能と情熱を受け継いだ、次世代の奏者によるドラマティックな演奏

『ブラームス：チェロ・ソナタ集』

演奏楽曲が作曲された頃に使われていたであろう楽器と、当時の演奏習慣によって作品の真の姿を炙り出そうとする“古楽”。このムーブメントを牽引してきた巨匠世代の子もふたり（チェロのエイミーはロジャー・ノリントンの娘、フォルテピアノのビートはヴィーラント・クイケンの子）の共演によるブラームスのソナタ集は、同曲の決定盤と呼ばれるような仕上がりに。それほど音量が大きくない当時のピアノだからこそ可能な溶け込み合い方で、作曲者が意図したであろうサウンドが蘇った。



エイミー・ノリントン、ビート・クイケン  
Et'cetera XKTC1820 ￥3,300



# DESIGN

グラフィックデザイナーでアートディレクター、菊地敦己の個展が開催中だ。青森県立美術館やPLAY! MUSEUMなどのビジュアルアイデンティティや、ミナペルホネンなどのファッションブランドのアートディレクション、そして装丁において印象的な表現で注目されてきた菊地。それと同時に、実験的なグラフィックデザインを発表する展覧会でも高い評価を得てきた。本展では改めて菊地のデザ

イン思想の一端に触れられる。会場は1階および区画をふたつに分けた地階、計3つの空間に異なるインスタレーションが展開されている。1階では、白地に黒の線と色を示す文字のみで構成された新作グラフィックが整然と配置されている。そうかと思いきや、作品の裏側へ回り込むと、文字の代わりに明快な色が配された面が現れる。同等の情報を持ちつつも異なる表面を持ったグラフィックの二面性

に、単純ながらも新鮮な驚きをおぼえるだろう。「グラフィックデザインは、役割として瞬間的に情報を伝えるためにつくっている、本来ならばじっくりと鑑賞するような空間的な展示には向かないと思っています。そこであえて、平面の中に奥行きをレイヤーを生み出し、つまりグラフィックデザインに内在されている“構造”を立体的な視覚体験として見せることで、壁から空間

へとグラフィックデザインが広がるような状況をつくろうと試みました。地階では、グラフィックが持つ質量や時間性、そして方向性・物質性を示す構造が見えるような展示で構成しています。『平面上の空間』と『空間上の平面』との関係性を感じてもらえれば」と菊地は話す。展示空間に身を置くことで、これまで無意識だったグラフィックの構造に気づかされる体験ができるに違いない。

## 平面が空間に存在する状況を、多彩なインスタレーションで展開

### 『菊地敦己 グラフィックデザインのある空間』

開催中〜2025/2/1 ギンザ・グラフィック・ギャラリー (ggg)  
☎03-3571-5206  
🕒11時〜19時 📅日、祝、12/27〜1/6  
www.dnfpfc.jp/gallery/ggg

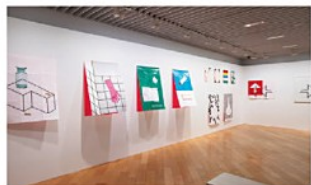


photo: Misumasa Fujisaka



photo: Misumasa Fujisaka

メインとなる1階のインスタレーション。矩形の作品は、表と裏で違う表情を見せる。ポスターをはじめとする、展覧会のキービジュアルに使われている蛍光ピンク色は、このインスタレーション内でも効果的に登場する。展覧会場の壁面に配置されている四角いピンク色の枠の関係性はどのように捉えられるか……。観察力と思考力を心地よく刺激されながら鑑賞したい。

名作家具をオリジナルの姿で復刻、シリーズ最新作は剣持勇デザインのチェア

### 「No.80」

多角的に家具を取り扱うコンプレックスユニバーサルファニチャーサプライが、日本の名作家具を復刻する「ヘリテージコレクション」をスタートさせた。最初に取り組んだのは、建築家・村野藤吾が都ホテルの設計時に合わせてデザインしたチェアとソファ。そしてシリーズの最新作として、デザイナー・剣持勇が秋田木工のために考案したチェア「No.80」を復刻した。時代を超える普遍的な美しさを未来へ継承する活動に期待が高まる。



復刻シリーズは今後も拡充する計画が進められている。「No.80」1脚 ¥146,300〜

コンプレックス  
www.complex-jp.net

落ち着いたある新たな空間で、クラフツマンシップを堪能

### カール・ハンセン&サン 東京本店

1908年創業のデンマーク王室御用達の家具メーカー、カール・ハンセン&サンが、東京本店を表参道に移転しリニューアルオープンした。ハンス・J・ウェグナーやコアラ・クリント、アルネ・ヤコブセンといったデンマークモダンの巨匠たちによる家具を世界へ送り出してきた、家族経営企業。その三代目が考案したストアコンセプトを、STUDIO noemの工藤健太郎が具現化した。熟練の職人技から生み出される名作をゆったりと体験できる。



表参道駅から徒歩2分というアクセスのいい店舗で、名デザインを直接体験できる。

●東京都港区北青山3-5-12 JRE青山クリスタルビル1F ☎03-6455-5522  
🕒11時〜19時 📅年末年始 www.carlhansen.com



今月の建築

## バンヤンツリー・ 東山 京都

DATA

京都府京都市東山区清閑寺霊山町7番地  
☎ 075-531-0500  
全52室  
⑤ セレニティ・キング／ツイン  
¥170,000～  
[www.banyantree.com/ja/japan/kyoto](http://www.banyantree.com/ja/japan/kyoto)

デザイン

隈 研吾

1990年、隈研吾建築都市設計事務所を設立。東京大学特別教授・名誉教授。自然と技術と人間の新しい関係を切り開く建築を提案。世界中でプロジェクトが進む。本建築ではデザイナー・アーキテクトを務めた。





ラグジュアリーホテルの開業が相次ぐ京都。2024年8月には、タイやインドネシアをはじめとする世界各国で、その土地に根付いたリトリートを展開するバンヤンツリーが初上陸した。場所は東山エリアの老舗「ホテルリょうぜん」の跡地。市内を一望できる自然豊かな高台に位置し、徒歩圏内には清水寺や高台寺、坂本龍馬などを祀る京都霊山護國神社といった歴史的な名所が集まる。

ホテルのテーマは「幽玄」。古くからあの世とこの世を隔てる境界のような場所とされてきた霊山の地にちなみ設定された。隈研吾をデザインアーキテクトに迎え、各分野のプロフェッショナルと協働し、その世界観を表現している。

隈が手掛けた外観は、シンボリックな大庇やルーバーが整然と並び深い軒など、伝統的な木造建築の意匠を随所に取り入れたシックな佇まいが特徴。この建築とともに幽玄の世界を体感できるのが、市内のホテルとしては唯一備える能舞台だ。裏手に広がる緑豊かな竹林と溶け合うように、視線を通すルーバー状の部材のみで構成。舞台そのものが水盤の上に浮かぶ姿は、まさに神秘的だ。

天然温泉を用いたスパ施設もあり、高低差がある敷地に臨む竹林や能舞台、京都の街並みなど多様な景色を楽しめるのも魅力。奥深い山に抱かれた静謐な場所で、特別な時間を過ごしたい。



photo: Nacasa & Partners Inc.



photo: Nacasa & Partners Inc.

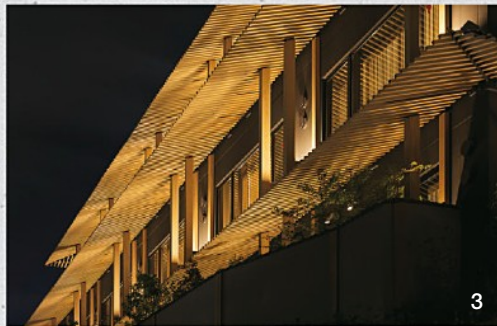


photo: Nacasa & Partners Inc.

1. デザインアーキテクトを務めた隈研吾建築都市設計事務所による能舞台。屋根や壁がなく、敷地裏の竹林や頭上の空と能舞台が一体化する。

2. ホテルは観光エリアから急な坂道を上りきった高台に立つ。エントランスからダイナミックにせり出したヒノキ材の大庇が来訪者を迎える。

3. ファサードは高低差を加味しつつ、周辺の参道から見上げた際の美しさを意識したデザイン。開口越しに日の移ろいなどの自然を感じられる。

4. 東山の山すそに、斜面林や竹林を背景として3つの庭園をプレイスメディアがデザイン。ロビー正面では丹波石のオブジェがゲストを迎える。

5. 全52室ある客室は、すべて橋本タ紀夫デザインスタジオが担当。世阿弥が著した『風姿花伝』の一節「秘すれば花」がデザインコンセプト。



photo: Nacasa & Partners Inc.



photo: Nacasa & Partners Inc.

喧騒から離れて過ごす、  
幽玄の世界を表す隠れ家



イラスト: 信濃八太郎 illustrations by Hattaro Shinano



© 2024 Sony Interactive Entertainment Inc. All Rights Reserved.

黒

「PS6」と評しても、  
過言ではない驚異の進化

## Sony PlayStation 5 Pro

ソニー プレイステーション 5 Pro  
(コンソールゲーム機)

●プレイステーション カスタマーサポート [www.playstation.com/ja-jp/support](http://www.playstation.com/ja-jp/support)

上: 高性能なスペックながら、高さは初期型PS5と同じ、幅は現行販売しているPS5と同じサイズを実現した。PS5 Pro用の本体カバーも今後、発売が予定されている。¥119,980

右: PS5と同じワイヤレスコントローラーを使用可能。ゲーム内の状況に応じて振動するのはもちろん、車のブレーキをかけたり、弓の弦を引く感触などもリアルに表現する。



ゲームの映像リアリティが、ここまで来たのかと驚嘆を禁じ得ない。プレイステーションの5代目、PS5も十分な描画性能だったが、ソフト・ハード両面における高画質の追求から生まれた新たな成果が、このPS5 Proだ。ゲーム規格は7〜8年ごとに世代交代し、その中間期にマイナーチェンジを据える。PS5は2020年デビューだから本機はそれに当たるが、画質向上ぶりは、

『マイナー』どころではない。『FINAL FANTASY VII REBIRTH』の森の中を進むシーン。木々の葉のディテールやゆらぎ、遠景のフォークス感など、PS5では画面が動くときと解像感が全面的に落ちてしまったりするが、PS5 Proは動画でもまったくシャープ。静止画と変わらずハイフォークスなのだ。さらに驚くのが『グランツーリスモ7』の車体の光模様。太陽光、高

層ビルなど周りの風景や車体後部への後続車の映り込みなど、車体から光が反射し煌めく様子がたいへん細密に、しかも猛スピードで描画されるのだ。ゲームプレイ時には60分の1秒、つまり0.0166666秒の間にすべての映像処理が完結し、リアルタイムにその結果を反映させている。技術的にはまず、GPU(画像処理LSI)性能を大幅に向上し、レンダリング速度が45%アップ。

次いで光量、輝度、角度、屈折、反射など光線のふるまいを描写するレイトラッキングの速度がPS5の2〜3倍に。さらにAIによる解像感向上。2Kのゲームを4Kにアップスケーリングする時に、細部の描写を強化した。『ソニーの革命児たち』というPS1の開発物語を上梓し、初代の画質を知悉していた私だが、CG技術の驚異的な進化に改めて目を見張ったのである。



## 麻倉伶士

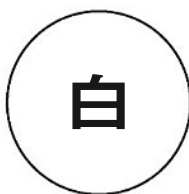
Reiji Asakura

デジタルメディア評論家。デジタルシーン全般の動向を常に見据える。著書に『高音質保証! 麻倉式PCオーディオ』(アスキー新書)、『パナソニックの3D大戦略』(日経BP社)などがある。





## 白モノ&黒モノ



### 鉄瓶と見紛うフォルムの 癒やしを与える電気ケトル

#### BALMUDA MoonKettle

バルミューダ ムーンケトル  
(電気ケトル)

●バルミューダ [www.balmuda.com](http://www.balmuda.com)



上：デザインのみならず、機能面でも優れている。ノズルは湯切れがよく、また、ハンドル部分は固定され、ねらったところに的確に注げるように設計されている。¥27,500

右：中国で古くから使われる「薬罐（やかん）」をベースにデザイン。ハンドルは鉄瓶から着想を得ている。東洋的なモチーフを採用している一方、世界中で使われることを想定した。

バルミューダが電気ケトルの新作を発表することは事前に知っていた。温度調節機能があることも。なぜなら案内状にそう書いてあったからだ。そしてなにも期待などしていなかった。いまさら、温度調節に何をすることがあるのだろうと。なのにプレス発表の会場で一目見た時に懐かしさで胸がいっぱいになり、お湯を沸かす姿に涙がこぼれそうになった。家電なのに鉄瓶のような姿をして、

ゆらめく炎があり、優しい音が時を刻んでいる。円を描く取っ手が道具としての機能美にあふれている。そう来たか。「ムーンケトル」という名もいいじゃないか。容量は900mLとたっぷり。電源ベースの右側のダイヤルを回すと50℃から100℃まで1℃刻みで温度調節ができる。設定した温度で30分間の保温も可能だ。改めてお湯を沸かしてみよう。ディスプレイに表示された温度を確認

し、スタートボタンを押せば湯沸かしが始まる。するとどうだ、ケトルの下に仕込まれたリングライトが光り、息をするようにゆらめいている。聞けば、LED部をわずかに凹ませることでケトルとの間に空間が生まれ、そこに炎があるかのように見えるのだという。耳を澄ませば心地よいサウンドが聞こえて、お湯が沸くまでの待ち時間を楽しみのひと時へと変化する。このサウンドは3種類用意

されていて、好みや気分に応じて変えることができる。お湯が沸くと音だけでなく、ライトがサークル状の光り方へと変化するので、遠くから見てわかるのも気が利いている。注ぎやすいように湯量に応じて持つ場所を変えられるのも、薬缶のような半円の取っ手ならではの。鉄瓶のような黒を選ぶか、安らぎを感じさせるマットな白を選ぶか。悩ましいところではある。



#### 神原サリー

Sally Kamihara

新聞社勤務を経て「家電コンシェルジュ」として独立。豊富な知識と取材をもとに独自視点で発信。東京・広尾の「家電アトリエ」をベースに、テレビ出演や執筆、コンサルティングなど広く活躍中。



そろそろ考えたい、身だしなみのこと

# グルーミング研究所

vol. 28

自分に合った整髪料は、  
どう選べばいいのか？

文：カ石恒元 (S/T/D/Y)  
写真：丸益功紀 (BOIL)  
イラスト：naohiga  
text by Hisamoto Chikaraishi  
photograph by Koki Marueki  
illustration by naohiga

男性の身だしなみに欠かせない整髪料。同じものを使い続けるという人も多いが、自分に合った選び方を美容師でユーチューバーの宮永えいとさんに聞いた。

宮永 ヘアスタイルもほかのグルーミングと同様に、清潔感が大切です。清潔感をなくす大きな要因は、放置。自分自身は毎日経過

を見ているので違和感を感じづらいいのですが、久々に会う人、初めて会う人には放置している清潔感がないと思われるくらいです。なので、整髪料は使う前提として、基本的なことですが、定期的に髪を切ることを改めて意識してもらいたいと思います。整った髪に自然なツヤ感を少し加えてまとめるだけで、好印象を手に入

れられるんです。

忙しいとおそろそかになりがちですが、大切なことですね。

宮永 そうなんです。今回は4種類の髪質に合わせた、お薦めのヘアスタイルと整髪料の組み合わせを提案したいと思います。

宮永 大きく分けて、「硬い毛」や「わらかい毛」「直毛」「クセ毛」の4つです。自分の髪質がどれかわからないという人は、たかさんの人の髪を常に触っている美容師さんに聞くのがいいと思います。

——それが現実そうですね。

宮永 まず硬毛の人は、扱いやすいショートミディアムヘアがいいと思います。ただ、襟足やサイドは刈り上げない限り、ピンピン跳ねたり立ち上がったたりして収まりづらいので、ファイバーが入っているセット力の強いスタイリング剤で、毛束を曲げながら抑えます。最適なのが、クールグリーススベリオールの「ポマードチャンドナ」。髪に馴染ませたら好きな分け目をつくり、コームを使って後ろやサイドに流してすっきりした印象に仕上げます。バキッと固まらないポマードなので、毛をコン



美容師／YouTuber

宮永えいと

## 今月の所長

Eito Miyanaga

フリーランスの美容師として活躍するかわらYouTubeチャンネル「大人男子LABO」を主宰し、男性の身だしなみや美容について日々発信中。メンズヘア&コスメブランド「レタッチ」を手掛ける。

ヤを与えてくれます。

——パリッとした好印象に仕上がります。

宮永 次は軟毛。ショートの長さで、前髪を上げて爽やかさを出すといいでしょう。普通のワックスを使うと重さで毛束が潰れてしまうので、芯になってくれるキープ力を持つジェルを選びます。

アリミノ メンの「フリーズキープ ジェル」がぴったりですね。

濡れた髪をタオルドライして、半乾きの状態で全体的にジェルをもみ込

んで自然乾燥させるだけで、前髪はドライヤーで乾かしながら好みのかたちにアレンジしましょう。

軟毛はしつかり固めると。

宮永 直毛はよくも悪くもヘアスタイルに動きが出ないのですが、スタイリングしやすいミディアムヘアに、毛流れを加えたセンターパートが合うと思います。リンクオリジナルメーカーズの「ヘア

バーム997」を使って真ん中分けにした後、髪を手櫛で後ろに流すだけ。セット力が強くなく、ナチュラルな毛流れを演出できます。最後はバームも含めたクセ毛で、清潔感というポイントで言う

と、ショートやミディアムがいいと思います。クセ毛もバームも潤いを与えて束をつくれれば自然に動きが出るので、スタイリング剤にセット力は不要です。レタッチの「ニューウェーブ」は、クセ毛とバームに特化したファイバーなどを含まないクリームワックス。髪に塗布して揉むだけでOKです。

——それぞれの髪質に適した整髪料の種類も知ることができて、とても勉強になりました。

宮永 整髪料に迷ったら、次のように考えてみるのがお薦めです。毛を「まとめる」なら水とオイルが主成分のポマード、「固める」なら水と合成樹脂のジェル、「流す」ならオイルのバーム、「動かす」ならクリーム状で扱いやすいワックス。きつと自分に合うものが見つかれば幸いです。





クールグリース スペリオール  
ポマードチャンドナ

セット力 ★★★★★  
ツヤ ★☆☆☆  
香り ★★★★★



適度なツヤ感と整髪力を持つ定番の水  
性ポマード。天然成分をベースにファ  
イバーを加えた、糸のように伸びるテ  
クスチャーが跳ねてしまう髪をしま  
り抑え、タイトなスタイルにまとめる。  
そのほか、クセのある髪や短髪のセッ  
トにも最適。220g ¥2,750/ORANGE  
INC. ☎03-3412-2121

COOL GREASE SUPERIORE

アリミノ メン  
フリーズキープ ジェル

セット力 ★★★★★  
ツヤ ★★★★★  
香り ★☆☆☆



すぐに固まらずベタつかないので自由  
なスタイリング、アレンジを楽しめる。  
ワックスの動かしやすさとジェルの洗  
い落ちやキープ力を両立させた“ハイ  
ブリッド処方”が大きな特徴。ツヤと  
動きのあるスタイルを長時間キープす  
ることができる。200g ¥1,760/アリ  
ミノお客さま窓口 ☎0120-945-334

ARIMINO MEN

レタッチ  
ニューウェーブ

セット力 ★★★★★  
ツヤ ★☆☆☆  
香り ★☆☆☆



ヘアサロン「fifth」と共同開発したパー  
マ・クセ毛に特化したクリームワッ  
クス。水分保持成分が髪に潤いを与え、  
天然由来のオイルがツヤ感を長時間キ  
ープする「スキンケア発想の保湿力」が  
魅力。強すぎない絶妙なセット力で自  
然な仕上がりに。90g ¥1,980/レタ  
ッチ <https://re-touch.tokyo>

RETOUCH

リンク オリジナル メーカーズ  
ヘアバーム 997

セット力 ★★★★★  
ツヤ ★★★★★  
香り ★★★★★



オリーブ油を主成分とした8種の天然  
オイルを採用し、頭皮や毛髪に潤いを  
与える。髪のパリュームアップやまと  
め髪など幅広いスタイリングに対応す  
る。ハンドクリームやネイルオイルと  
しても使用可能。「997」は、ゼラニウ  
ムやサンダルウッドが上品に香る。  
70g ¥4,290/リンク ☎03-5431-3775

LINC ORIGINAL MAKERS



丸藤葡萄酒工業

2023 ルバイヤート甲州醸し

自社管理の畑で育てた遅摘みのブドウを使用し、野生酵母で発酵。上槽後はコンクリートタンクとオーク樽、ステンレスタンクなど数種類のタンクで熟成させている。夕日を思わせるオレンジの色調が美しく、グラス映えもいい。心地よい渋みも感じられる豊かな味わいで、肉料理や揚げ物にも負けない飲み応えがある。スモークサーモンのような少レクセのある料理も難なく受け止めてくれるのが魅力だ。720mL ¥2,750/丸藤葡萄酒工業 ☎0553-44-0043



創業134年のワイナリーが醸す、  
飲み応えのある日本産オレンジワイン

# 自、プ 腹、ロ 酒、の

*Jibarazake of Professionals*

VOL.27

文: 山内聖子  
写真: 榊 水麗  
イラスト: 阿部伸二  
text by Kiyoko Yamauchi  
photograph by Mirei Sakaki  
illustrations by Shinji Abe



「遠藤利三郎商店」オーナー

遠藤利三郎

*Risaburou Endo*

もともと味噌問屋だった先代の倉庫をビストロ&ワインバーに改装し人気店に。J.S.A.認定ソムリエでもあり、日本輸入ワイン協会会長も務めるなど特に日本ワインの普及に尽力。遠藤利三郎商店 ● 東京都墨田区押上1-33-3 ☎03-6657-2127

## 【酔いおとも】



熱々の鶏の唐揚げには、  
ワインの五味が好相性

ワインのクリーンな酸味が鶏の唐揚げの脂をほどよく流し、豊かな果実味を余韻に残す。互いにおいしさを高め合う組み合わせ。「カレー粉を効かせてもいい」とのこと。

かつては味噌問屋であった遠藤利三郎商店。味噌蔵だった倉庫をワインが楽しめる本格ビストロへと改装し、人気店へと育て上げるとともに、数々のワインスクールで講師も務めるほどワインを愛してやまないのが、遠藤利三郎さんだ。20歳でワインの魅力に目覚め、愛飲歴は40年以上。日本のワイン業界でなくてはならない存在だが、「未だに先生と呼ばれるのはしっくりこない。あくまでもただのワイン好きであり、いち飲み手であり続けたい」と言う。

日常的にワインを嗜む、そんな遠藤さんが毎年ケース買いするほどお気に入りなのが、オレンジワインの「ルバイヤート甲州醸し」。昭和の中頃以降に一旦途絶えた「半醸し」という昔ながらの製法を、約6年前に復活させた丸藤葡萄酒工業のテーブルワインである。

「約5年前です。とあるワインの試飲会で出会い、おいしいのはもちろんのこと、甲州でもオ

レンジワインをつくっていること自体が面白く、惹かれました。甲州ワインというとスッキリと爽やかなイメージが強いと思うのですが、このワインはしっかりと果実味があり、ボリューム感があるタイプ。それでいてきれいでクリーンな口当たりが魅力です」

味幅が広いと、合わせる料理を選ばず家庭料理や普段の晩酌向きだと教えてくれたが、特に遠藤さんがおともに薦めるのが王道の鶏の唐揚げ。味つけはシンプルに塩味で、仕上げにレモンをギュッと搾って食べるのが好みだとか。「ワインはただのアルコールではなく、生産者の想いを飲むものです。グラスの向こう側に作り手の顔を思い浮かべながら飲むのが最高なんです。その至福の瞬間を味わいたい一心で、日々仕事を頑張っています」

日本の家庭料理に合う日本ワイン。幸せに一日を締めくくるために、常備したい一本だ。



## 1 スカック(スクワット カメアリ アートセンター)

高架下の広大な空間に出現する、圧巻の“見える倉庫”

JR常磐線の亀有駅から綾瀬駅間の高架下に、芸術文化を堪能できる広大な空間が出現した。訪れる人々が、アート、デザイン、建築、食、音楽などに出会いながら学びとなる場所を目指す。最大の見どころは、数十mにわたって無数の書籍が並ぶ巨大な本棚だ。アートブック専門の卸業者、twelvebooksが世界各国の出版社から収集した書籍を保管する倉庫として機能しており、それを開放している。施設内にはレコードショップやカフェ、芸術作品の展示もあり、五感を刺激され続ける場所だ。

SKAC(SKWAT KAMEARI  
ART CENTRE)

●東京都葛飾区西亀有3-26-4  
◎11時～19時 ◎月、火  
Instagram@skwat.site

1. 単管足場を使用した仮設的なテイストが特徴の本棚。書籍は購入も可能だ。 2. レコードショップ、Vinyl Delivery Service(本棚の左奥)はロンドンの実店舗に続く日本初の店舗。約5000点が揃う。 3. フリースペースにはカフェが併設。建築資材を実験的に組み合わせてつくった椅子やテーブルで寛げる。



# New & in the News

愉しみは新しい場所にある

写真:河内 彩 photographs by Aya Kawachi



## 3 ルメール エビス

日本家屋の趣を活かした、  
心安らぐ自宅のようなショップ

フランス発のファッションブランド、ルメールの新店舗が恵比寿に誕生。パリ、ソウルに続く3店舗目の旗艦店となる。閑静な住宅街に佇む1960年代に建てられた日本家屋がその場所選ばれたのは、家庭的な温もりを感じさせるブランドのものづくりと共鳴したため。アーティスティックディレクターであるクリストフ・ルメールとサラ・リン・トランは細部に至るまでしつらえにこだわり、可能な限り元の造りのまま、壁には伝統的な日本の漆喰や竹製のすだれ、障子を施しながらヨーロッパのデザイナーによる芸術作品やヴィンテージ家具を整然と配置している。自宅にいるかのように心安らぐ空間で服を選ぶという、至福の時間を過ごしたい。



1. 建物はもともと個人邸宅として建てられた。筆筒や机、棚には至極自然に商品をディスプレイ。 2. 窓からの日差しが心地よい2階。パリ店と同様、床にはアバカマットが敷かれている。

LEMAIRE EBISU

●東京都渋谷区恵比寿3-21-1  
◎11時～19時  
不定休  
www.lemaire.fr

## 2 バンライ ハンテン

スパイスが利いた、  
絶品の台湾家庭料理

文京区水道・小日向エリアにあるビルに入居する小さなホテル、ショートスライド。この場所を手掛けた建築家のクマタイチが、同建物の1階に台湾ダイナーをつくった。店名はかつて地元で愛された中華料理店「萬来飯店」から取ったもの。神楽坂にある人気台湾レストラン出身の台湾人シェフが、現地ならではのスパイスを使った家庭料理を提供。「ピーナッツの八角煮」「冷製鶏モモ葱ソース」「ほうれん草のルーローかけ」など、クラフトビールやナチュラルワインに合う小皿メニューが多いのも特徴だ。さらに、昼間は同じフロアでコーヒースタンドも営業。地元の人が集いやすく、ホテルの宿泊者も一息つける憩いの場になりそうだ。



1. 街に開いた一面ガラス張りのつくりで、気軽に入店できる。 2. クマタイチお薦めは、胡椒多めの「塩レモン焼そば」(¥1,080、中央)と、五香粉が利いた「チキンフリット」(¥1,000、左)。ビール¥1,150

BANRAI HANTEN

●東京都文京区水道2-19-11  
☎080-3555-6202  
◎18時～23時(水～金) 12時～14時、16時～22時(土、日、祝)  
◎月、火  
Instagram@banrai\_hanten







## 東京車日記

いっそのままクルマりたい！

VOL.100

# メルセデス・ベンツ G 580 with EQテクノロジー エディション1

MERCEDES-BENZ G 580 WITH EQ TECHNOLOGY EDITION 1

DRIVER

青木雄介  
YUSUKE AOKI

編集者。長距離で大型トレーラーを運転していたハードコア・ドライバー。フットボールとHipHopとラリーが好き。愛車の峠仕様1992年製シボレー・カマロ改は、手に入れてから15年目を迎え、現在は獵犬を山野に連れ出せるシューティングブレークを物色中。

アイツのGがエレクトリック!?  
デジタルサウンドで結末は「はっぴいえんど」

ほぼカタチを変えずに45年。メルセデスのGクラスは相変わらずの人気ぶりですよ。「そんなGクラスもいつかは電動化か……」とぼんやり考えていたXデーは意外に早く来た。そのEV、「G 580」は現行モデルのフレームを流用して、外観はほぼそのまま。運転した感触も間違いなくGクラス。アクセルを踏んだ感じはV8の「G 63」に似ていたけど、バッテリー搭載位置による低重心化が効いていてオンロードの身のこなしはとてよくなっていた。

個人的にGクラスのEV化とは、デジタルサウンドが有機的なバンドサウンドを再現しつつ、クリエーションの無限さを武器にさらに進化したって印象。たとえるなら、日本のバンドサウンドの極北に立った「はっぴいえんど」からテクノユニットYMOを結成した細野晴臣氏が、デジタル機材で「はっぴいえんど」を進化させたらこうなるんじゃないか、みたいな（笑）

もとより峠に行く気は起きないクルマだったけど、このGクラスはワインディングを走るのがめち

やくちや楽しかった。ドライブモードを「スポーツ」にしてアクセルを踏み込むといい感じで、ススッと抜け感が出てくるのね（笑）。デジタル信号でそれぞれ4つのモーターを駆動させるので微細な精度でトルクをコントロールできるし、峠だってステアリングをフラットに保てくれる。この「G 580」の目玉機能である、オフロードで車体をその場で最大2回転できるG-TURNは、まさにモーター独立制御のトルクベクタリングの成せる技。

各輪のモーターの駆動トルクを個別に制御することで、後ろタイヤを中心に旋回1回転することができるG-STEERINGも含めて、EVでしかありえないコントラールな走りがオフロード性能を高めている。ギミックとして、SNS映えるマーケティング的な狙いが大きいとは思うものの、メルセデスが「EV化の最大のメリットはオフロード性能の向上」と言っている点は深く頷かされた。そしてこのクルマは、長年愛され続けてきたGクラスらしきにも磨きかけた。

背筋を伸ばすようにして座り、一段高い視座からボンネットをとらえ、三人称視点の重機がモビルスーツを運転する気分がアクセルを踏む。ハンドルは重く、ゆれ方も威厳たっぷりで自信に満ちている。サウンドはゴロゴロとV8エンジン音を模した音とバイブレーションがあつて、足まわりはタイヤが圧着するようにぬらぬらと路面をなぞる。

とても上質な乗り心地だし、全然ゆるくないのよ。トルクニュートラルのコースティングを意識しつつ、このクルマでハンドリングにアクセルを調和させるワンペダルドライブをする面白さはスポーツカー的。思わず「めっちゃハードコア……」と唸ったわけ。

だからこそ「Gクラスでなければいけない」というG党にこそ、この「G 580」を薦めた。歴代Gクラスがつないできた乗り味が、エレクトリックによって深まり進化しているのを感じるはず。Gの代名詞、ウォーレン・Gにこじつけられ新しい「Gフランク・エラ（時代）」の始まり始まりって感じかな（笑）





1

1. 四輪独立モーターを備え、渡河水深が850mmと大幅に高くなった。  
2. ブルーをアクセントにしたインテリア。中央にオフロード系の専用操作スペースがある。 3. エンジンルームにはG-ROARと呼ばれるV8サウンドを奏でるスピーカーが内蔵。  
4. 伝統のラダーフレームに大容量バッテリーを組み込むことで車両の低重心化を実現。 5. 背面はスペアタイヤに代わりデザインボックスになり充電ケーブルが格納されている。

全長×全幅×全高：4,730×1,985×1,990mm  
モーター：交流同期式×4基  
最高出力：587PS  
最大トルク：1,164Nm  
駆動方式：4WD  
航続距離：530km (WLTCモード)  
車両価格：¥26,350,000～

メルセデスコール  
☎ 0120-190-610  
[www.mercedes-benz.co.jp](http://www.mercedes-benz.co.jp)



3



2



5



4





## 小山薫堂の 湯道百選

写真:杉本 圭  
文:小山薫堂  
photographs by Kei Sugimoto  
text by Kundo Koyama

第百回

〈京都府某所〉  
**慈湯釜**  
JIYUGAMA

“湯道は、ここからはじまる。”

湯道百選の記念すべき百湯目はここ以外にはありえない。総本山となる風呂をつくりたいと考えたのは、コロナ禍で社会全体が息苦しさに包まれていた3年前。湯道創設の感恩人、大徳寺真珠庵第二十七世住職の山田宗正氏に相談したところ、京都某所にある特別な場所を紹介いただいた。しかも設計から施工まで引き受けてくださると仰る。こんなにありがたいことはない。すべてを委ねた。

天に向かって青竹が伸びる藪の隙間に釜風呂を設けるとのこと。付近は京都随一の水脈を持つ名水の一等地。湧き水を薪で沸かすため、大和重工から五右衛門風呂を取り寄せ和尚様の友人である土工と庭師が加わり、少数精鋭で石造りの露天風呂を完成させた。畳よりも巨大な石は祇園祭りの山鉦の

辻回しをヒントに竹を敷いて運んだという。

湯開きの日は、和尚様自らが湯を沸かしてくださった。やわらかな湯に身を沈め天を見上げると、風に吹かれ左右にしなる青竹の先に小さな青空があった。薪の燃える音に混じり聞こえる笛鳴りは開湯を祝福しているかのよう。地下水と釜火と竹林の調和から生まれた湯は温泉を凌ぐ心地よさ。それでいながら、煙突脇に祀られた跋陀婆羅菩薩（ばったばらぼさつ）が微かな緊張感を漂わせる。

この湯をいつまでも慈しみたいとの想いから「慈湯釜」（じゆうがま）という名が閃いた。ここは、湯道はじまりの湯。湯の道を極めようとする人々を招いて、いつかここで大湯道会を開こうと企んでいる。



右：京都某所にある慈湯釜。住所、入浴方法は湯の道を極めし者のみに伝えられる。五右衛門風呂まわりの左官仕事は、挟土秀平氏率いる職人社秀平組によるもの。跋陀婆羅菩薩とは、お風呂で悟りを得たと言われる仏様。左：湯びらきとなる開湯日に、読経をしてくださる山田宗正和尚様。



次号は1月28日発売

## NEXT ISSUE

次世代の注目作家を一挙に紹介！

# 2025年に見るべき 現代アート

いま現代アートのシーンで、次世代の作家たちが面白い。  
3DモデリングやAIを駆使した技法、アニメの影響を受けたタッチ、  
伝統的な書を発展させた表現など多様化はますます進み、  
煌めく才能と可能性にあふれた多くの作家が羽ばたこうとしている。  
次号では、既成概念にとらわれず“いま”を鋭く感じ取り、  
独自の表現に挑みつづける新世代のアーティストたちを一挙に紹介。  
さらに注目作家の動向や足を運ぶべき展覧会&アートフェア、  
新設の美術館・ギャラリーをピックアップ。  
現代アートを楽しむ基礎知識まで話題を広げて紹介する。  
来るべき2025年、現代アートに注目せよ！

編集長	石川康太
副編集長	飯島摩美
編集	富田秀人 宇佐美里圭 栗山 遼 小林 新 岩澤佑史
制作進行	今野 匡
アートディレクター	尾原史和 (BOOTLEG)
デザイナー	大橋悠治 佐原 真 福田拓真 (BOOTLEG)
Pen Online 編集	法貴直子 杉浦 周 小川拓也 開發祐介 谷口翔子 江澤禎子 井上敬秀 杉川日芽乃 松岡知美
プロデューサー	岡本綱雄
パリ支局長	高田昌枝
編集局長	中西貴也
発行人	菅沼博道

最新の情報は  
Pen Onlineでチェック！  
[www.pen-online.jp](http://www.pen-online.jp)





